

荒玉社周辺遺跡

—平成13年度～平成17年度 茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業
に伴う緊急発掘調査報告書—

2006.3

茅野市教育委員会

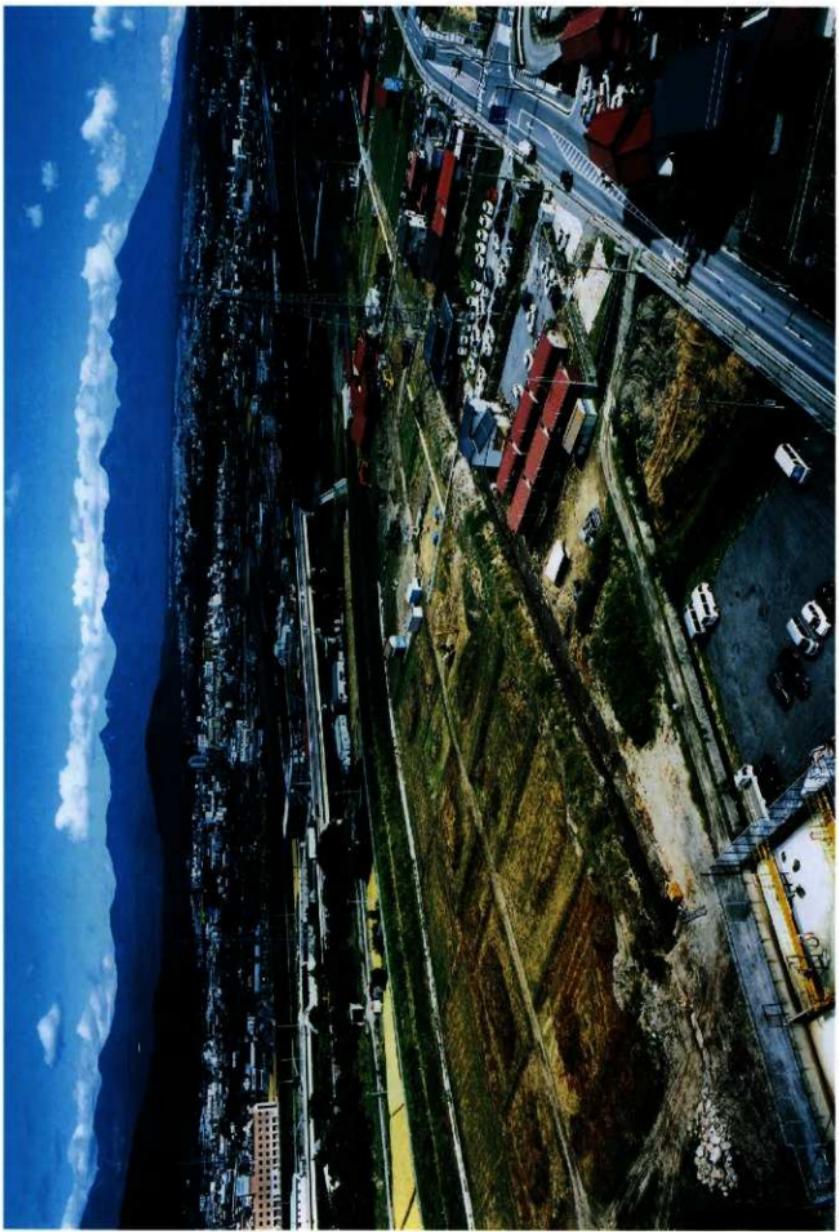
ARATAMASHASHUHEN - SITE

荒玉社周辺遺跡

——平成13年度～平成17年度 茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業
に伴う緊急発掘調査報告書——

2006.3

茅野市教育委員会



龍王社周辺道路と八ヶ岳



出土したカワラケ



出土した陶器



出土した磁器



出土した漆器

序 文

このたび、茅野市安国寺姫宮地区画整理事業の実施に伴い、荒玉社周辺遺跡の発掘調査を茅野市教育委員会が行いました。

荒玉社周辺遺跡は諏訪神社上社の前宮の前方に位置し、古文書により「大町」と考えられる地域です。平成4年に安国寺バイパス建設に伴い発掘を行った結果、安国寺の一部が検出されました。今回発掘を行った場所は安国寺と前宮の中間に位置し、町場の他、家臣の屋敷地が検出されることが予想されました。

発掘の結果、13年度は宮川付近からは大量のカワラケや木製品が出土し、安国寺側からは2棟の礎石建物址が検出され、宗教的な場であったことがわかりました。特に木製品は、漆器の椀や皿や曲物など、茅野市内ではあまり出土しない食器類が出土し、当時の人々の生活の復元を考える上で重要な遺物であると思われます。

14年度には3棟の礎石建物址が検出され、長期にわたって生活が営まれた遺跡であることが確認されました。とりわけ、天目茶碗などの茶道具が数多く出土しており、室町時代の文化的な中心地であることがわかりました。

遺跡の規模や出土遺物から、室町時代後期における諏訪地方の中心的な遺跡で、古文書からも当時の生活の状況がわかる、重要な遺跡です。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの関係諸機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成18年3月

茅野市教育委員会
教育長 牛山 英彦

例　　言

- 本書は、茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合理事長 小海長衛と茅野市長 欠崎和広との間で締結した「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う長野県茅野市官川安国寺荒玉社周辺遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合よりの委託金を得て、茅野市教育委員会が平成13・14年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第2節5として記載してある。
- 発掘調査は平成13年度は4月2日から平成14年1月4日まで、平成14年度は5月27日から7月3日まで、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成17年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。
- 発掘調査から本書作成までの作業分担は第Ⅰ章第2節5に記してある。また、執筆は柳川が行った。
- 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
- 土層に色調については『新版標準土色帖』(1995年版)の表示に基づいて示した。
- 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市尖石繩文考古館で収蔵・保管している。

凡　　例

本書の図で用いたスクリーントーンや記号の意味は下記のとおりである。

凡　　例

スクリーントーン



略　語

土	……土坑	中国…輸入陶器
溝	……溝址	須……須恵器
井戸	……井戸址	瓦……瓦器
甌石	……甌石建物址	白……白磁
手	……手づくねカワラケ	青……青磁
灰	……灰軸	青白…青白磁
鉄	……鉄軸	
褐	……褐軸	
志	……志野軸	

目 次

序 文
例 言・凡 例

茅野市教育委員会教育長 牛山 英彦

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 発掘調査の経過.....	1
1. 発掘調査の事務経過.....	1
2. 調査区の設定.....	2
3. 発掘調査の経過.....	2
4. 調査日誌（抄）.....	2
5. 調査組織.....	4
第Ⅱ章 遺跡の概要.....	5
第1節 遺跡の概観.....	5
1. 遺跡の立地と地理的環境.....	5
2. 遺跡の歴史的環境.....	5
3. 周辺の遺跡.....	10
第Ⅲ章 発掘された遺構.....	15
第1節 1区の遺構.....	15
1. 1区の層序.....	15
2. 発掘された遺構.....	15
第2節 2区の遺構.....	31
1. 2区の層序.....	31
2. 発掘された遺構.....	31
第3節 3区の概要.....	47
第4節 4区の遺構.....	49
1. 4区の層序.....	49
2. 発掘された遺構.....	49
第5節 5区の遺構.....	71
1. 5区の層序.....	71
2. 発掘された遺構.....	71
第Ⅳ章 発掘された遺物.....	86
第1節 土器・陶磁器.....	86
第2節 木製品.....	99
第3節 石製品.....	105
第4節 金属製品.....	107
第Ⅴ章 調査の成果と課題.....	111
第1節 発掘調査の成果.....	111
第2節 歴史事象と遺跡の性格	113

例　　言

- 本書は、茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合理事長 小海長衛と茅野市長 次崎和広との間で締結した「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した茅野市西茅野土地区画整理事業に伴う長野県茅野市宮川安国寺荒玉社周辺遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合よりの委託金を得て、茅野市教育委員会が平成13・14年度に実施した。調査の組織等の名簿は第I章第2節5として記載してある。
- 発掘調査は平成13年度は4月2日から平成14年1月4日まで、平成14年度は5月27日から7月3日まで、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成17年3月まで茅野市教育委員会文化財課において行った。
- 発掘調査から本書作成までの作業分担は第I章第2節5に記してある。また、執筆は柳川が行った。
- 調査区の基準点は国家標準基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅳ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
- 土層に色調については「新版標準土色帖」(1995年版)の表示に基づいて示した。
- 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市尖石繩文考古館で収蔵・保管している。

凡　　例

本書の図で用いたスクリーントーンや記号の意味は下記のとおりである。

凡　　例

スクリーントーン

	焼土
	粘土・貼り床
	炭化物
	カワラケ溜り
	木溜り
	集石

略　語

土	……土坑	中国…輸入陶器
溝	……溝址	須……須恵器
井戸	……井戸址	瓦……瓦器
礎石	……礎石建物址	白……白磁
手	……手づくねカワラケ	青……青磁
灰	……灰釉	青白…青白磁
鉄	……鉄釉	
褐	……褐釉	
志	……志野釉	

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の経過

1. 発掘調査の事務経過

・平成12年度

平成12年9月29日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業 荒玉社周辺遺跡発掘調査委託を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金8,500,000円で発掘調査を行うことになった。

平成13年2月8日 発掘方法が本調査から試掘調査になったため、事業費を600,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

平成13年3月15日 調査が終了し茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合へ「発掘調査業務完了届」を提出。

・平成13年度

平成13年4月2日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金29,000,000円で発掘調査を行うことになった。

平成14年3月8日 工事方法の変更により、事業費を25,000,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

・平成14年度

平成14年5月13日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金4,000,000円で発掘調査を行うことになった。

平成14年11月13日 都市整備課との協議の結果、発掘調査報告書を平成15年度に刊行することになり、事業費を1,100,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

・平成15年度

平成15年4月1日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金2,900,000円で発掘調査を行うことになった。

平成16年1月29日 都市整備課との協議の結果、教育委員会側の工程変更により、発掘調査報告書を平成16年度に刊行することになり、事業費を50,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

・平成16年度

平成15年4月1日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金2,850,000円で発掘調査を行うことになった。

平成16年1月29日 都市整備課との協議の結果、教育委員会側の工程変更により、発掘調査報告書を平成17年度に刊行することになり、事業費を483,000円に変更し、変更委託契約書を締結。

・平成17年度

平成17年5月23日 「茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業荒玉社周辺遺跡発掘調査委託」を茅野市長 矢崎和広と茅野市安国寺姫宮土地区画整理組合 理事長 小海長衛との間で締結し、委託金

2,850,000円で発掘調査を行うことになった。

平成18年3月16日 都市整備課との協議の結果、事業費を1,000,000円に変更し変更委託契約書を締結。

2. 調査区の設定

調査に先立ち、平成12年10月から11月にかけて茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業地内の姫宮・荒玉社周辺・平遺跡の試掘調査を行った結果、荒玉社周辺遺跡内より遺構や遺物が濃密に検出された。これにより事業地内の発掘調査範囲を確定した。この時、遺構は建物址の一部と思われる柱穴が確認され、遺物はかわらけや瀬戸美濃製陶器・輸入磁器が検出された。平成13年1月16日に長野県教育委員会文化財・生涯学習課と茅野市土地整備課・茅野市教育委員会との間で協議がもたられ大半が埋土になることがわかり、工事により削平されることが予想される道路敷部分の発掘調査を行うことになった。調査面積は5,000m²である。

グリッドについては調査範囲内に設定し、遺跡の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標x = -968.0000、y = -32406.192を基準点とし、この基準点から一辺5mのグリッドを設定した。ベンチマークは772.308mである。

3. 発掘調査の経過

・平成13年度

表土剥ぎを4月10日から開始し、発掘調査を終了したのは12月28日だった。遺跡は源訪神社上社前宮後背の山から押し出されてきた崩落土や宮川から供給される河原石で遺跡の大部分を構成している。遺構は崩落土や宮川の河原から供給される礫や、宮川の洪水が原因と思われる泥が厚く堆積しており、さらに冬季をのぞいて水が常に噴出しているため、発掘調査は困難を極めた。発掘の測量は空中写真測量の他に日常的な測量方法としてやり方や平板測量を状況に応じて行った。遺跡の記録は柳川・野澤・大宮・若林・武居が行った。空中写真測量は株式会社 共同測量社によって行われた。測量後、区画整理組合に現場を引き渡した。

・平成14年度

発掘調査を開始したのは5月25日から開始し、発掘調査を終了したのは7月3日だった。上層は水の湧出はなかったが、掘り進めるに従って水の湧出が見られた。遺跡の記録は柳川・野澤・大宮が行った。現場終了後、区画整理組合に現場を引き渡した。

・平成15年度 木製品の整理作業を中心に行う。古瀬戸陶器の分類を助瀬戸市埋蔵文化財センターの藤沢良祐氏に依頼する。

・平成16年度 木製品の保存処理を中心に事業を行った。

・平成17年度 遺物や遺構の分析を行い、報告書の作成を行った。

4. 調査日誌（抄）

・平成13年度

3月27日	1区の表土剥ぎを始める。カワラケが若干出土する。	4月28日	主にカワラケ溜まりの取り上げを行う。土坑であると思われる。付近から銭が出土。
4月3日	機材搬入を行う。	4月30日	土層観察を行う。遺跡北東側から漆皿出土。この付近は川のような感じで多くの木が出土している。広い範囲で骨が出土している。
4月9日	1区の表土剥ぎ終了。		
4月27日	カワラケ溜まりが出土した。		

- 5月2日 漆器が再び出土。溝2の写真撮影を行う。
- 5月18日 この日からポンプを入れて、遺跡内からの排水を行う。
- 5月21日 井戸址らしい遺構が見つかる。
- 6月28日 2区の表土剥ぎを始める。湧水が多く難航する。
- 7月3日 表土剥ぎ終了。
- 7月11日 調査区南側は湧水が酷いが、炭が濃密に散布し、カワラケの破片が多く出土していた。
- 7月16日 骨の取り上げを行う。溝の中から文字の書いてある木製品が出土した。
- 7月24日 3区の表土剥ぎを始める。前宮に近いところから遺物が見られるが、東側からは遺物が見られなくなる。湧水が非常に多い。午後から2区の表土剥ぎの続きをを行う。溝3から穿孔のあるカワラケが出土。
- 7月26日 2区の表土剥ぎ終了。鉄塔の脇から常滑窯謫が検出された。
- 7月29日 3区でカワラケ類が多く出土する。3区の調査は終了。
- 9月19日 五味裕史氏来跡。
- 9月22日 午前中、地元の人たちを対象に遺跡見学会を行う。40人ほどの見学者があった。
- 9月28日 2区の空中写真測量を行う。
- 10月4日 写真撮影と1/100の全体図の作成。2区の調査を終了する。
- 10月10日 4区の表土剥ぎを始める。
- 10月16日 南西側の交差点付近から多くの炭や土間状遺構とともに、礎石が検出される。
- 10月25日 笹本正治・深沢佳人・鴨川達夫の3氏を・平成14年度
- 5月13日 下水工事の立会調査を行う。出土遺物や遺構は見られなかった。
- 5月14日 U字溝の工事の立会調査を行う。浅い場所で止まっているため、遺構面までには届かず。
- 5月21日 5区の表土剥ぎを始める。
- 5月23日 表土剥ぎ終了。機材撤入。
- 5月27日 作業員を入れて作業。柱穴が検出される。
- 現場に案内。
- 10月26日 323号土坑から銭5枚が出土する。324号土坑からは多くのカワラケと木が出土した。礎石建物址の貼り床下から大量のカワラケが出土した。
- 10月30日 漆器が2点出土。
- 11月5日 磂石建物址内のカワラケ溜まりの遺物をすべて取り上げる。また、北東側には粘土が集中するところが見られる。
- 11月13日 溝7から木製卒塔婆2点出土。墨書きが確認される。北西側から突き固められた状態で中津川産の壺1個体出土。
- 11月17日 4区北西側の表土剥ぎを始める。荒玉社の移転に伴い立会調査を行う。荒玉社の下層は砂地で遺構・遺物は何も検出されなかった。
- 11月26日 信州大学笹本正治氏、学生とともに来跡。
- 11月29日 溝8の南東側で漆器の鉢が出土する。溝9内でも漆器が出土する。
- 11月30日 4区南東側中央部の泥の所を下げる。礎石建物址3から新たな礎石が出土する。
- 12月5日 水がかなりひいたので、下層まで調査ができるようになった。
- 12月17日 遺跡の中央部から大量の箸が出土する。
- 12月22日 雪掻きを行う。午後は発掘調査。
- 12月25日 空中写真測量。雪のため、清掃が大変だった。
- 12月26日 溝8の溜まりになっている部分の木をすべて取り上げる。溝8内から人形が出土する。
- 12月27日 井戸址の調査を行う。
- 1月16日 木の選別、機材撤収
- 1月26日 現場の撤収作業
- 5月31日 3層ほど確認面があることがわかる。
- 6月6日 濑戸美濃製陶器が多く出土する。調査区北西部を中心に釘が多く出土する。建物址周辺から漆器の破片が多く出土する。
- 6月7日 下部の礎石が検出される。遺物の出土量は激減する。
- 6月14日 3号溝址が礎石建物址の下まで統いてい

る事が確認された。

6月17日 遺跡の掘り下げを行う。

6月21日 最下層の礎石が検出される。

6月27日 一つの礎石付近から鐵が固まって出土し

た。

6月28日 小林純子・牛山一貴両氏が来勝。

7月2日 発掘調査を終了する。

7月3日 撤収作業を行う。

5. 調査組織

・平成12・13・14・15・16・17年度

調査主体者 両角源美（教育長）（～平成16年9月30日）

牛山英彦（教育長）（平成17年10月1日～）

事務局 宮坂泰文（教育次長）（～平成13年3月）

伊藤修平（教育部長）（平成13年4月～平成15年3月）

宮坂耕一（教育部長）（平成15年4月～）

文化財課 矢崎秀一（課長）（～平成14年3月） 小平廣泰（課長）（平成14年4月～）

文化財係 繩創幸雄（係長）（～平成13年3月） 守矢昌文（係長）（平成13年4月～）

守矢昌文（～平成13年3月） 小池岳史 百瀬一郎 小林健治（～平成15年9月）

柳川英司 金井美代子（平成13年4月～平成14年3月） 大月三千代（～平成13年4月・平成14年4月～）

調査担当者 柳川英司

発掘調査・整理作業協力者

稻垣幸子 繩創澄雄 牛山義一 海老原とみ 大宮 文 熊谷 敦 栗原 昇 小海栄子

小平 寛 武居八千代 田中達朗 茅野益嗣 中村秀敏 長田 真 名取一也 野澤みさ子

花岡照友 原 徳治 北条嘉久男 増木三訓 柳沢九五子 柳沢 宏 吉田キヨ子 若林洋平

渡辺郁夫

基準点測量：株式会社 両角測量（平成13・14年度）

遺構測量委託：株式会社 共同測量社（平成13年度）

遺物保存処理：株式会社 京都科学・株式会社 文化財ユニオン

出土遺物の時期については次の方々に御教示を得た。

陶器：藤澤良祐（愛知学院大学・当時 滋賀県埋蔵文化財センター）

須恵器：市川隆之（長野県埋蔵文化財センター）

磁器：守矢昌文（茅野市教育委員会）

発掘調査期間中、遺物整理期間中、茅野市安国寺姫宮地区画整理事合ならびに地権者の方々にご助力をいただき、調査を円滑に進めることができた。謝意を表し記したい。長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事原明芳氏・平林 彰氏・上田典男氏はじめ、下記の方々より有益なご指導・ご助言をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

青木正洋 秋本太郎 市川隆之 牛山一貴 小林純子 小林光男 小松隆史 小松有希子 五味裕史

佐々木満 笠本正治 清水 豊 高見俊樹 竹内靖長 田中 総 田中慎太郎 田中洋二郎 中島 透

藤澤良祐 藤本史子 降矢哲男 三上徹也 宮坂 清 宮坂光昭 山下孝司 山田武文

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概観

1. 遺跡の立地と地理的環境

荒玉社周辺遺跡（319）は茅野市宮川安国寺2024番地他に所在する。この場所は茅野駅から約1.3kmに位置している。本遺跡は守屋山系より流れ出る水眼川や干沢川が押し出した土砂によって形成された扇状地と宮川によって運ばれた土砂によって形成された河原地の接点に位置する沖積地である。地山の礫の主体は安山岩が多く含まれていたが、中には少量ではあるが閃綠花崗岩が確認される。現在は、礫層の上部に盛り土をして耕地に利用している。そのため遺構確認面まではかなりの深さがあった。遺跡の西側には、中世に大祝職方氏の居館があった前宮神殿があり、宮川を挟んで北側の永明寺山麓には上原城が見える。また、安国寺区内には、高遠からの要路である枝突峠から伸びる秋葉街道があり、歴史的にも重要な位置にある。

2. 遺跡の歴史的環境

荒玉社 荒玉社周辺遺跡は、遺跡内に「荒玉社」があるのでこの名称となった。荒玉社は古くから諏訪神社関係文書に見られる神社で、諏訪上社の神事では重要な位置を担っていた。荒玉社が最初に見える史料は、建武2年（1335）の『大祝職位事書』（新信叢7-82）である。中世の荒玉社の位置については『大祝職位事書』に次の記述がある。

（史料1）『大祝職位事書』文明17年（1485）閏3月27日（新信叢7-94・95）

神長所務之次第

一楓の宮の供もつ、まハリに引まハシ、す地こもしきて布かりとの、

一御門戸やにて、五官布五、雅楽十人二ちやうつ、しきて、御こくけつり」ものしたて、両所ともに畢て」のち、備もの引す、布等ハいつれも「神長かたへ取候、先例見へたり、

御神事あり、御肴酒のおもむき別書に」見えたり、御酒も過、御神樂も過候は、御手水「御つかハセたまひて割より御正面へ御参」雅楽、安大父又ハ小萬ニ御門をひらかせて」うちへ大祝殿御参候、神長御授申御幣大祝殿ニ」もたせ申、秘法印咒あり候、御かしき所へ」御参候御例アリ、下宮江御参候、法印別紙見えたり、「出早御参候、法印別紙見えたり、路次次第は如常也、」さて馬乗若宮御参候、彼社有口伝、其後職並江」御社参候、路次なか沢をうち上で御参候、御法咒^{御事}、玉尾、稚侯、漸江御参候、印咒すきて乗馬会敷之」ときの路次のことく御社参候、つるろしをうち下し」南へむまを折、磯並下馬上江うちおろし、高

此時候風雲降水霧気、疏^{ヨリ}下馬

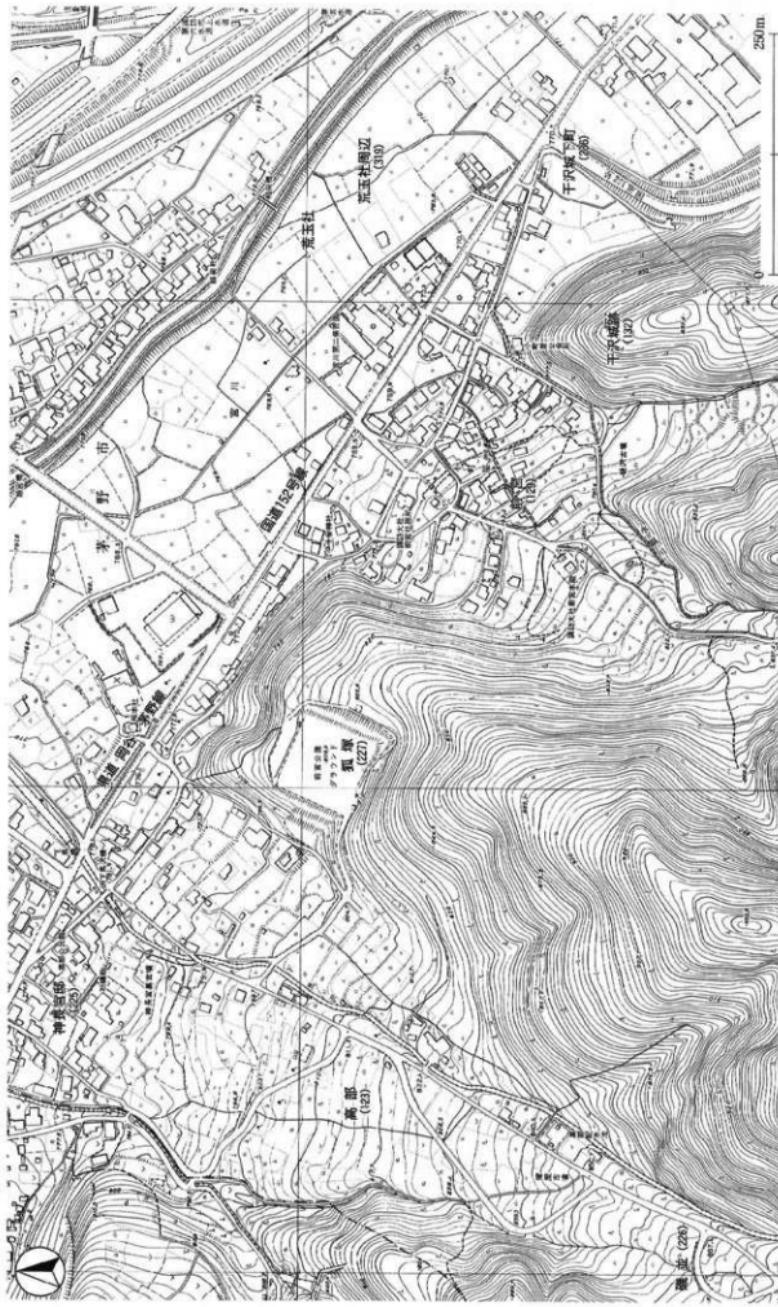
みち」へうち上、所政殿へ御まいり候、○自所政府荒玉へ御参候、」かさがけ馬場の下溝上御まを、有賀

上江うちしたし所政候へ御参候、

四郎居候し」東道を小町屋口江うちへたし、福島兵庫守み候し」こうちへかゝり、さて馬を北頭ニ引向て荒玉へ」御参候、鳥居内まで馬乗、さて社參申行事すきて、「いまのろしをうちかへり、前宮江參事古本有へし、溝上へ」御まいり、御門をひらき印呪すきて、則たての」御廻あり、順ニ有、溝上大明神御立候、南方有

賀の」四郎居候し屋地をハ左ニ見、かさかけ馬場をハ右ニ見て、其こうちへうち上、御廻候順三輪なり、」^{可有}後大御門戸にてもよりおり、内御玉殿參有、」印呪すきて乱座ニ御着候、○種々御洒瀧、前宮へ御参候、」路次事、神原をハ左ニ見、御玉殿をハ右ニみて前宮江」御参候、呪印過、楠井大明神江御参候、路次事、」前宮之大鳥居のもとにて御馬乗、御社参候、」つる路次をうちくたして神原之上正法院」をは右に見、南頭馬向、七五三懸鳥居へ」さしか、梨、地蔵堂こうちへかゝり、小太郎殿」御座候し前を直ニ馬北頭向、又

第1図 運送の位置と周辺の地勢 (1/5000)



東向て」上原みちへうち上、北頭にむまをおり、「楠井へ御参候、印呪すきて、大歳大明神へ」御参候、いまの道を折返し、矢崎石見殿居候し「屋地をハ左になして、其こうちを東向」うちのはせ大歳へ御参候、印呪すきて「馬乗、應大歳大明神御立候御前ニはたけアリ、其鼎にみちあり、馬を南頭ニ打上、五日市場へかゝり、河をうち越し、千野河大明神江御参候、千野川をへたて申て明神をは」むかひ押申、呪印通過御宿所へ御帰」あるべく候。

右御答のおもむきとして記所如斯候、」神者依敬増威、人者依神之德添運、「神事ハ凶年不減、農年不增、背之」則ハ必蒙神罰候也、

生年廿三歳浅完（花押）

かなり長い引用となったが、史料1では「所政所」（所政社）から荒玉社へ行く道順が書かれて、文明17年の前宮周辺の状況についてかなり詳しく記されている。傍線部の「荒玉」は荒玉社のことである。所政社から笠懸馬場の下の溝上社・有賀四郎の住居の東道・小町屋口・福島兵庫守住居付近の小路があることがわかる。現在、溝上社の石祠は上社前宮神殿の参道脇にあり、所政殿は前宮神殿の北西側にある。荒玉社は、江戸時代初期に描かれたと考えられる「諏訪神社上社古図」には、1間×1間の社が描かれており、位置は宮川の河原に位置し、荒玉社周辺遺跡内にあったことが想定される。史料1では、荒玉社に鳥居があり、鳥居内まで新たに大祝になる諏方氏が馬で乗り入れた事が記されている。

上社関連の神社として十三所というものがあるが、「上社物忌令」という史料によると、荒玉社は「十三所」の一つとなっている。諏方氏が大祝に就任する時に（古文書には「職位」とある）「十三所參」を行い、その時には荒玉社でも神事が行われる。史料1は十三所參の道順を記した史料である。十三所參は大祝が就任する度毎に行われるため、前述の建武2年（頼繼）の他、応永4年（1397・有繼）・文安5年（1448・頼長）・寛正7年（1466・継満）・文明16年（1484・師繼）・文明17年（1485）・永正17年（1520・頼後）享禄2年（1529・頼寛）・天文7年（1538・頼実）の記述がある。

荒玉社は十三所參の他、毎年「荒玉神事」が行われる。この神事の初見は、延文元年に作成された『諏方大明神画詞』である。

（史料2） 延文元年（1356）『諏方大明神画詞』（新信叢3-85）

二月晦日、荒玉ノ社ノ神事、当年ノ神使六人、^{上総六人}、童子、直飛ワシテ出仕、齋膳アリ、

史料2では、荒玉神事が2月晦日に行われることがわかる。1年間の神事を勤める神使は、2月辰日から前宮の精進屋（現在の前宮拝殿）で精進潔斎を行い、初めて外へ出て神事を行うのが荒玉神事である。宮坂光昭は、荒玉神事を農業開始の前に新しい稲の靈を祀る神事としている（諏訪市史編纂委員会 1995）。

また、室町時代に作成されたと考えられる『年内神事次第旧記』には次の記述がある。

（史料3）（新信叢7-176）

一（2月）晦日、荒玉御神事、神使殿御出仕始、わか柳40を1そくつにして、宮のふたいにて4つ、持まいらせて申立。

史料3にある「宮のふたいにて」は、「宮の舞台」のことであろうか。そのように考えると、荒玉社には鳥居・舞台があったことがわかる。

（史料4）『諏方上下社祭祝再興之次第』永禄9年（1566）9月（新信叢3-209）

一荒玉之宝殿・玉垣・鳥居、山浦之大塩中村之役たるの由、截本帳候、退転不審之由、彼郷中江相尋之処ニ、是も可致建立之趣、地下人等召上候者也、

史料4は戦国期の事例であるが、これを見ると、荒玉社には宝殿・玉垣・鳥居があったことがわかる。史

料3段階では宮の舞台があった可能性があるが、その後、舞台はなくなってしまったのだろうか。史料4には、荒玉社を造宮する担当の村名が書かれており、山浦（八ヶ岳西南麓・茅野市）の「大塙・中村」が担当している事がわかる。これは、13年後の史料5でも確認できる。

（史料5）己卯（天正7年 - 1579）2月16日（信史14-434）

（前略）

一（同）荒玉之御宝殿 大塙西村与一左衛門

中村弥二郎

（中略）

右如書立之日限、嚴重可致造立、若於無沙汰之人者、可有一途之御過怠之由、被仰出者也、仍如件、

己卯二月十六日

今福市左衛門尉 奉之

荒玉社の宝殿の造立を、大塙西村与一左衛門と中村弥二郎が担当する事になったようだ。大塙が西村と中村に分かれていたということなのであろうか。大塙西村は現在の南大塙区、中村は中村区と推定される。

古代から近世まで神社には社領があり、荒玉社の社領について、次の古文書が残されている。

（史料6）『年内神事次第旧記』（新信叢7-130）

一間 荒玉神田 峯澤神田

（史料7）『廉方上下社祭祀再興之次第』永禄8年12月

一二月晦日、於荒玉之神事、領田老丁^{吉原山主}、守屋彦九郎給恩、由是定納式貲文神長官ニ渡候条、近年者長勤之候、祭錢式貲文者不足候間、來丙寅よりハ猶存貰文新ニ令寄附之上者、合三貲文を以祭を成へし、然者三貲神事之校令不可簡略、

（史料8）武田信玄朱印状 永禄10（1567）（信史14-183・184）

為荒玉神事領、青銭老貲文之分、於于田辺之郷之内御寄」附候、如前々祭祀嚴重可被」相勸之旨、被仰出候者也、」仍如件、

吉田左近助奉之

丁卯 十一月十二日（竜朱印）

神長官殿

（史料9）『春芳代官年貢所済注文』 庚午（元亀元年 - 1570）9月23日（13-402・403）

（付箋）「元亀元年」

神長官殿江田辺之内より年貢まへり渡し申分 此役

五十文 同人まへ

合拾貲文 大政所 神宮寺の

合壱貲文 荒玉神事 八百文 新右衛門

都合拾貲員文 此百姓 此役

小町屋の番匠 百五十文 同人まへ

宅貢仁百文 与五右衛門 大町たくみ

此田役 巻貢仁百文 式部左衛門

百五十文 同人まへ 此役

いまはしの 百五十文 同人まへ

六百文 太郎左衛門 たかへの

五百文	与四郎	壱貫仁百文	さいとう
此役		此役	
五十文	同人まへ	百五十文	同人まへ
	田辺の		以上八貫五百文
老貫文	源右衛門		此外
此役		仁貫五百文 田役之内	古門門代、同人より、 田役之内
百五十文	同人まへ		以上拾老貫文渡候、
	田辺之こんかき		春芳代官
老貫文	新左衛門	九月廿三日	慧助(花押)
此役			普右衛門(印)
百五拾文	同人まへ	持長官殿参	
	神宮寺		

史料6～9は神領に関する記述の文書である。史料6は「神殿はさいた」に関して荒玉神田が1間あることが確認される。史料7～9は武田信玄が諏訪神社の祭礼を復興するために発給した文書である。史料7では荒玉神事領として竹居（武井）内の一丁を守矢幸実（彦九郎）に給恩として与えたが、このうち2貫文を神長に渡すことにするが、祭礼錢が不足しているので、1貫文分寄附するので3貫文分の祭礼を勤めるよう命じた史料である。これによると、神事領は竹居（武井）庄内にあることがわかる。

史料8は荒玉神事領として田辺郷（諏訪市）の内、青銭老貫文分を寄附する内容の文書である。史料9は所政社と荒玉社の年貢を武田勝頼の代官である春芳が収納して神長官に報告した内容である。以上の史料では、社領は、守屋山塊沿いの地域にあった事がわかる。の中には史料8に見られる田辺の地名も見られる。大町 荒玉社周辺遺跡は、昔から中世の「大町」の跡であると云われている（諏訪史談会 1958・安国寺史友会 1997）。大町の初見は『守矢満実書留』文明2年条である。

(史料9)『守矢満実書留』文明2年(1470)条 (新信叢7-142)

(四月)十八日丙寅例日候、御柱被引候、日」照候、御柱殊外幸渋、漸々酉ノサカリニ大宮へ引物奉付申候、」前宮ノ御柱ハ夜ノ亥ノ時計ニ御立候、三ノ御柱日、大町喧嘩」出来候、郷内社參入肝ヲ消、色ヲ失候、矢崎殿ト北大塙美作内者也、

御柱祭中に、大町で矢崎殿と北大塙美作の内者が喧嘩したという内容である。前宮の三の御柱を立てる日に喧嘩があったと考えると、前宮の周辺に大町があったことが考えられる。喧嘩は同史料文明14年4月17日条にも見え、御柱中に喧嘩があったことが書かれている。

(史料10)『守矢満実書留』文明12年(1480)条 (新信叢7-147)

同六日夜、東大町大搔爪、悪党共南風ニ火懸、雜物奪取」事無隙、手負死人作出、黒煙内噪叫有様、天地振動」焼留所馬場口内馬場刑部御屋口御背にて焼留シ、西牧御精進屋御左口神御炎上「^{イケンシヤ}哉、為社家、為頭人、」物怪不可過、是不可有此テ、又御精進屋於小太郎殿」御門戸作商、御左口神改作出巾入部、祝錢一貫、皮」夏毛、神長取申、

三月五日、^音御立増、小坂御頭祭中、又悪党共上西大町」火付、南風來次、然間神原郡集上下諸人・道」俗男女我々か宿々ニ置ケ衣装・太刀・馬・貝足ニ心懸、神原」乱出、大御門戸内四目懸鳥居前後ニ死人不知數、被踏殺、」亦被切倒、太刀・刀・女房衣類ヲ申、既死人上於為道、」有新怖事消魂、西大町焼屋、黒煙虛空、同於其」内作時声事、震社參之人々、於射殺切臥、喚叫」有様、何帝尺修闢可增争、是然共御

祭礼ハ無相違、」斯憂事自神代無、此方古河ニテ焼留、何況雖為世亂共、」加様有シト、悉皆焼失事、万民心苦事無隙、余憂ニ雨」降立、万民無家モ弥憲ケリ、手負死人昇烈下向巾有様、」被目當次第也、但シ是為何方便哉、凡慮難思」量計、

史料10は悪党によって「大町」が放火された記述である。この史料には「東大町」と「西大町」とあり、大町が東西に別れていたことがわかる。また、西大町の前に「上」が付けられているため西大町は上下に分かれていた可能性がある。「東大町大橋爪」とあるところから、東大町から宮川の対岸へ、大橋がかけられていたようだ。2回にわたって焼けた場所に「御精進屋」や「神原」があるため、前宮も被害にあったらしい。(史料11)『守矢頼真書留』文明14年5月条(新信叢7-151)

五月廿五日より大雨降、晦日大水増、大町・十日市場・安国寺守押流、栗林両郷作毛多田畠共押流、人頭牛馬家龍押流、仁頼嘲叫城山へ付ストレトモ、安国寺より大河増米間、落方不知。

文明14年5月25日に大雨により増水し、大町・十日市場・安国寺と南北栗林郷が押し流されたという記述がある。増水した川は宮川と上川であろう。大町・十日市場・安国寺・南北栗林郷は増水すると被害に遭う地域であるといえ、大町が水害にあったことがわかる。この年は洪水が続いた年で、間7月25日に大雨が降り、毎日には五日市場・十日市場・大町が「人海」となり、郡内が「海原」になったという。

文明15年1月8日に大祝頼方經満が惣領頼方政満を前宮神殿で殺害し、源氏地方は戦争状態となる。この時に「郡内堂社・仏地、在所、年來住所、祿財宝不残何、一時内焼上、成風前廢消失、四方霞ト方角モ無定、一時間成広野ト」と1月15日条にあり(新信叢7-152)、大町も焼かれた可能性があるが、「大祝職位事書」文明16年12月28日条には「大町のたちや口」の記述があり(新信叢7-88)、戦乱後も大町が存在していたらしい。

その後、「守矢頼真書留」天文11年7月2日条に「安国寺の門前大町」(新信叢7-162)や史料9に「大町たくミ式部左衛門」とあり、戦国期頃まで「大町」があったようである。

安国寺 信濃国の安国寺は茅野市の前宮近辺に造営されて、現在でも安国寺には安国寺がある。何年に創建されたかは不明であるが、貞和元年(1345)の『扶桑五山記』には「信濃國源方上宮 安国寺萬山夢窓圓師」(信史5-492)とあり、この頃までには創建されていたようである。源氏における安国寺史料の初見は、「守矢頼真書留」寛正6年(1465)8月24日条で、「安国寺江橋津ヨリ長老入院候」(新信叢7-138)である。同年9月4日に、大祝頼満の妻が難産で死去した時、安国寺長老が引導を渡している(新信叢7-138)。また、11月20日に大祝頼方頼長が頼死し、先例に背いて安国寺住持に仏葬させたという(新信叢7-138)。文明14年には前述のとおり増水によって安国寺が押し流されたという。『安国寺区誌』ではこの安国寺は寺ではなく、村の名としている。また、同書では、前述の『大祝職位事書』文明16年12月28日条にある「大町のたちや口」を「大町の堂頭口」としている。安国寺の方丈へ入っていく小道と考えているようだ。このことは「守矢頼真書留」天文11年7月2日条に「安国寺の門前大町」と記されていることと一致し、大町は安国寺の前にあったことがわかる。

※()内は、「信濃史料」(信史)・「新編信濃史料叢書」(新信叢)の(巻-頁)を表す。

3. 周辺の遺跡

安国寺区の遺跡は北西側に高部区、南東側に西茅野・茅野区と接している。これらの地区的遺跡は、繩文時代より中世に至るまで多くの遺跡が濃密に分布している。特に、安国寺小町屋地区には中世に源方上社の

現人神だった大祝譚方氏の居館址である神殿や前宮などの宗教関連施設が数多くあったとの記録があり、重要な中世の遺跡がある。さらに安国守小制地区には近世以降に建造された安国寺がある。発掘調査の結果、室町時代の安国寺は、現在の安国寺より北西に寄った干沢城下町遺跡がその一部と考えられる。

高部遺跡(123) 昭和56年に発掘調査を行った。発見された遺構は縄文時代中期の住居址10軒と屋外埋甕2・縄文時代後期の土壙・古墳時代の住居址2軒と土壙墓1・平安時代の住居址24軒である。平安時代は11世紀後半の柱状高台の土師器が出土しており、中世へと続く遺跡と考えられる。中世の遺物も平安時代末から鎌倉時代が出土している。

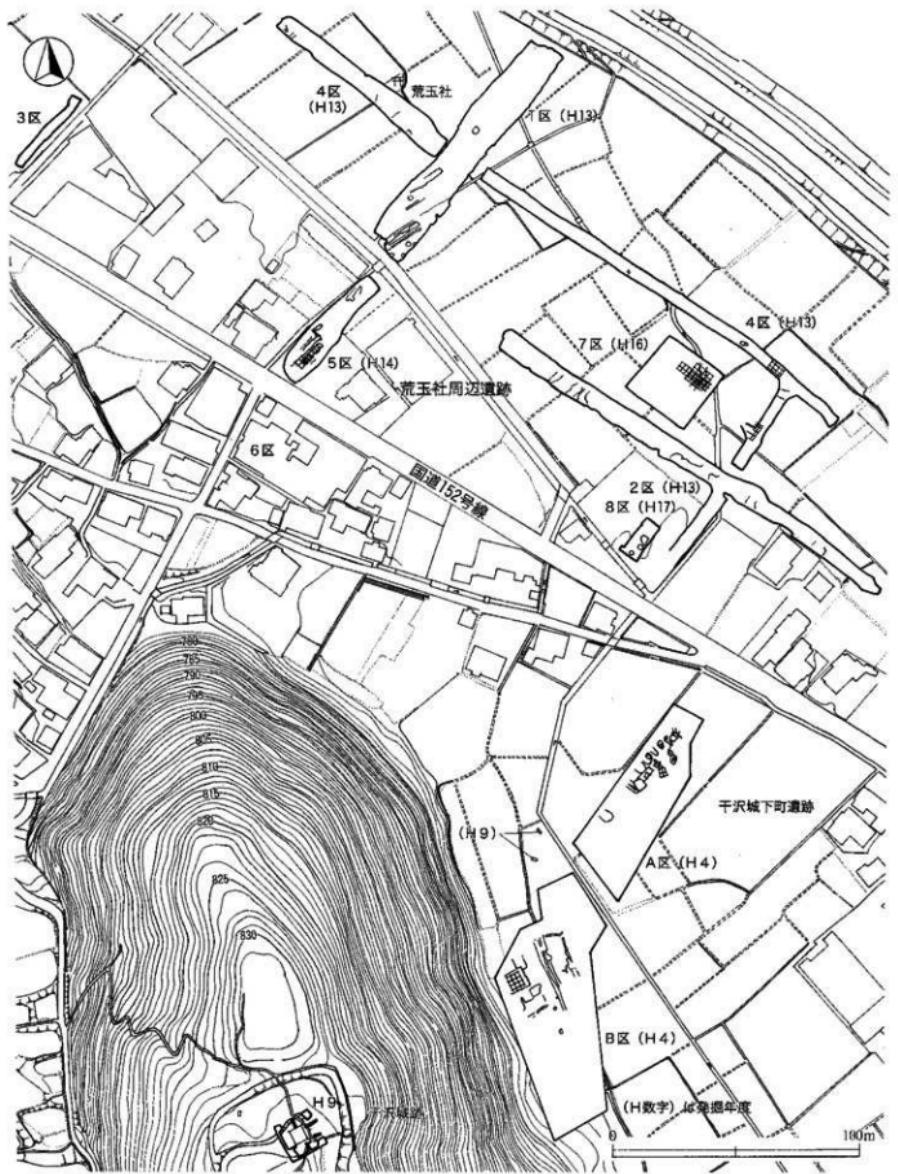
また、平成8・9・10年度に発掘調査を行い、奈良時代の住居址2軒・平安時代の住居址2軒・古墳2基が検出されている。鎌倉時代の遺物とともに、中世の造成面が検出されており、屋敷の存在が想定される。前宮遺跡(129) 前宮遺跡は諏訪神社上社の現人神であった譚方氏の居館のあった場所で、この地は「神原」や「神殿」と呼ばれていた。『諏訪史』第一巻には磨製石斧・弥生式土器が出土しているとの記述がある。『茅野市史』上巻では縄文時代中期後半の土器片や石礫・打製石斧・磨製石斧・石臼等が出土しているという。以前踏査したところ、石垣が周辺に多く造られており、この石垣の間より須恵器を採取した。近年、小規模な立ち会い調査をおこなっており、若干地下の状況が判明している場所がある。前宮本殿前方の北東側は駐車場造成に伴って発掘調査を行ったところ、近世の水田の造成により、中世以前の遺構は検出されなかった。他に溝上社の北東側で立ち会い調査を行ったところ、近代の岡谷・茅野線(参宮線)構築時の築工法の一部が検出され、中世以前の遺構の検出はなかった。また、溝上社南東側で立ち会い調査を行ったところ、青磁・白磁・かわらけ等が検出され、中世の濃密な遺構の存在が想定される。その他、子安社東側のアパート建設時の立ち会い調査では、2m以上の埋め土が確認されており、中世の遺構は確認できなかった。

干沢城跡(132) 干沢城は守屋山麓から伸びる尾根に形成された山城で、戦国時代までの譚方氏の城郭であった。文明15年の譚方氏一族の内訌(1483)や、天文11年(1542)の武田氏・高遠譚方氏との合戦で使用されたと考えられ、昭和63年に市史跡に指定された。発掘調査は昭和50年代と平成9年に二の郭の発掘調査が行われた。二回目の発掘調査では、縄文前期末葉の遺跡を造成して郭を造っていることがわかり、地面を造成した版塙の跡や方形堅穴・掘立柱建物址の柱穴らしき遺構を検出している。出土遺物は一回目は常滑窯破片やかわらけ、二回目はカワラケ・内耳土器・培塿・瓦器・古瀬戸陶器・中国産磁器・常滑焼片・銭貨・銅製品・鉄角釘・茶臼・搗き石・火打ち石などが出土している。遺跡の時期は、遺物から14世紀から15世紀であると考えられ、干沢城下町遺跡とはほぼ同時期の遺跡である。

神長官邸遺跡(225) 神長官邸遺跡は守屋山麓の扇状地上に位置し、下馬沢川や前沢川の洪水に常に見舞われていた地である。ここは中世以来、譚方上社の神職である「神長官」を勤めてきた守矢氏が居住している場所である。守矢氏は神話時代の在地神であった「洩矢神」の末裔といわれ、邸内には守矢家が祀っている「御左口神」の社や神長官墓古墳がある。また、守矢家には鎌倉時代からの古文書を多数保有しており、中世の信濃を語る上で欠くことのできない史料として昭和41年に長野県宝に指定された。そしてこの中には荒玉社周辺遺跡の中世の状況を記した古文書がある。

本遺跡は、平成2年に発掘調査を実施した。発掘の結果、遺構が二面にわたって検出され、建物基壇や礎石建物址が検出されている。遺物は、かわらけや瀬戸製陶器・輸入陶磁器が出土している。遺跡の時期は、出土遺物から14世紀から16世紀までと考えられる。

磯並遺跡(226) 昭和58年に発掘調査が行われた。基壇状遺構が2つ検出され、基壇状遺構1をとりまくよう一段低い位置に基壇状遺構2が階段状に造成されていた。基壇状遺構1からは礎石建物址が1軒と土坑



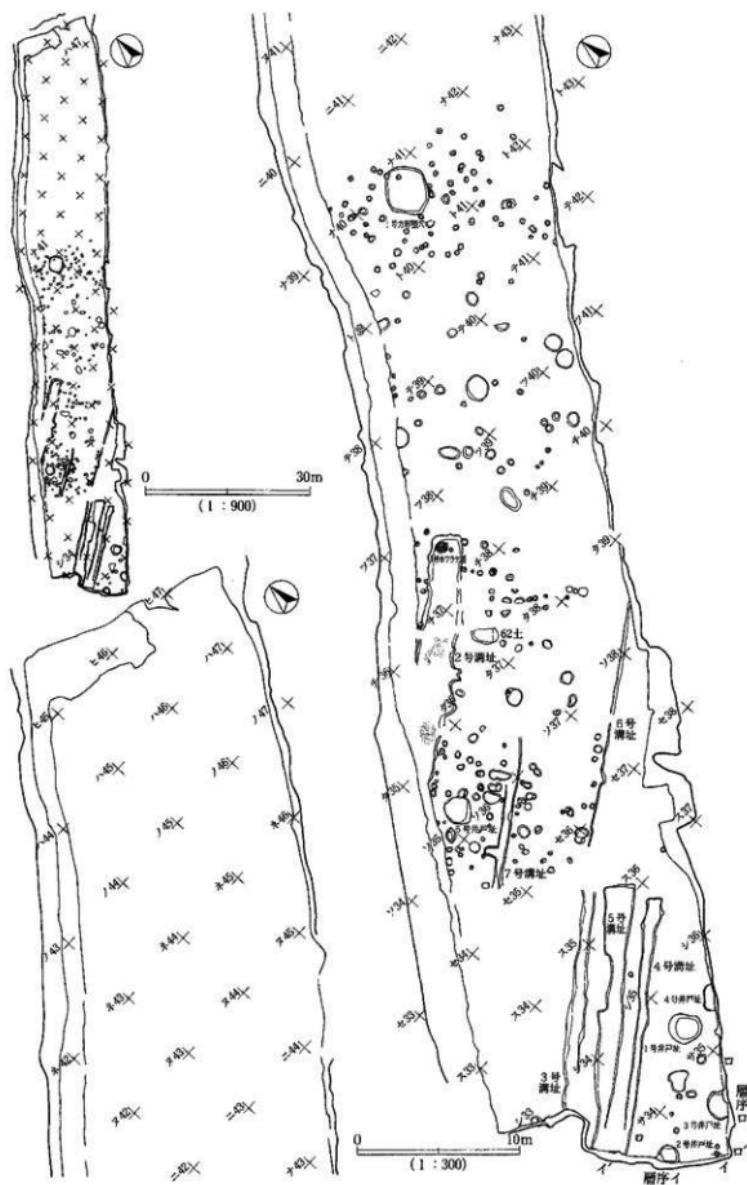
第2図 荒玉社周辺遺跡と周辺の遺跡の調査状況 (1/2000)

1基、石組状遺構1・溝址2基・かわらけ溜まりが1検出された。かわらけ溜まりは礎石建物址1の前庭部にあり、基壇状遺構2に落ちる間に形成されていた。基壇状遺構1と2の間の段差には、石垣や階段などを構成したと思われる石列が検出されており、人為的に段差がつけられていたことがわかる。基壇状遺構2からは集石1基・土坑2基・2条の石列が検出されている。石列は基壇状遺構の東側を区画するかたちで配置されている。本遺跡からは大量のかわらけが基壇状遺構1から集中的に出土している。この中から、12世紀後半と考えられる擬似高台かわらけと、13世紀前半から13世紀後半に使用されたと考えられる手探ね成形のかわらけが出土している。他に室町時代頃に使用されたと思われる陶磁器が若干検出されている。荒玉社周辺遺跡でも量は少量であるが、現荒玉社近辺より手探ねかわらけが検出されているため、関連性が指摘される。しかし、荒玉社周辺遺跡で主体的に出土している室町時代中期のかわらけが微量に出土しているのみであり、発掘地とは若干異なった場所に室町時代の磯並社が形成された可能性がある。

磯並社は諏訪上社の祭礼で重要な摂社の一つで、荒玉社は磯並社と同格の神社であったことが、守矢文書などの史料からわかる。諏訪上社大祝の諏方氏が大祝に就任するとき、室町後期に成立したと考えられる「大祝職位事書」によると、大祝が十三所詣でを行うときの十三所として「磯並」と「荒玉」の二社が含まれている。神宮寺区所有の「諏訪大社上社古図(伝天正のボロボロ絵図)」によると磯並社を取り巻くかたちで「漸大明神」「玉尾明神」「穂殿明神」があり、これらの社も十三所の中に含まれている。発掘地は磯並社以外にこれら三社の敷地も含まれている可能性がある。

狐塚古墳(227) 昭和56年に発掘調査が行われた。古墳2基・古墳時代の土坑1基・平安時代の墓塚3基が検出された。本遺跡は高部の扇状地と前宮の扇状地間に張り出している尾根上に位置し、この尾根を少し登ると諏訪上社の祭礼が行われた「峰の滝」のイヌザクラがあり、古来より祭祀の場であったことを伺わせる。古墳・平安時代と時代は隔離しているが、墓域として使用されている場であり、諏訪神社との関連を考えられる。

干沢城下町遺跡(286) 平成4年と平成8年に発掘調査が行われた。本遺跡は現在の安国寺と前宮の中間に位置し、干沢城の下に広がる場所にある。「守矢満実書留」などにより、「大町」の存在が想定された場所である。平成4年の発掘調査の結果、礎石建物址など特殊な遺構が検出されたことから、調査を担当した守矢昌文は信濃国安国寺の一部ではないかという論考を行っている(守矢 1993-1994)。遺構は掘立柱建物址や礎石建物址・方形窓穴・井戸址・溝址などが検出されており、遺物もかわらけを中心とし、瀬戸美濃製陶器・中国製陶器が数多く出土している。さらに湿地帯のため木製品も数多く検出され、漆椀・漆皿・漆鉢・曲物・箸・折敷・下駄・人形・木製卒塔婆等が出土している。遺物から遺跡の時期は13世紀中頃から15世紀末まで存続した遺跡と考えられる。平成8年の調査では、4年の調査で検出された溝の延長が発掘されており、この中より木の破片や虫の死骸・土器・陶器片などが検出されている。干沢城下町遺跡は荒玉社周辺遺跡と県道をはさんで隣接しているため同一の遺跡である。



第3図 1区全体図

第Ⅲ章 発掘された遺構

第1節 1区の遺構

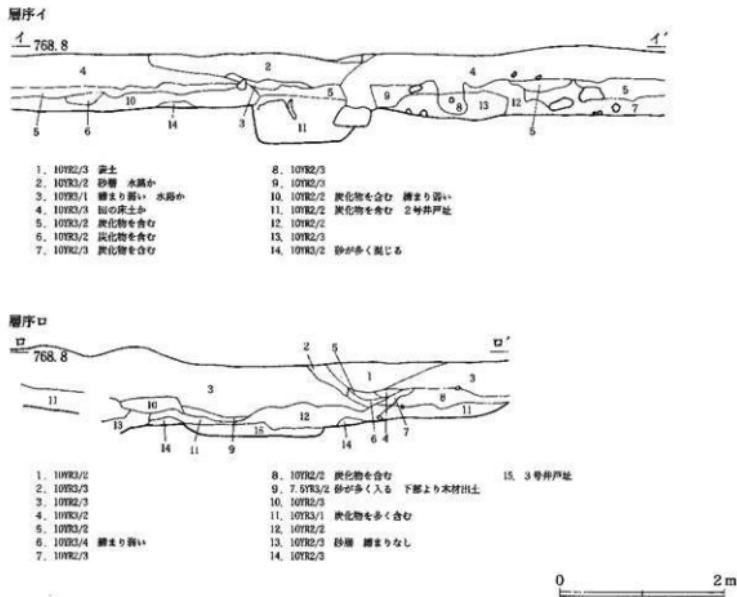
1. 1区の層序 (第4図)

他の発掘区に較べて埋土が薄く、旧地表面が島状に高くなっている。遺構確認面までは40cmと浅い。遺物包含層は10・12以下である。包含層の上層からは、近世から近代に作られた排水のガニ水道が作られ、木樁が縱横に走っていることが確認された。井戸址が集中するサ35周辺は黒色土であるが、グリッド34付近は確認面が疊層になっている。グリッドタ39～タ40の範囲は下層に疊を多く含み、地形的に周辺より高くなっている。タ40から宮川方面は黒色土が深く、水に浸ると泥状になる。中から多くの木製品が出土した。

宮川は天井川で調査区より河床が高く、さらに調査区は西山山塊の扇状地の扇端部にあたるため、調査区内の各所から水が湧き出し、ポンプを稼動させないとすぐ水没しになってしまった。

2. 発掘された遺構

1区の検出遺構は方形窓穴1・溝跡6・井戸址5・カワラケ溜まり1・土坑240である。1区の北東側からは大量に木が出土し、何らかの原因で流されたものと思われる。他の調査区と較べると、1区の遺構の密度は低い傾向にある。



第4図 1区の層序 (1/60)

(1) 方形窓穴

1号方形窓穴（第5・10図・図版2-7・4-7）グリッドト41・ナ41に位置する。遺構の規模は、上端長軸276cm・短軸261cm・下端長軸249cm・短軸226cm・深さ24cmである。平面形は隅丸方形である。遺構の深さは浅いが、壁面は比較的明瞭に確認する事ができた。いくつかの柱穴らしい土坑と切り合っているが、本遺構を切っている土坑と切られている土坑がある。本遺構の周辺に土坑が多く見られるところから、これらの土坑群に伴う可能性がある。内部には10cm~30cm大の礫が入れられていた。

出土した遺物はカワラケ75・龍泉窯青磁碗1・瀬戸美濃系天目茶碗1・鉢皿2・盤類1・瓶子1・四耳壺1・片口鉢3・常滑窯壺2・黒耀石1がある。遺物の時期は古瀬戸前Ⅲ期~後Ⅲ期までのものが出土しているため、遺構の時期は15世紀前半であると考えられる。

(2) 溝址

2号溝址（第11・12・15図・図版2-1・2・6・5-4-6）グリッドソ36・タ36~38・チ37・38に位置する。西側は調査区外となっているため規模は不明であるが、幅は上端224cm・下端180cm・深さ45cmで断面形は逆台形である。土層は5~13層である。軸線方向はN-44°-Wを示し、東西方向に溝が伸びている。溝は東側で止まっているため、水を流すための溝ではなく区画のための溝と考えられる。東側ではカワラケ溜まりが重複し、溝の覆土中から検出されているため、溝が埋没した後に掘り込まれてカワラケが埋められたと考えられる。溝の中からは1号井戸址で出土した薬状炭化物と似た炭化物が出土している。他に66-93・107・109・539号土坑も2号溝址を切っており、2号溝址庵絶後に掘立柱建物址などが造られたようである。出土した遺物は、ロクロカワラケが123(23・24)・瀬戸美濃系天目茶碗1・鉢皿1(483)・折縁深皿1・梅瓶1・灰釉片口小瓶1・片口鉢6・東濃系壺4・常滑窯壺1・青磁盤1・土器擂鉢(606)・白磁碗1(628)・漆器皿(図版5-6)である。出土遺物は古瀬戸前Ⅰ期~後Ⅱ期まで出土しているため、遺構の時期は15世紀前後と考えられる。

3号溝址（第14・17図・図版2-1・3）グリッドサ34・シ34・35・ス35・36に位置する。東側は6号溝址に繋がる可能性が高いが、非常に不明瞭である。また、西側は調査区外に出ているので遺構の範囲は不明である。幅は上端96cm・下端76cm・深さ26cmであるが、遺構確認面からの深さであるため、さらに深かったと思われる。軸線方向はN-55°-Eを示し、東西方向に伸びている。断面形は皿形である。

4号溝址（第14・18図・図版2-1・3）グリッドコ34・サ34・35・シ35・36に位置する。3号溝址同様に東側は6号溝址に繋がる可能性が高く、西側は調査区外となっている。幅は上端64cm・下端52cm・深さは12cmである。軸線方向はN-56°-Eを示す。出土遺物はロクロカワラケ131・手捏ねカワラケ4(29)・瀬戸美濃系平碗1・天目茶碗1・鉢皿1・盤1・折縁深皿1・瓶子1・花瓶1・器種不明5・東濃系片口鉢3・常滑窯壺2がある。遺物の時期は古瀬戸前Ⅲ期~後Ⅱ期である。遺構の時期は15世紀前後と考えられる。

5号溝址（第14・18図・図版2-1・3）グリッドサ34・35・シ34・35・36・ス36に位置する。3・4号溝址同様に東側は6号溝址に繋がる可能性が高く、西側は調査区外となっている。幅は上端164cm・下端128cm・深さ30cmである。検出状況が悪いため、本来はもっと深かったと思われる。軸線方向はN-54°-Eを示す。3・4号溝址に較べて、平面形が不整形である。出土遺物は、手捏ねカワラケ20(25・26)・ロクロカワラケ67(27・28)・瀬戸美濃系碗1・天目茶碗1(418)・龍泉窯青磁壺1・中国内海茶入1(503)・東濃系片口鉢5・珠洲窯鉢1(563)・壺1・内耳鍋4がある。遺物の時期は古瀬戸後Ⅰ期と輸入磁器は13世紀前半であるため、遺構の時期は14世紀後半以降と考えられる。中世以外の時期としては縄文時代の深鉢1・古代の須恵器壺1・平安時代の灰釉陶器碗1が出土している。

6号溝址（第13・14図・図版2-1・2）グリッドス36・37・38・セ37・38・39・ソ38・39に位置する。溝3・4・5の境界が不明瞭で1本としか認識できなかつたのか、6号溝址としてまとまるのかはよくわからぬ。幅はよくわからず、最も幅の広い南側でも片側の掘り方を検出できなかつた。深さは10cmと浅く、輪線方向はN-56°-Eを示す。出土遺物は瀬戸美濃系天目茶碗2・片口鉢3がある。

7号溝址（第15図・図版2-1・3・5）グリッドセ35・36・ソ36・37に位置する。溝の両端は不明瞭であり、遺構の規模は不明である。幅は上端60cm・下端44cmで、深さは10cmと浅く、輪線方向はN-58°-Eを示す。40・550号土坑と重複している。遺構内には散発的に22cm大の礫が見られる。

（3）井戸址

1号井戸址（第18・19図・図版2-1・3-1～6）グリッドサ35・36に位置する。上端長軸204cm・短軸172cm・下端長軸140cm・短軸128cmで平面形は指円形、断面形は盤形である。深さは53cmで輪線方向はN-44°-Wを示す。上端から24cmの深さで10cm～20cm大の礫が井戸址の北側に集中して検出された。その下層から炭化した藁か葦のような植物遺体が検出された。井戸を埋める時に、藁状炭化物を井戸に入れ、その上に礫を投げ込んだと思われる。おそらく火災などの災害で井戸が使用されなくなり、埋められたものと考えられる。井戸の底部中央には直径約30cm大の曲物が正位置で埋置されており、井戸の取水口と考えられる。上端から曲物までの深さは53cmである。出土遺物はロクロカワラケ6と古瀬戸後期の天目茶碗1片である。出土遺物から遺構の時期は14世紀後半以降と考えられる。

2号井戸址（第4・18・19図・図版2-1・3-7）グリッドコ34に位置する。上端長軸136cm・短軸推定100cm・下端長軸104cm・短軸推定84cm・深さは36cm、平面形はおそらく隅丸方形で、断面形は樽形である。底部から12cmから10cm～40cm大の礫が大量に充填されている。木材の破片が検出されているが、1号井戸址のように底部から曲物は検出されなかつた。出土遺物は、ロクロカワラケ1・東濃産片口鉢1である。

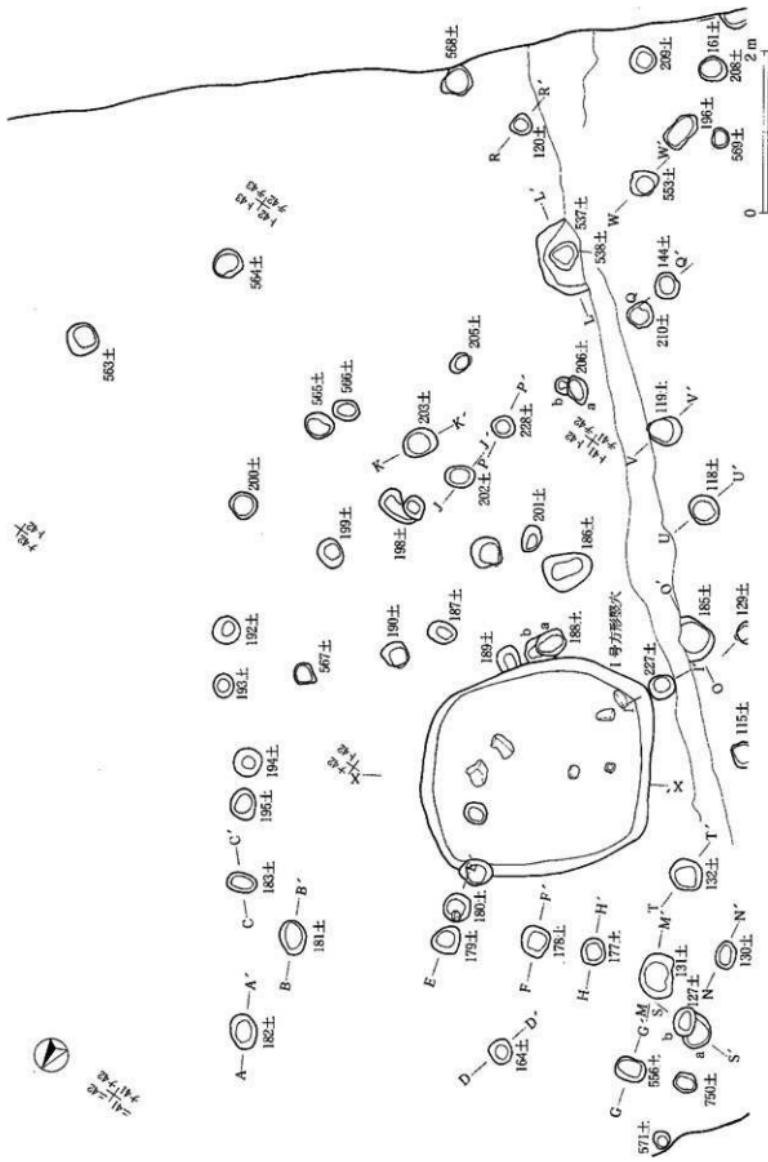
3号井戸址（第4・18・19図・図版2-1・3-8・4-1～3）グリッドコ35に位置する。上端長軸186cm・短軸推定116cm・下端長軸160cm・短軸推定104cm・深さは9cm、平面形は隅丸方形、断面形は皿形である。輪線方向はN-23°-Eを示す。内部には10cm～50cm大の礫が充填されている。この礫を除去すると木片が検出され、その一つは直立した状態で検出された。実際の3号井戸址の深さはさらに深かつたと考えられる。出土遺物は、ロクロカワラケ15・瀬戸美濃系天目茶碗・盤類1・瓶子1・龍泉窯青磁小碗1・撫き石1がある。遺物は古瀬戸前Ⅲ期～後Ⅱ・Ⅲ期が出土しているところから、遺構の時期は15世紀前半以降と考えられる。

4号井戸址（第18・19図・図版2-1・4-4）グリッドサ36に位置する。上端長軸168cm・短軸不明・下端長軸156cm・短軸不明・深さは42cmで平面形は隅丸方形と思われ、断面形は盤形である。輪線方向はN-36°-Wである。内部に10cm～20cm大の礫が入れられている。木片も少量出土している。出土遺物は古瀬戸後期の天目茶碗1・龍泉窯青磁碗1である。出土遺物から遺構の時期は14世紀後半以降と考えられる。

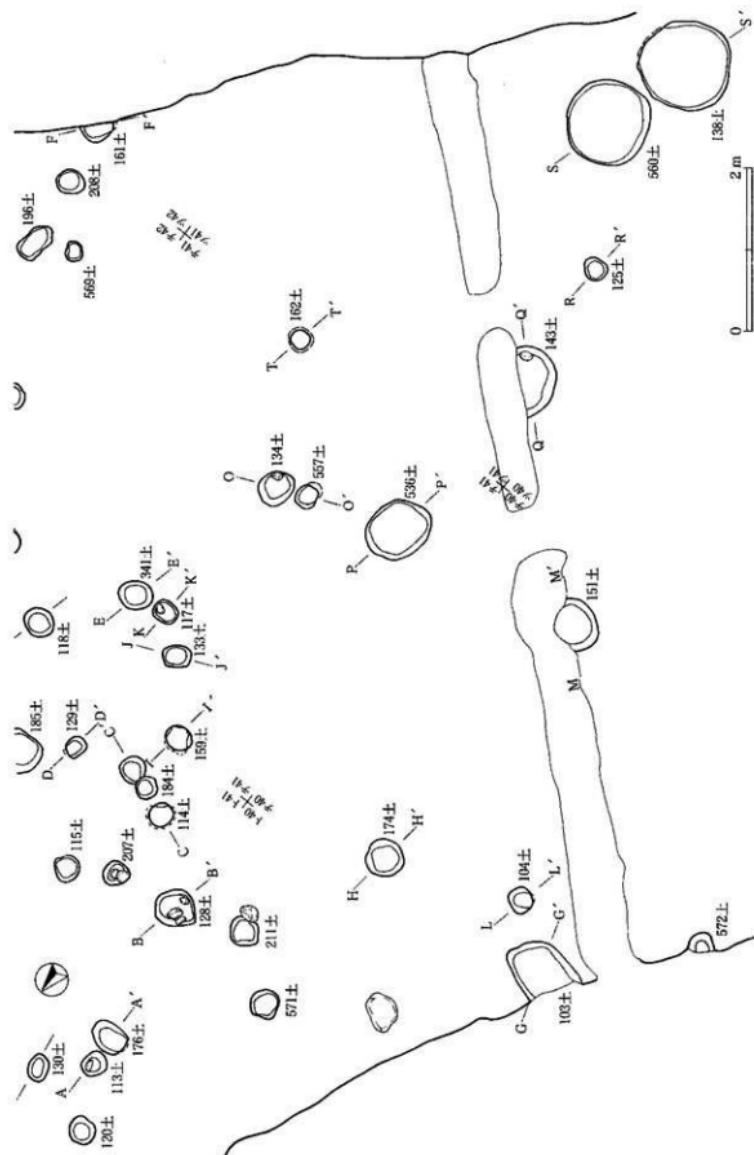
5号井戸址（第15・16図・図版4-5・6）グリッドソ36に位置する。上端長軸184cm・短軸160cm・下端長軸172cm・短軸152cm・深さは93cmで平面形は円形、断面形は樽形である。輪線方向はN-89°-Wを示す。10cm～40cm大の礫が入れられ、井戸枠に使用された板材が壊されて入れられていた。出土遺物は手捏ねカワラケ10・ロクロカワラケ23（30・31・32）・瀬戸美濃系折緑深皿1・片口鉢2（544）・東濃系壺3・龍泉窯青磁碗1・白磁碗1（627）・鏡（746）がある。出土遺物から遺構の時期は14世紀前半以降と考えられる。

（4）カワラケ溜まり

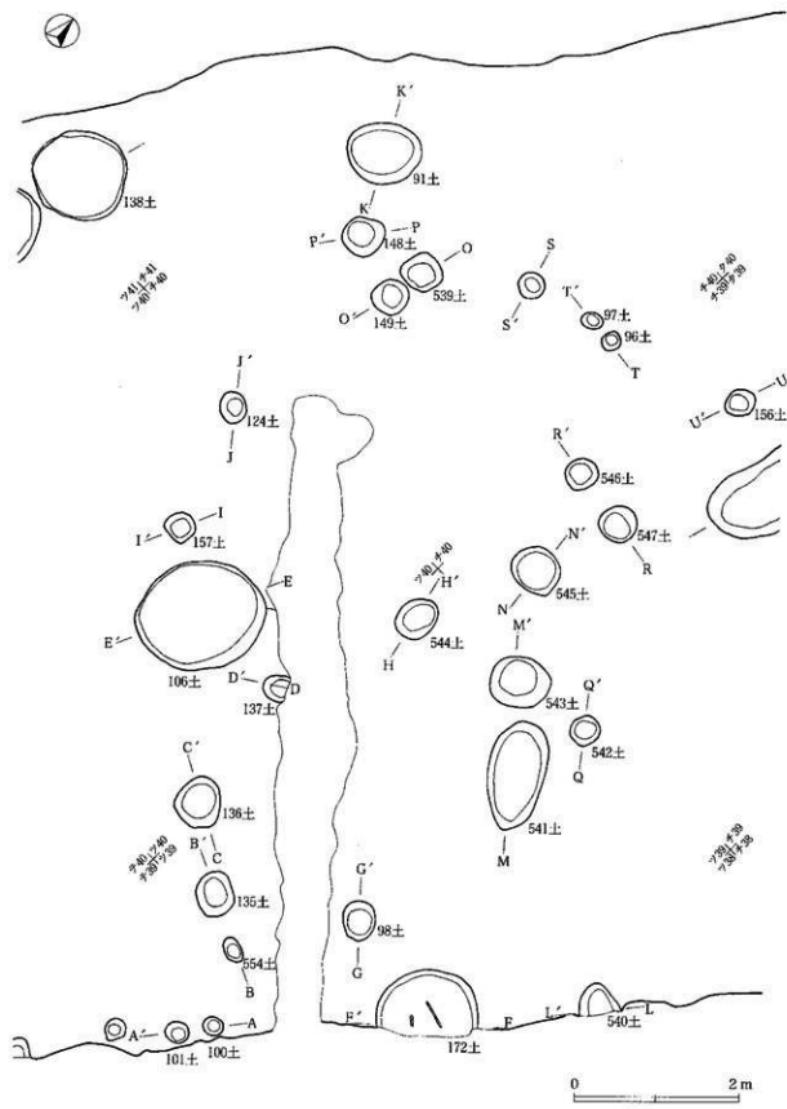
1号カワラケ溜まり（第11・12図・図版6-1・2）グリッドチ38に位置する。2号溝址の覆土中を掘り出し



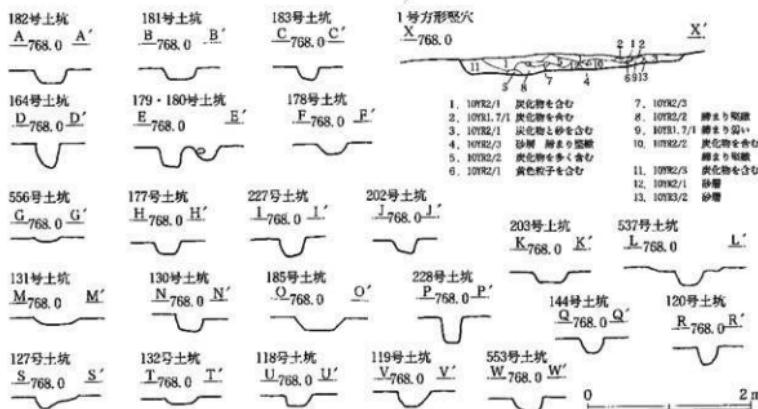
第5圖 1区地質圖 (1) (方形窓穴付) (1/50)



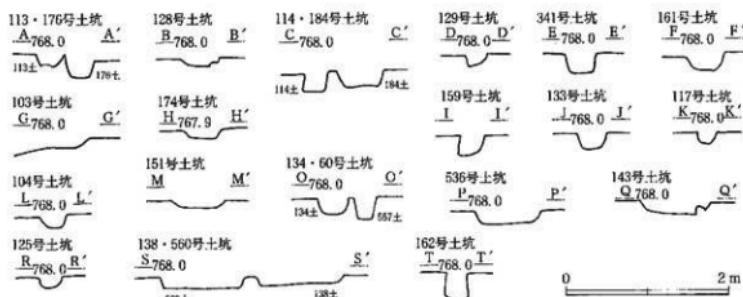
第6図 1区測剖面図(2) (1/80)



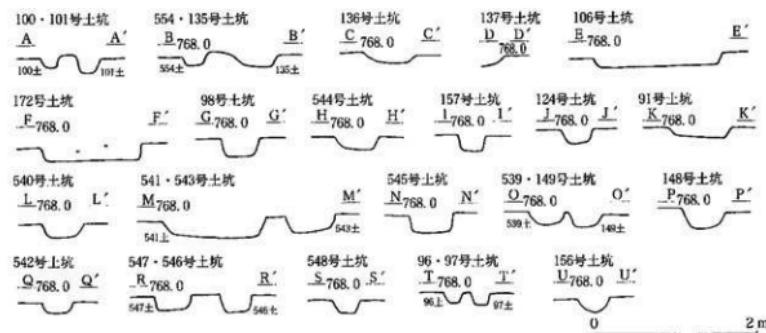
第7図 1区遺構配置図 (3) (1/60)



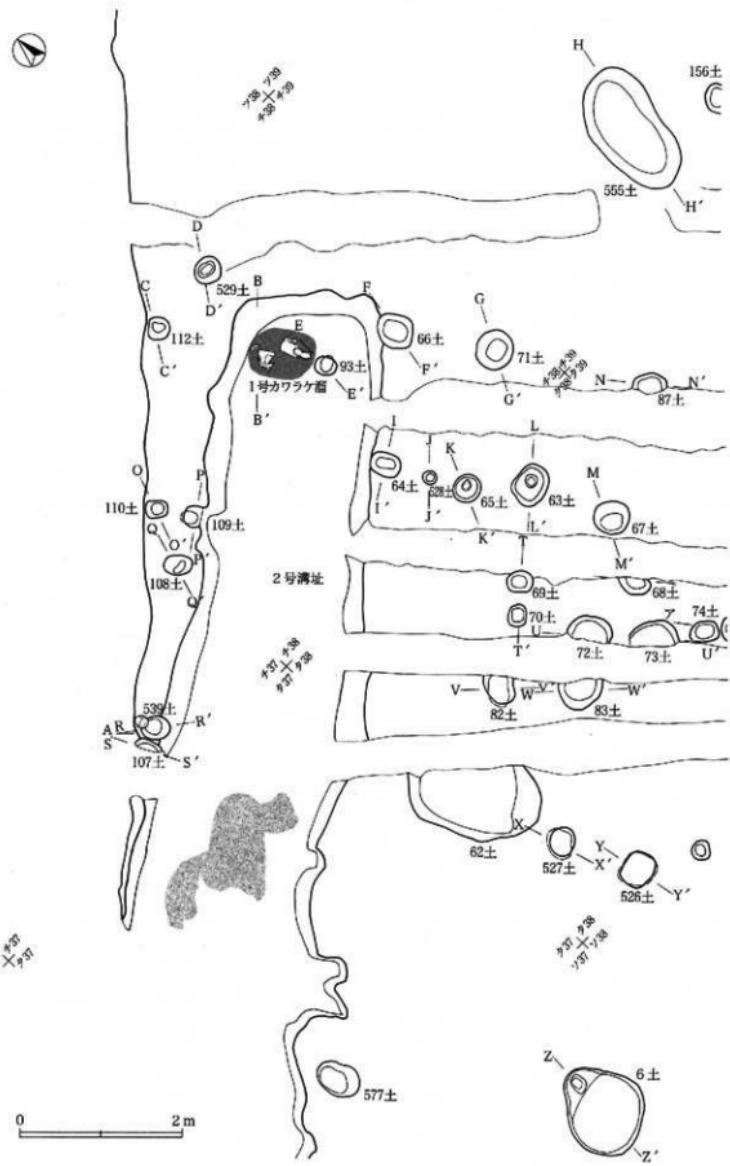
第8図 第5図遺構断面図 (1/60)



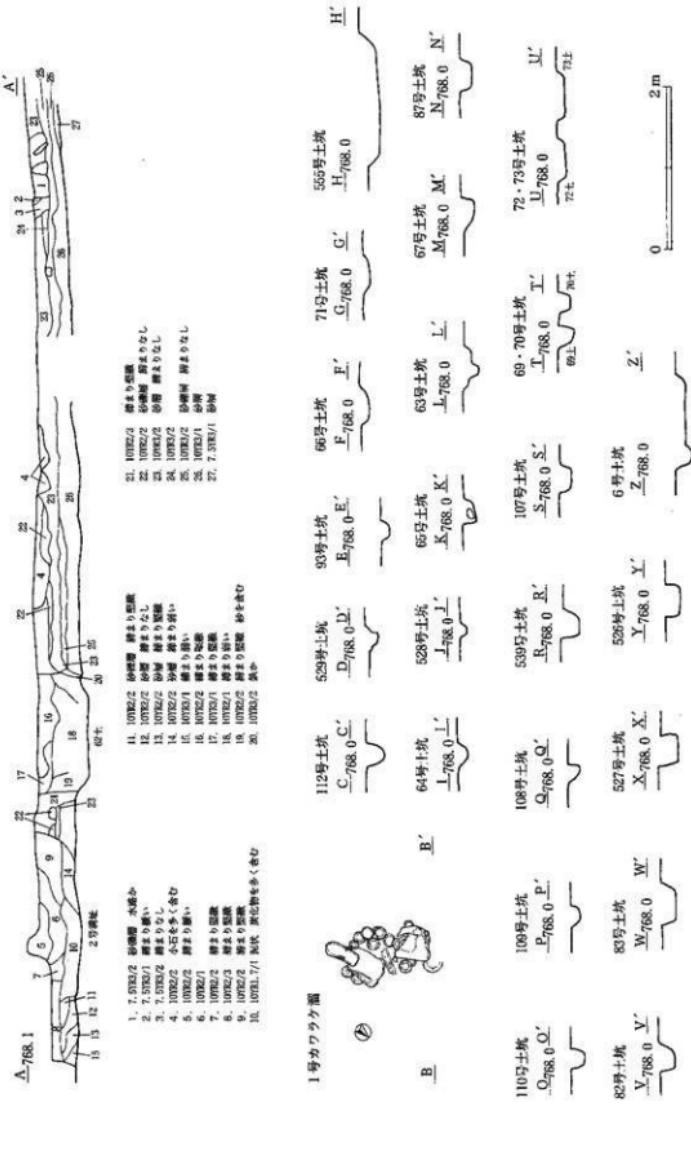
第9図 第6図遺構断面図 (1/60)

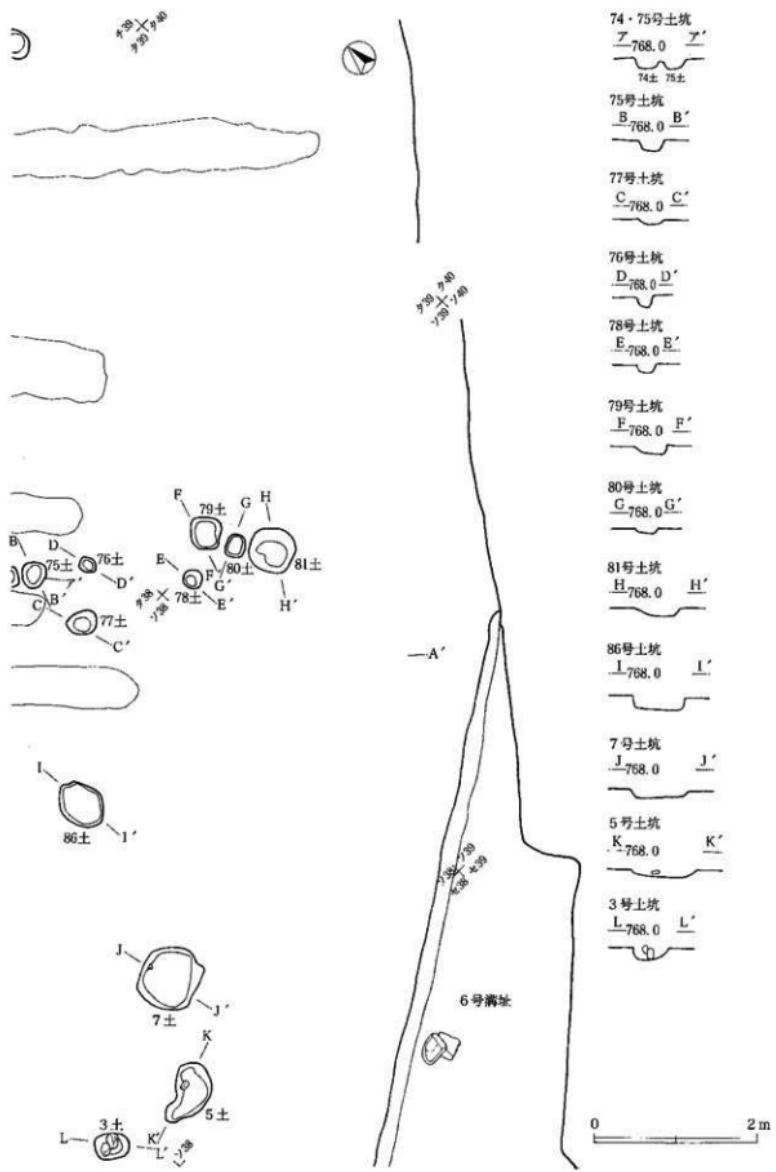


第10図 第7図遺構断面図 (1/60)

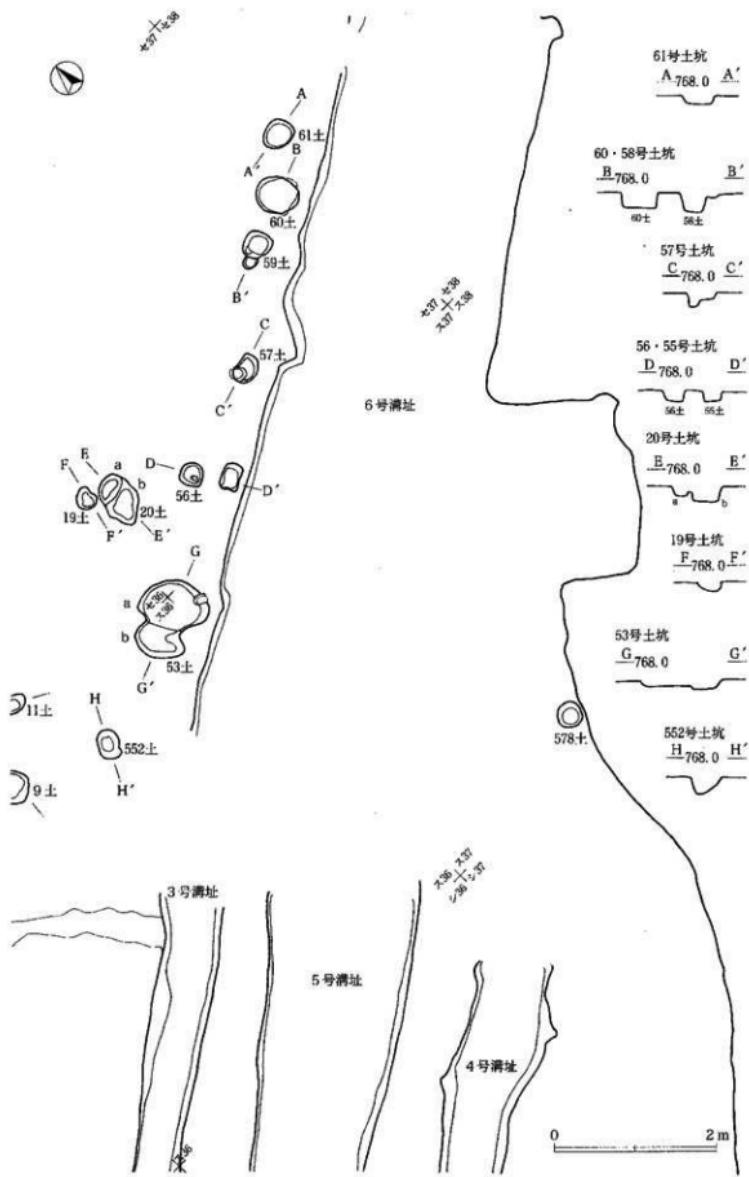


第11図 1区造構配図(4)(2号溝址ほか)(1/60)

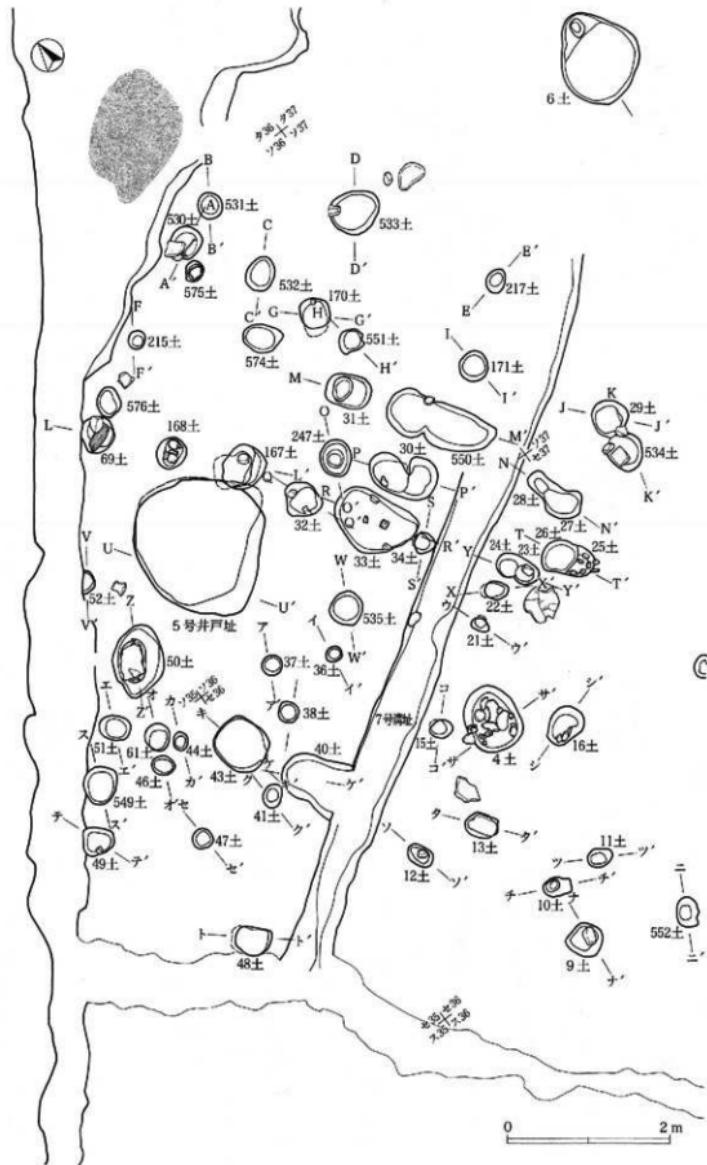




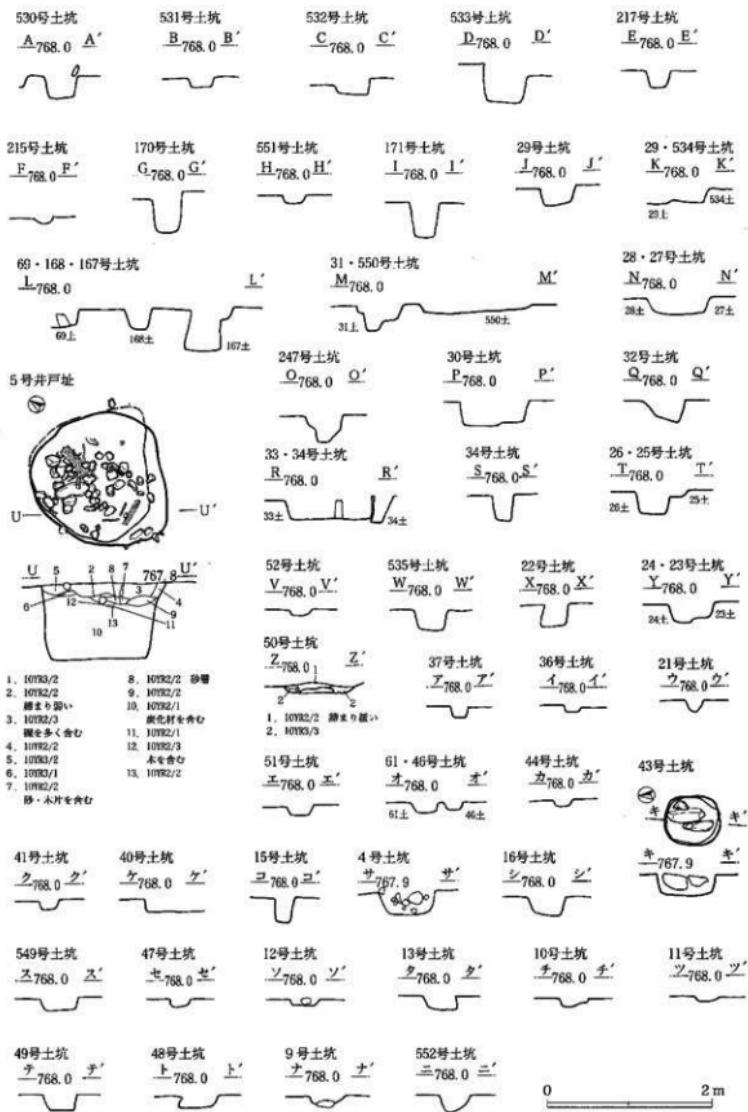
第13図 1区遺構配置図(5)(6号溝址ほか)(1/60)



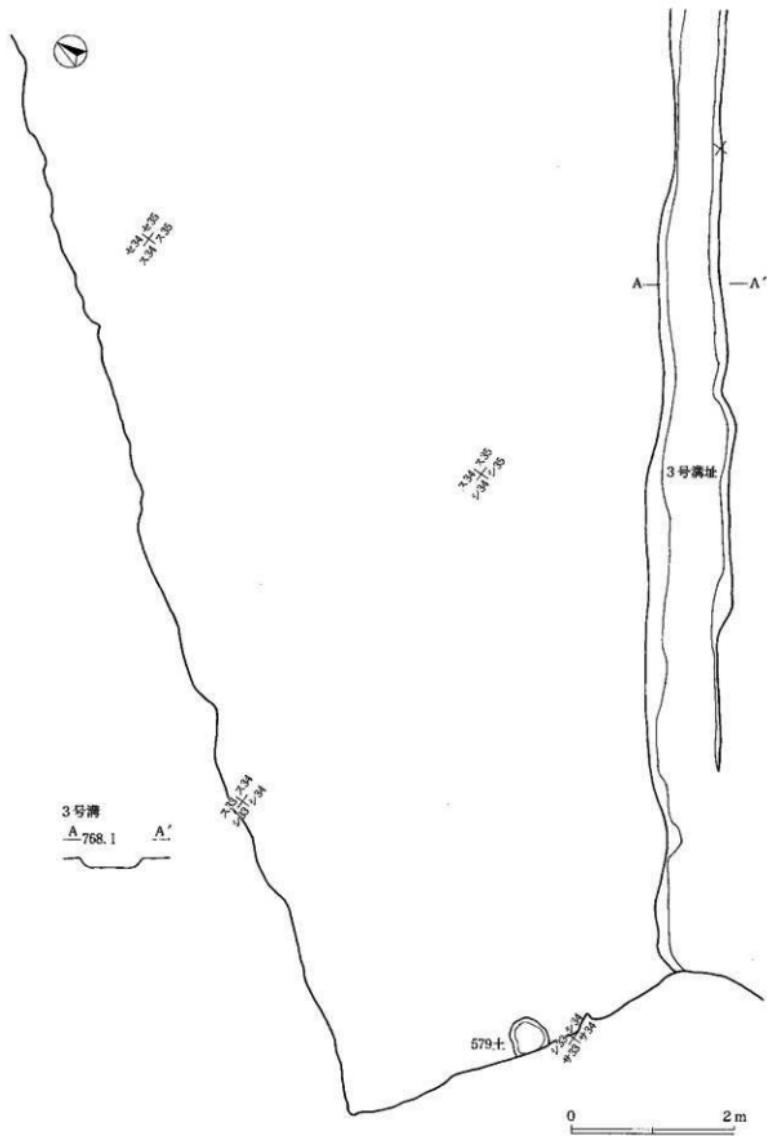
第14図 1区遺構配置図(6)(3~6号溝址ほか)(1/60)



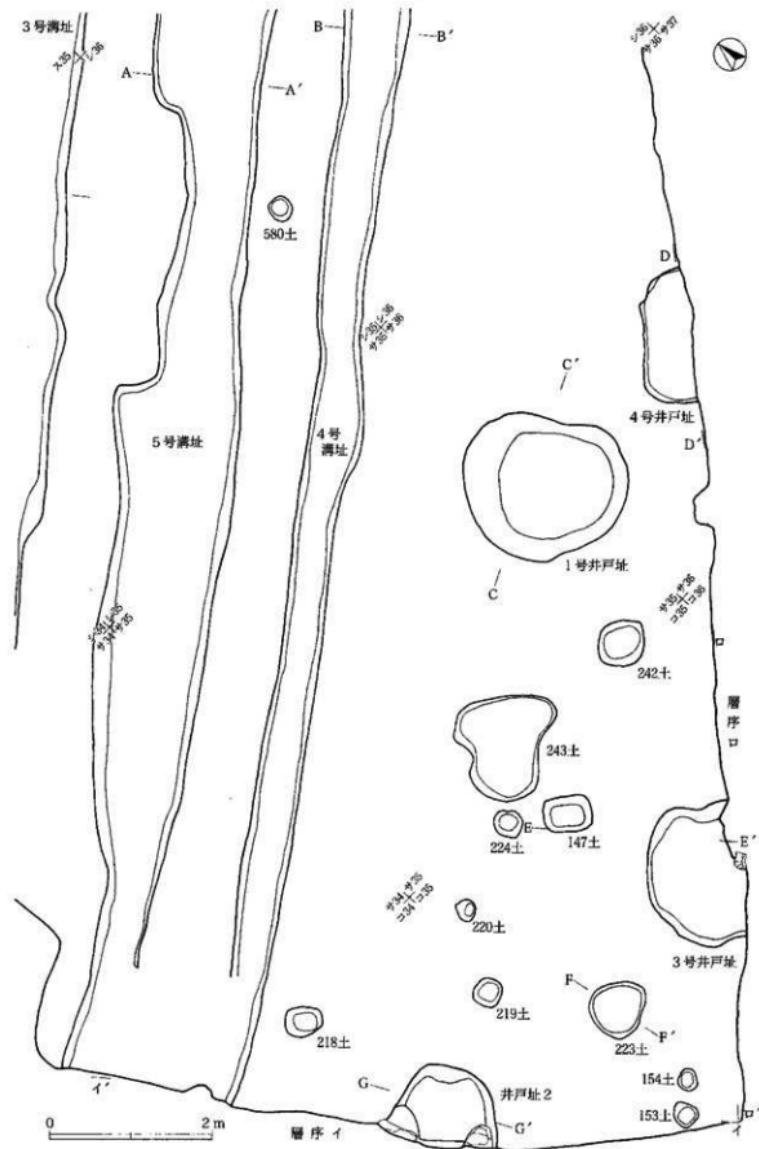
第15図 1区造構配置図 (7) (1/60)



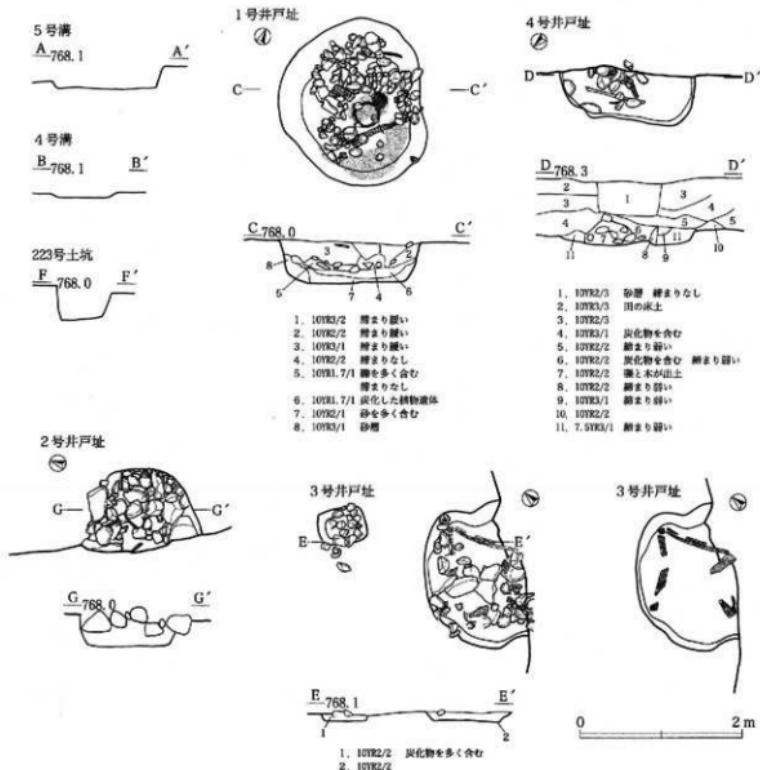
第16図 第15図造構断面図 (1/60)



第17図 1区遺構配置図 (8) (3号溝址) (1/60)



第18図 1区遺構配置図(9)(1号井戸址ほか)(1/60)



第19図 第18図遺構断面図（1/60）

めてカワラケを廃棄したと考えられる。40cm大の平石を二つ並べ、その石の間や上下にカワラケ22枚（1～22）と破片3、内耳溝の破片と木片が廃棄されていた。カワラケはいずれもⅡ群6類1種のいわゆる「板状カワラケ」と呼ばれるものである。

（5）土坑

土坑は1区から5区まで479基の土坑が出土している。これらの土坑は形態と規模からいくつかに分類できるため、遺跡全体の土坑についてここで述べたい。

第I群 平面形が方形と長方形の土坑。遺構の大きさは、上端長軸54cm～228cm・短軸44～144cm・下端長軸40～218cm・短軸28～132cm・深さ5～83cmである。大きさはまちまちだが、大きさが130cm以上と以下、断面形が皿状か盤・樽状で次の4種に分類できる。

1類：上端長軸が54～104cmで断面形が皿状の土坑。

2類：上端長軸が62～115cmで断面形が盤・樽状の土坑。

3類：上端長軸が155～232cmで断面形が皿状の土坑。小規模な方形堅穴である。

4類：上端長軸が134cmで断面形が樽状の土坑。1区62号土坑（第11・12図）のみである。

第Ⅱ群 平面形が円形・楕円形の土坑。遺構の大きさは上端長軸48~164cm・短軸22~136cm・下端長軸36~146cm・短軸18~120cm・深さ6~60cmである。断面形は皿状・盤状・樽状・袋状・不整形がある。

第Ⅲ群 平面形が不整形の土坑。遺構の大きさは、上端長軸54~170cm・短軸36~96cm・下端長軸36~150cm・短軸18~80cmである。断面形は皿状・盤状・樽状・袋状・不整形がある。

第Ⅳ群 小規模で柱穴状の土坑。全部で377基が検出され、本遺跡の主体となる土坑である。平面形は円形と方形・長方形がある。遺構の大きさは上端長軸が14cm~72cm・短軸12~66cm・下端長軸6~55cm・短軸2~44cmである。平均を見ると上端長軸約37cm・短軸約29cm・下端長軸約26cm・短軸約19cm・深さ約18cmである。4区1号掘立柱建物址のように一列に並ぶ例もあるところから、掘立柱建物址の柱穴の可能性が大きい。

以上の分類から1区の土坑を見ると、次の通りである。

第Ⅰ群 1類 - 5基 2類 - 3基 4類 - 1基 第Ⅱ群 - 21基 第Ⅲ群 - 10基 第Ⅳ群 - 200基

第Ⅳ群が極めて多く、掘立柱建物址の柱穴と考えれば、多くの掘立柱建物址が数回建て替えられた痕跡であると考えられる。土坑が密集するのはグリッドソ35・36を中心とする場所と、グリッドト41・方形窓穴の周辺である。方形窓穴周辺の土坑群は、方形窓穴に関連する土坑の可能性がある。第Ⅳ類の平面形は方形・長方形が985基、円形・楕円形が105基、不整形が9基である。第Ⅳ類の中で、13・530・575号土坑（第15・16図）は土坑中に平石が埋置してある。69号土坑（第15・16図）は木柱を平石で押さえている。3・147・168号土坑（第15・16図）は木柱はないが、石で木柱を押さえた痕跡がある。43号土坑は角石を2つ並べて上面が平面になるように配置している（第15・16図・図版5-2）。土坑の形態は異なるが第Ⅲ類に平石を置く50号土坑（第15・16図）や平石を下に置きおそらく柱を固定するために置かれた4号土坑がある（第15・16図）。33号土坑（図版4-8・5-1）からは木柱が土坑内に直立して出土している。掘立柱建物址の柱を固定するために掘られた穴である。木柱はすべて角材である。土坑の確認は出来なかったが、576号付近と23号土坑付近、4号土坑付近（第15図）から平石が検出され、礎石建物址の礎石の可能性が考えられる。

第2節 2区の遺構

1. 2区の層序（第28・30図）

トレチZ46から1区側は、基盤層に疊を多く含む。1区付近は遺物包含層まで40cmほどで浅いが、グリッドQ60付近から上部の盛り土が深くなる。江戸時代までに堆積した層もあるが、だいたい近代以降の盛り土である。第28図の土層を見ると、1~6層までが近代以降の埋め土、12層までが近世の包含層で、16・18・22層以下が中世の包含層であると考えられる。中世の包含層まで地表面から144cmの深さである。第30図の土層を見ると、9層までが近世の包含層で、その下の層が中世の包含層であると考えられる。地表面から中世の包含層まで177cmの深さである。2区にも近世以降のガニ水道が至るところで見ることができた。以上のことからトレチZ46から1区側は地形が高くなり、Z46で下がり、南東方向へ向かって下がっていく。

2. 発掘された遺構

2区から検出された遺構は、掘立柱建物址1・溝址6・カワラケ溜まり1・集石13・井戸址1・土坑48・焼土址1・築溜まり1・貼り床状遺構1・常滑窯埋置遺構1である。調査区内からは大量の疊が出土しているが、疊中からカワラケなどの遺物がまとまって出土するところから、自然の集石ではなく人為的な集石の可能性が考えられ、集石とした。カワラケが大量に出土するのが特徴的である。また、常滑窯が出土し

ているが、この壺に間違する遺構は確認できなかった。

(1) 堀立柱建物址

堀立柱建物址と思われる遺構は1号堀立柱建物址のみである。グリッドZ47～イ44から柱穴状の土坑が34基検出されているが、明確に建物址となるものはなかった。5号集石付近からも堀立柱建物址のものと考えられる木柱があるため、他に堀立柱建物址があった可能性がある。

1号堀立柱建物址（第30図・図版10-1～3・12-5）グリッドK68・69・L68・69に位置する。13号集石下部の19層中から検出された。角材の木柱が3本検出され、ほぼ一列に並ぶことから堀立柱建物址であると判断した。木柱の上部がほぼ同じ高さで切られているため、6号溝址や13号集石以前に構築されたと考えられる。木柱A・Bの配置から軸線方向はN-43°-Wである。遺構の規模は大部分が調査区外のため規模は不明である。木柱A-B間は350cm、B-C間は280cmである。それぞれの柱の間隔が広いため、おそらくその間に柱があった可能性がある。木柱Cは横倒しの状態で検出されているため、元々あった位置から移動していると考えられる。遺物については6号溝址で述べる。6号溝址・13号集石や周辺から14世紀前半～15世紀中頃の遺物が出土しており、本遺構はその最下層にあたると考えられるため、14世紀前半の遺構であると考えられる。

(2) 溝址

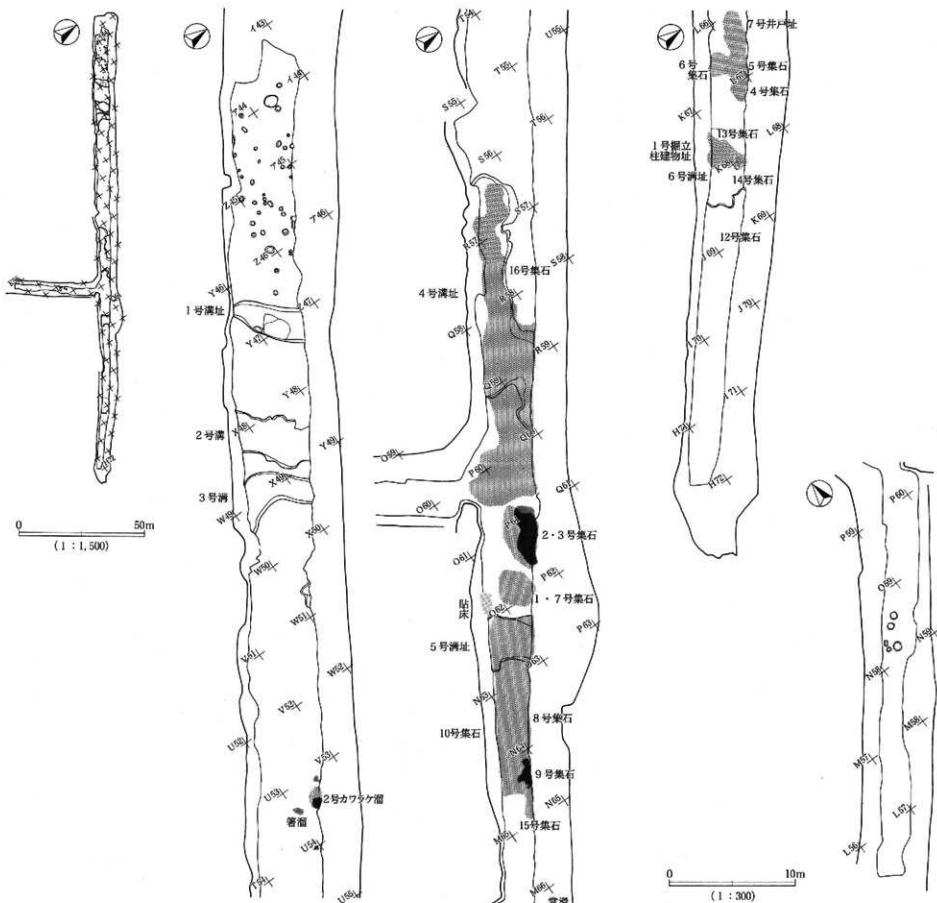
2区には溝址が6条検出された。これらの溝址はほとんどが北東-南西方向へ伸びている。

1号溝址（第22図・図版9-1）グリッドY47・Z47・48に位置する。溝が伸びている方向は調査区外であるため、規模は不明であるが、幅は上端248cm・下端206cm、深さは42cmである。軸線方向はN-50°-Eである。平面形はなだらかに南北方向で狭くなっている。遺構の底面は一部入り組んでおり、壁は外側に開いて立ち上がっている。出土遺物は瀬戸美濃系平碗2・祖母懐壺1、白磁碗1、常滑窯壺2、撫き石1である。時期は古瀬戸後I期と後IV古期が出土しているため、遺構の時期は14世紀末～15世紀前半であろう。

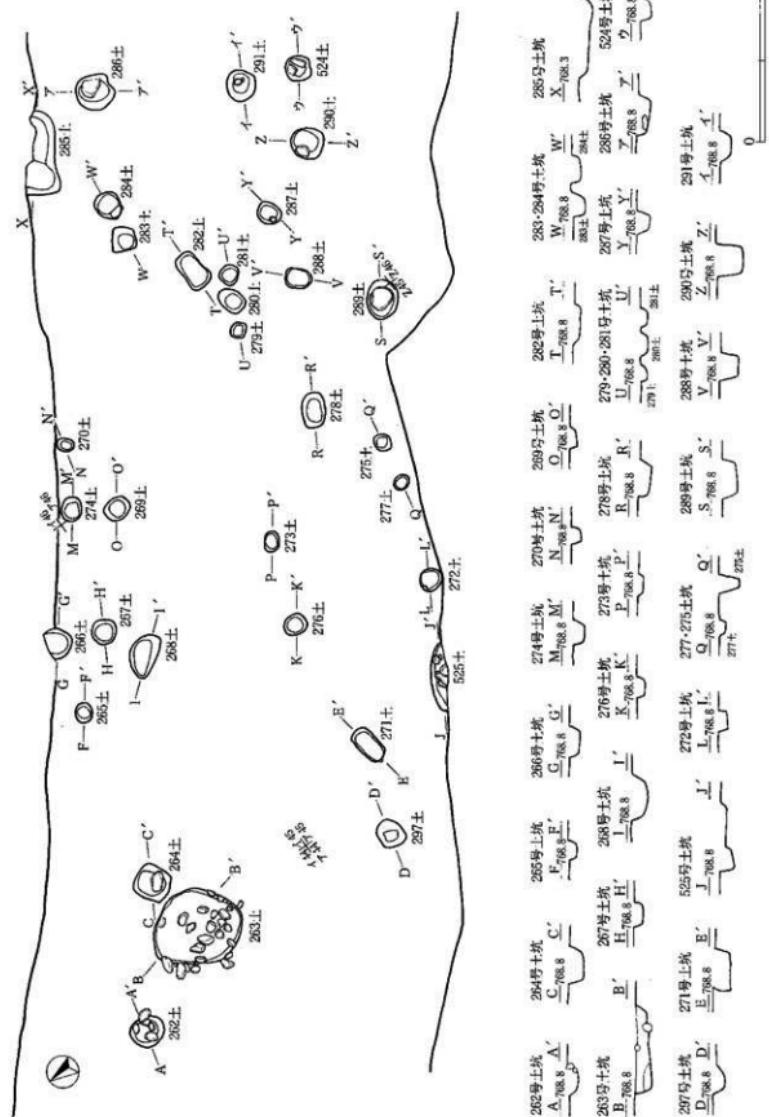
2号溝址（第23図・図版9-2）グリッドX48・49・Y48・49に位置する。溝が伸びている方向は調査区外であるため規模は不明であるが、幅は上端380cm・下端336cm、深さは40cm、軸線方向はN-44°-Eである。上端は直線ではなく、入り組んでいる部分がある。また、遺構の南東側は上端が不明瞭である。溝の底部は平坦で、壁が外側に開くように立ち上がっている。出土遺物は手握ねカワラケ4・ロクロカワラケ39（132～134）、瀬戸美濃系平碗2・天目茶碗1・祖母懐茶壺1・器種不明1、片口鉢1、常滑窯壺3・土器擂鉢1である。遺物の時期が古瀬戸中III期～後I期であるため、14世紀の遺構と考えられる。

3号溝址（第23図・図版9-3）グリッドX49・50・Y49・50に位置する。溝が伸びている方向は調査区外に出てしまうため規模は不明であるが、幅は上端240cm・下端184cm、深さ26cmである。軸線方向はN-34°-Eである。遺構の南西側が南方向に曲がっている。また、南西側に対して北東側の幅が狭くなっている。底面は若干凹凸があり、壁は外側に開いている。出土遺物は手握ねカワラケ8（135・136）・ロクロカワラケ21（137～141）、瀬戸美濃系平碗1（635）・天目茶碗2（427）・中皿1・柄付片口1・四耳壺4・壺か瓶1・山皿1（535）・龍泉窯系青磁蓮弁文碗1・产地不明白磁碗1・東濃系壺1・常滑窯壺3・漆器皿（651）が出土している。遺物の時期は、古瀬戸前II期～後IかII期が出土し、山茶碗は大洞東、時期は13世紀前半であるため、遺構の時期は14世紀後半であろう。他に骨粉や木の幹の外側が出土している。

4号溝址・16号集石（第26・27図・図版10-6・11-1・2）グリッドQ59・60・61・R57・58・59・60・S57・58・59に位置する。溝の北東側と南側は調査区外のため規模は不明である。また、平面形が不明瞭であるため幅も不明である。確認面からの深さは15cmと非常に浅い。4号溝址は他の溝址と異なり、伸びてい

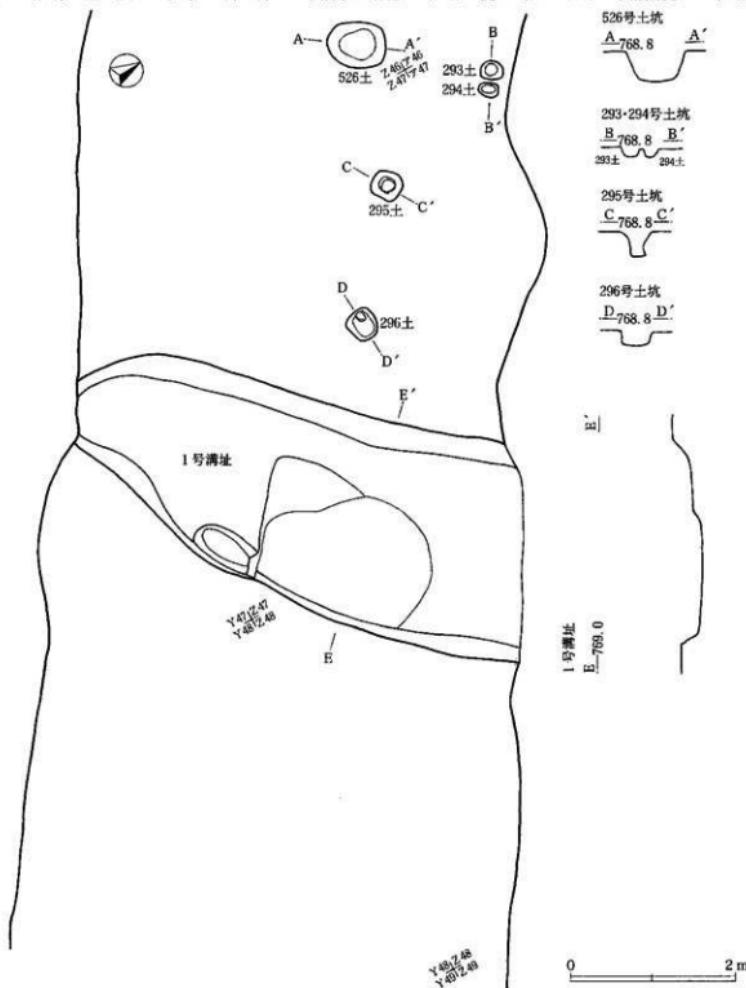


第20図 2区全体図



第21图 2区剖面图(1) (1/60)

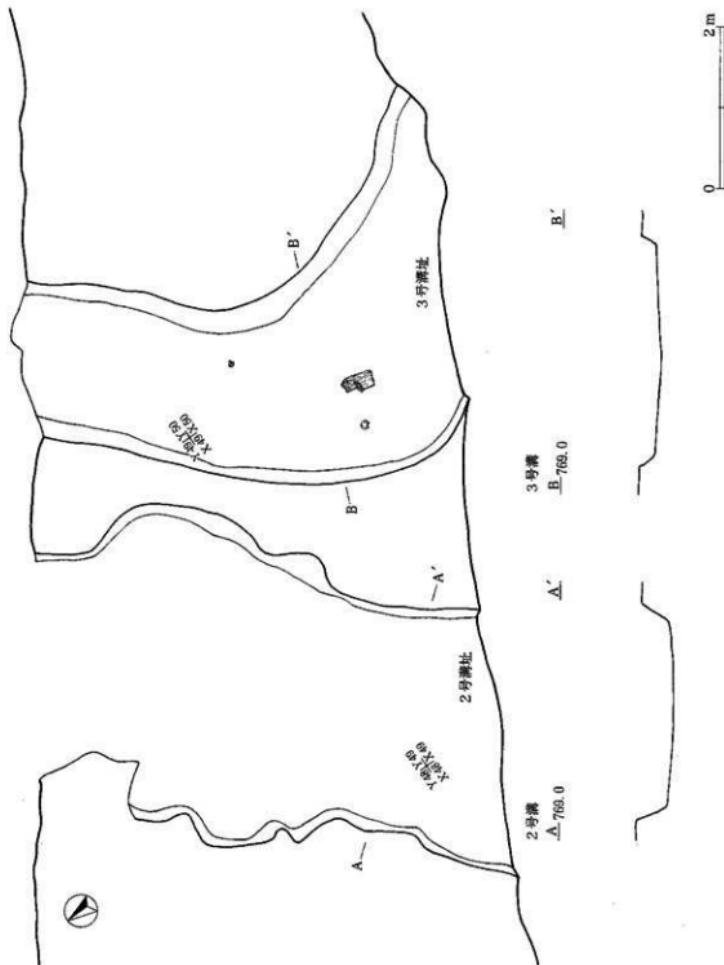
る方向が北西 - 南東であると思われる。遺構内部には礫が大量に入っている。この中の比較的まとまった集石を16号集石とした。なぜ礫が溝の中に入っているかは不明であるが、まとまっている部分と散在している部分があるので、まとまっている部分はなんらかの遺構である可能性がある。出土遺物は手捏ねカワラケ6・ロクロカワラケ368(122~131・142~145・178)・瀬戸美濃系碗1・折線中皿1・折線深皿1(494)・水注1(513)・壺か瓶2・不明1・片口鉢5・東濃系山茶碗1(538)・壺27(574・575)・常滑窯壺7・珠洲窓



第22図 2区遺構配置図(2)(1/60)

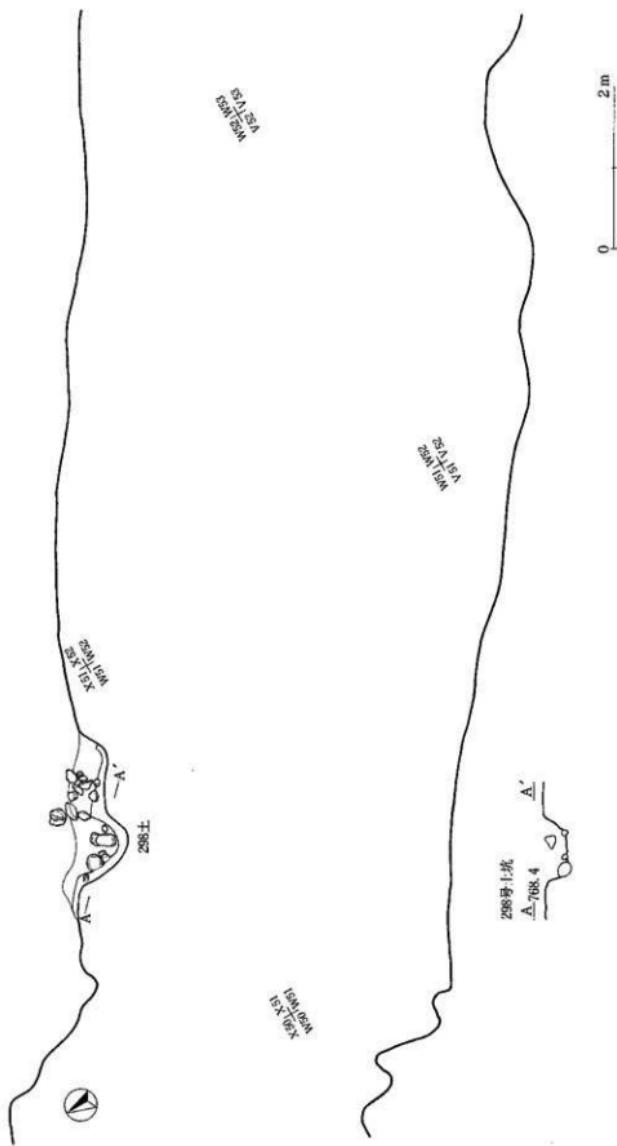
壺1・擂鉢1・瓦器火鉢2(597)・器種不明1・中国龍泉窯青磁碗1・青白磁梅瓶2・水注1・中国天目茶碗1・漆器皿(652)・火打石3である。遺物の時期は古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期・中Ⅰ・Ⅱ期・後Ⅰ・Ⅱ期・珠洲Ⅲ期、磁器は13世紀であるため、13世紀～14世紀の遺構と考えられる。

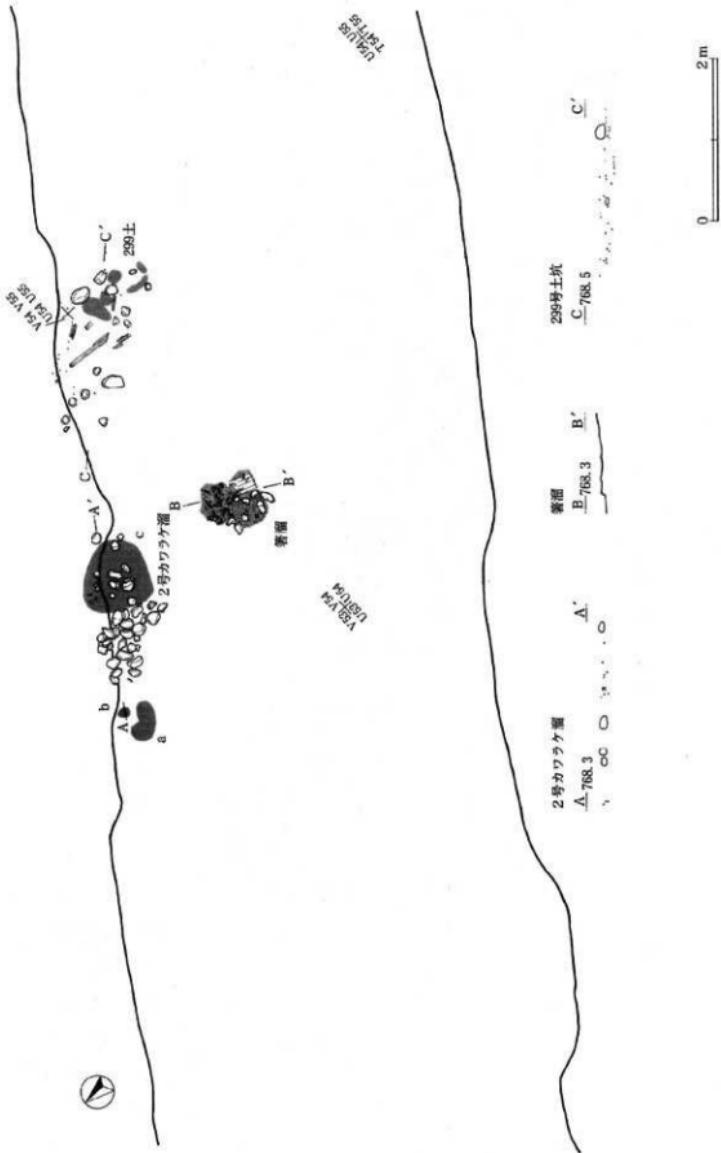
5号溝址(第28図・図版9-4・5・6) グリッドO62・63・P63に位置する。溝は北東～南西方向に伸びていると思われるが、調査区外のため規模は不明である。幅は判明しており、上端は166cm、下端は148cm、深さは35cm、軸線方向はN-32°-Eである。溝の縁は直線に伸びている。溝の西側に貼り床がされており、溝がこの貼り床を切るかたちで構築されている。溝の内部には10cm～40cm大の礫が大量に入っている。礫は



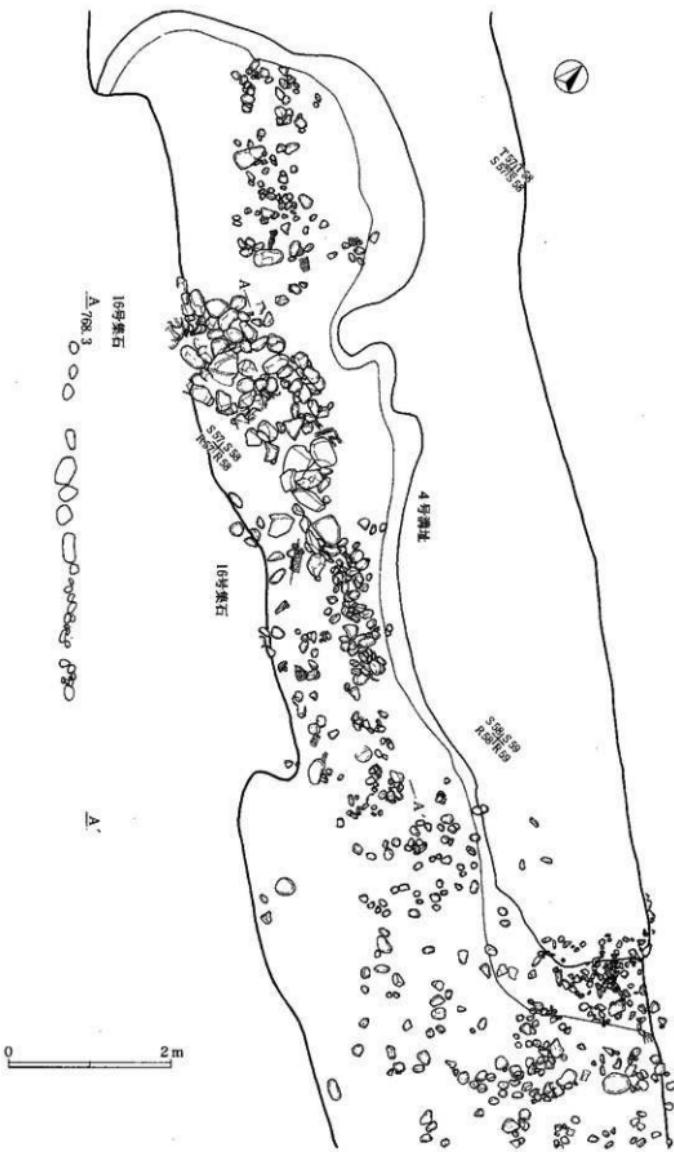
第26図 2号溝配図(3)(1・2号溝址)(1-60)

第24圖 2區地質剖面圖 (4) (1/50)

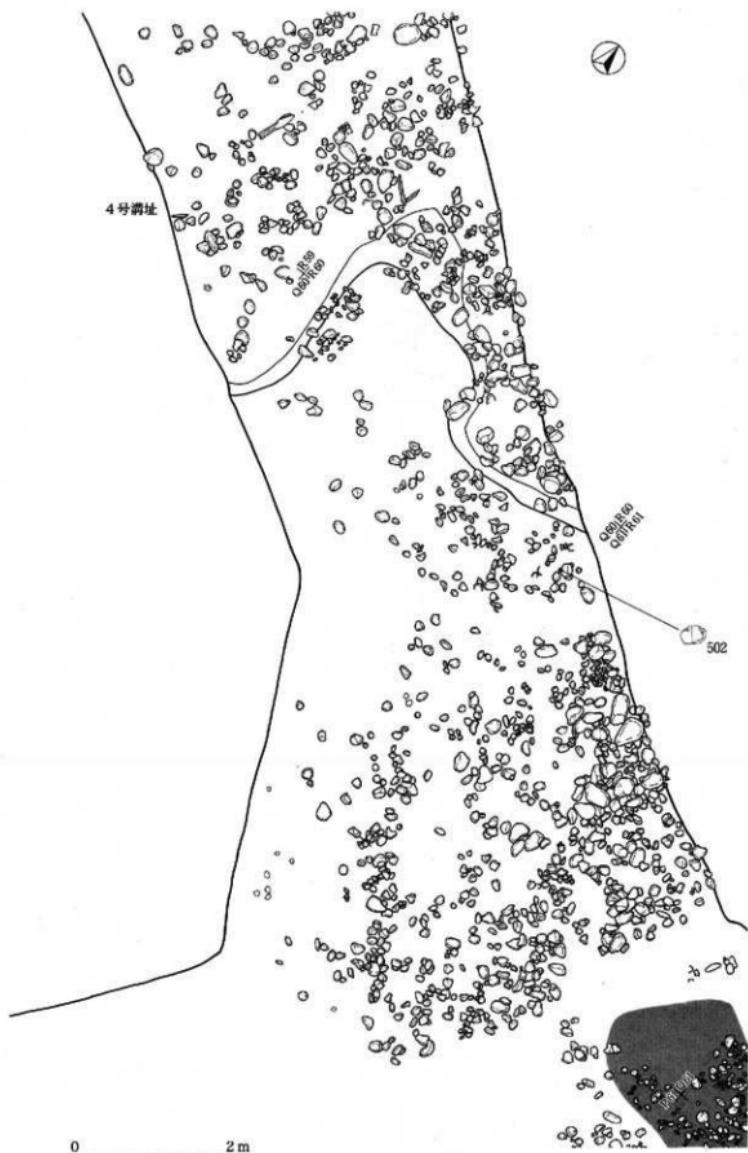




第25図 2区地質断面図(5) (カワラケ掘・番溜・29号土坑) (1/80)



第26図 2区遺構配図(6)(4号溝址、16号集石)(1/60)



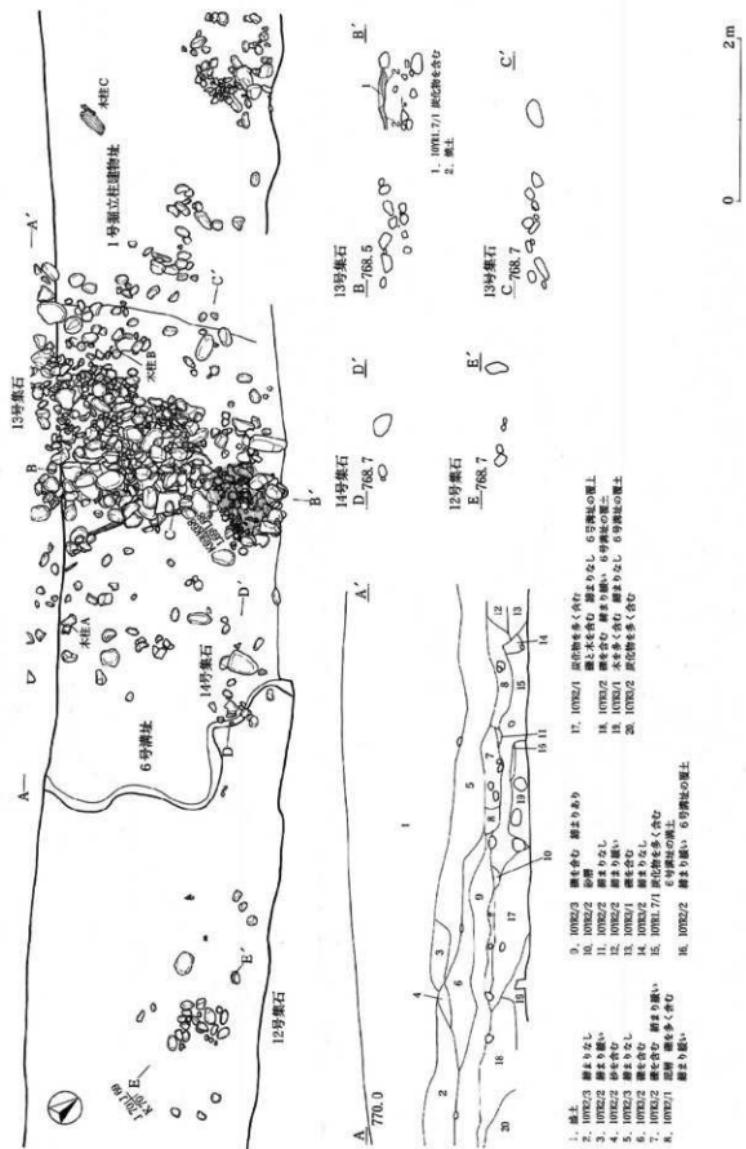
第27図 2区遺構配置図(7)(1/60)

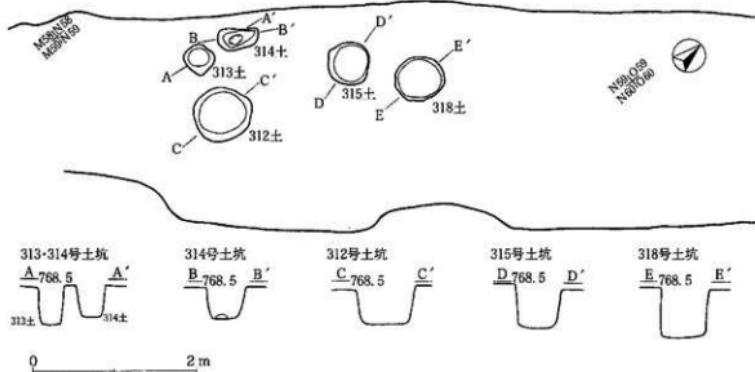


第28図 2区段構成図(8)(5号灘址、1~3・7号集石) (1/60)



第29图 2区勘探配置图(9) (4~6·8·9·15号集石洼地) (1/50)





第31図 2区遺構配置図(11)(1/60)

溝中央部に北東-南西方向に集中しているように見える。また、北隅には30cmと50cm大の礫が固まっている。これらの大きめの礫は何らかの遺構の構造物なのであろうか。出土遺物は手捏ねカワラケ2・ロクロカワラケ62(146~154)・平底末広碗1(399)・盤類2である。遺物の時期が古瀬戸中Ⅲ期~後Ⅲ期であるため、15世紀前半までの遺構であろう。

6号溝址(第30図・図版10-1~3) グリッドK68・69・L68・69に位置する。発掘時は、水の湧出が酷く泥の海であったため掘り方を明確に確認する事ができず、わずかに南東側の掘り方を確認しただけだった。おそらく他の溝址同様に北東-南西方向の軸線と考えられ、軸線方向はN-45°-Eである。わずかに確認した溝の縁は直線ではなく、かなり蛇行している。溝の内部には北東-南西方向に5cm~45cm大の石が集中しており、この集石の上部から焼土量が検出された。この集石を13号集石とした。13号集石の土層断面図を見ると、7・8層目以下の溝址の覆土の中にあり、溝が埋った後に構築されたと考えられる。出土遺物は手捏ねカワラケ3・ロクロカワラケ400(117~121・155~160)、瀬戸美濃系天目茶碗6・鉢皿1・直線大皿1・盤類1・盤型鉢1・柄付片口1・梅瓶1・水注1・仏花瓶1・入子1・片口鉢9・山茶碗1・東濃系甕3・常滑窯甕14・瓦器火鉢1・木製下駄(702)・火打石2である。遺物の時期が1号掘立柱建物址で取り上げたように14世紀前半~15世紀中頃であるため、この時期の遺構であると考えられる。

(3) カワラケ溜まり・集石

カワラケ溜まりと集石という遺構名を付したが、2区の集石はカワラケが多く伴い、同様の性格をもつ遺構と考えられるため、ここでは、同じ項目とした。

2号カワラケ溜まり(第25図・図版10-4) グリッドV54に位置する。84片のロクロカワラケが出土した。カワラケは3ヶ所に分かれて散布している。この3ヶ所にa・b・cの番号を付した。aは46×26cm、bは15×12cm、cは88×70cmの範囲でカワラケが集中して出土した。そのほぼ中央部に20cm大の礫が集中する集石がある。299号土坑同様、土坑であった可能性がある。出土遺物は、前述したロクロカワラケ84片(67~69)の他、瀬戸美濃系天目茶碗1・常滑窯甕1・龍泉窯系青磁蓮弁文碗1(636)がある。天目茶碗が古瀬戸中Ⅲ期、青磁碗が13世紀前半であるところから、13世紀中頃までの遺構である可能性がある。

1号集石(第28図) グリッドP62・63に位置する。遺物の出土量は少なく、カワラケ溜まりとは異なる。付近に2・3号集石と7号集石・5号溝址があり、礫が多く出土する。集石は5cm~40cmほどの礫で構成され

ている。自然なか人為的な遺構なのかは不明であるが、長方形に礫のまとまりが見えるところから集石とした。出土遺物はロクロカワラケが4、瀬戸美濃系丸皿1(480)・珠洲窯の擂鉢1である。丸皿が古瀬戸中I～III期であるため、14世紀前半の遺構の可能性がある。

2・3号集石(第27・28図・図版11-4～7)グリッドP61・62・Q61・62に位置する。当初、2ヶ所の集石としたが、カワラケが大量に出土したところから同一の遺構とした。3cm～25cm大の礫で構成される。カワラケが散布する範囲は498cm×190cmと他のカワラケ溜まりに較べて範囲は広い。出土遺物は手捏ねカワラケ13・ロクロカワラケ1,631(70～94)・瀬戸美濃系平碗4(402・403)・天目茶碗2・鉢皿1・折縁深皿1・柄付片口1・梅瓶3・四耳壺1・壺か瓶1・器種不明1・東濃系山茶碗1・片口鉢3・壺11・常滑窯壺11・珠洲窯擂鉢1(564)・瓦器火鉢3・中国青白磁小碗1・龍泉窯青磁碗2・壺1・產地不明碗1・砾石1である。遺物の時期は古瀬戸前II～IV期・中I～III期・後I期・山茶碗は大洞東か臨之島・珠洲擂り鉢はIV期、貿易陶磁器は13世紀前半であるので、遺構は15世紀までの遺構か。

4号集石(第29図・図版12-4)グリッドM67・L67・68に位置する。5cm～35cm大の礫で構成されている。集石の範囲は336cm×120cmである。カワラケはあまり出土しないため、カワラケ溜まりではない集石である。出土遺物はロクロカワラケ2(95・96)・瀬戸美濃系片口鉢1・東濃系壺1・常滑窯壺2がある。

5号集石(第29図・図版12-5)グリッドM67に位置する。5cm～35cm大の礫で構成されている。集石の範囲は412cm×196cmである。出土遺物ほとんど確認できず、カワラケ溜まりではない集石である。出土遺物は古瀬戸後IV古期の平碗(404)1点だけである。遺物の時期から15世紀中頃の遺構か。

6号集石(第29図)グリッドL67に位置する。5cm～25cm大の礫で構成されている。集石の範囲は198cm×174cmである。出土遺物は確認できず、カワラケ溜まりではない集石である。

7号集石(第28図・図版11-8)グリッドP63に位置する。5cm～30cm大の礫で構成されている。集石の範囲は216cm×88cmである。出土遺物は確認できず、カワラケ溜まりではない集石である。出土遺物は手捏ねカワラケ2・ロクロカワラケ66・瀬戸美濃系柄付片口1・梅瓶2・壺1・片口鉢6・常滑窯1・瓦器火鉢3・内耳土器1である。出土遺物の時期は古瀬戸中I～IIIであるため、14世紀前半の遺構と考えられる。

8・9・10号集石(第29図・図版12-1・2)グリッドN64・65・O62・63・64に位置している。当初、別々の集石と考えていたが、それぞれの集石の境界が明確ではないため同項目とした。9号集石は礫の下からロクロカワラケが396片出土したためカワラケ溜まりと考えられる。ほとんどの礫はカワラケ溜まりの上部から検出されているため、礫は後にカワラケ溜まりの上に置かれたと考えられる。時期的には異なる遺構の可能性がある。9号集石のカワラケ出土の範囲は、240cm×150cmである。8・10号集石はN・O64の範囲に特に石が集中している。礫の大きさは3cm～35cm大で、方形に石が並んでいるように見える。8・9・10号集石から出土した遺物は、手捏ねカワラケ5・ロクロカワラケ950(97～114)・瀬戸美濃系天目茶碗・折縁深皿1・直縁大皿3(523)・壺か瓶1・柄付片口2(490・491)・片口鉢1・器種不明1・產地器種不明1・東濃系壺4・常滑窯壺4・龍泉窯青磁碗1・杯(640)・瓦器火鉢3・銅製鉢1(742)がある。遺物の時期は、古瀬戸前Ⅲ期・IV期・後Ⅱ期・後IV古期、磁器が13世紀であるので15世紀中頃であると考えられる。

12号集石(第30図・図版13-1)グリッドK69・70に位置する。5cm～20cm大の礫の集石で、集石の範囲は128cm×106cmである。この中から手捏ねカワラケ1・ロクロカワラケ105(115・116)・瀬戸美濃系鉢1・常滑窯壺1と馬か鹿の歯や骨が出土している。

13号集石(第30図・図版10-1・2)グリッドK68・69・L68・69に位置する。6号溝跡の中から検出された。この集石は5cm～45cm大の礫が集中し、北東～南西方向に伸びている。集石の上部には焼土跡があり、

焼土の厚みは6cm程で、かなり厚く焼き締まっていた。集石の下から沿うかたちで20cm大の木が並んで出土し、集石の構成材であることが考えられる。出土した遺物は、ロクロカワラケ43(117~121)・瀬戸美濃系片口鉢1・東濃系壺2(573)・常滑窯壺3・景徳鎮白磁1である。

14号集石(第30図) グリッドK69に位置する。6号溝址と重複するが、本遺構の方がレベルが高いため6号溝址より新しい遺構であると考えられる。40cm大の礫の周辺に10cm大の礫が散布する小規模な遺構である。

15号集石(第29図・図版12-3) グリッドN65に位置する。9号集石の続きの集石と考えられるが、13cm以下の礫が集中しているので、別遺構であると考えた。一部排水用の溝にかかってしまったので遺構の規模はわからないが、北西-南東方向が174cmである。方形か長方形の集石であると考えられる。出土遺物は手捏ねカワラケ2・ロクロカワラケ8である。

(4) 井戸址

7号井戸址(第29図・図版13-2・3) グリッドM67に位置する。ほとんどの部分が調査区外であるため井戸址かどうかは不明だが、木の板の匂いが確認できたため井戸址と判断した。

(5) 土坑

2区の土坑は48基検出されており、I群1類が2基、2類1基・II群6基・III群1基・IV群36基である。土坑はZ47からY44の範囲とN58の範囲で検出され、前者はIV群が主体である。後者も5基、IV群の土坑が検出され、掘立柱建物址の柱穴の可能性が考えられる。次に特徴的な299号土坑について述べる。

299号土坑(第25図) グリッドU・V54・55に位置する。当初、土坑の掘り方があったため土坑としたが、漏水により泥の海となってしまったためプランが不明である。遺構内部から木や5~30cm大の礫が検出された。また、カワラケが997出土しており、2号カワラケ溜まりと同様のカワラケ溜まりの可能性がある。出土した遺物は、手捏ねカワラケ31・ロクロカワラケ966(162~170)・瀬戸美濃系平碗1・小天目茶碗1(426)・鉢皿1・片口鉢6・器種不明2・東濃系壺5・瓦器火鉢1・中国景德鎮白磁碗1が出土している。

(6) その他の遺構

箸溜まり(第25図・図版10-5) グリッドU・V54に位置する。付近に2号カワラケ溜まりと299号土坑があるため、これらとの遺構に関連する遺構か。下に板材があり、その上に折れた箸が出土しているため、木箱に入れたか、板材の上に載せて廃棄したと考えられる。

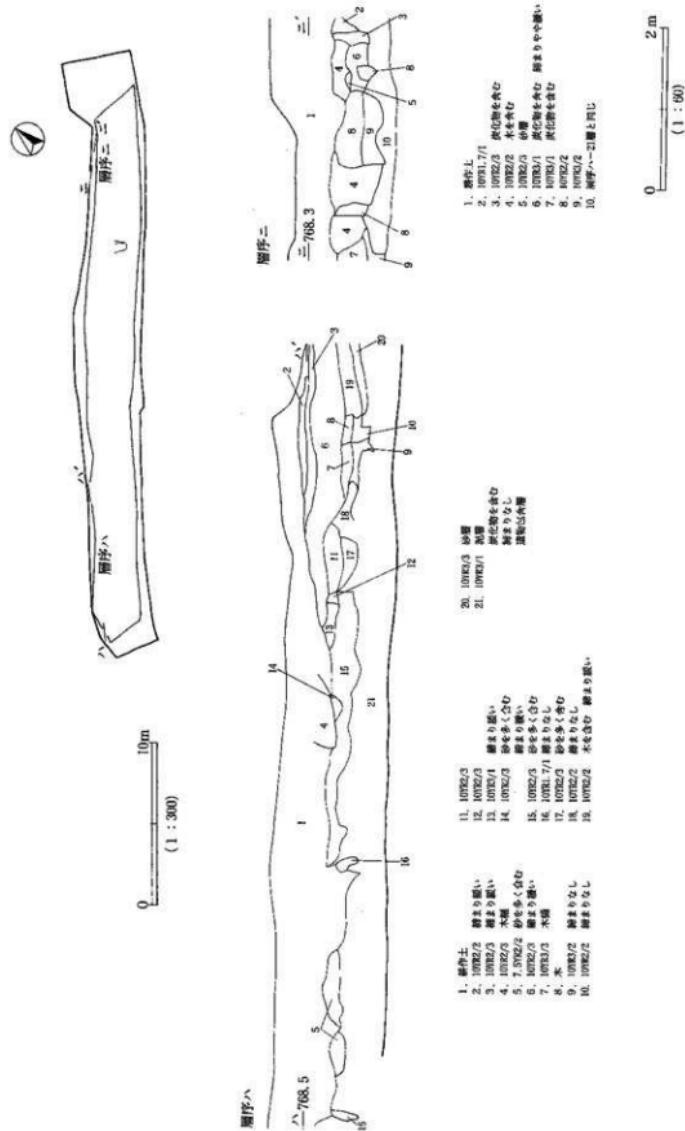
貼り床状遺構(第28図) グリッドO62・63に位置する。5号溝址に切られている。白黄色の粘土を200cmの範囲で貼った遺構である。

常滑窯埋置遺構(第29・66図・図版13-4・5) グリッドM66に位置する。排水溝の掘削を行っている時に出土したため、溝足に調査はできなかった。出土した常滑窯は第66図585に図示した。上部が欠損し口縁部から頸部にかけて窯の内部に落ちていた。胴部は一部がなく、底部はほとんど残っていなかった。内部に582~584の別個体の常滑窯の口縁部から頸部が入っていた。

第3節 3区の概要

3区の調査は立会調査で対応した(第32図・図版14-1・2)。付近の汐の漏水が酷く、遺構は確認できなかった。遺物の包含層は21層である。水捌けが非常に悪く泥状であったため、平成12年の前宮前の立会調査と併せて考えると、沼地であった事が考えられる。遺物は手捏ねカワラケ40(191~195)・ロクロカワラケ58(196~199・201)・高台付カワラケ1(200)・古瀬戸後1期の灰釉折線深皿1・天目茶碗1・中津川窯の捏ね鉢2・小刀1点(743)、平安時代の灰釉陶器1片が出土している。

第三回 3区全体圖と某本圖序



第4節 4区の遺構

1. 4区の層序 (第35・36図)

4区は2区同様S47から1区側は地形的に上がり、中世の包含層まで浅くなっている。S47から南東側は包含層まで深くなっている。S47の地形の落ち際から、粉々になった中津川窯の甕が出土している。これは、盛り土をして造成した時に盛り土の中に含まれていた甕が一緒に突き込まれたと考えられる。近代の埋め土が厚く、厚いところでは135cm埋められていた。グリッドW68から南東側は、再び地形が高くなっていく。

荒玉社周辺・經宮・中通り各遺跡の試掘調査を行ったが、すべての場所から層序チの7層のように200~250cmの間隔で溝が掘り込まれ、その中には砂が詰まっていた。この層は、層序リ3層やメ3層でも確認している。この層について地元の人々に聞いたところ、記憶がないとのことで、用途はわかっていない。溝の中に砂が詰まっているところを見ると、明治36年の水害によって埋まったものだろうか。

層序ヘでは、層序31までは近世以降の生活面と考えられ、薄く平行に堆積している。遺物がほとんど出土しないところから、水田などの農地として使用されていたことが考えられ、場所によっては砂層が間にに入るため、水害で農地に砂が被った上に、新たに土を盛って農地にしたと考えられる。31層は黄色の砂層で、他の調査区内でも所々で見ることができる。この黄色砂層の下が中世の遺物包含層である。層序ヘでは包含層まで156cm、ホ168cm・ト195cm・チ171cm・リ129cm・ヌ138cmである。

2. 発掘された遺構

4区から礎石建物址2・掘立柱建物址1・溝址4・井戸址2・集石1・土坑151・焼土址1・貼り床状遺構1・木溜まりが出土した。礎石建物址は2棟検出され、7区の礎石建物址との関連性が注目される。礎石建物址の北西側の遺構は確認できなかったが、大量の木が出土しており、宮川から運ばれたか、洪水によって付近の建物や生活道具が滞留した場所であると考えられる。

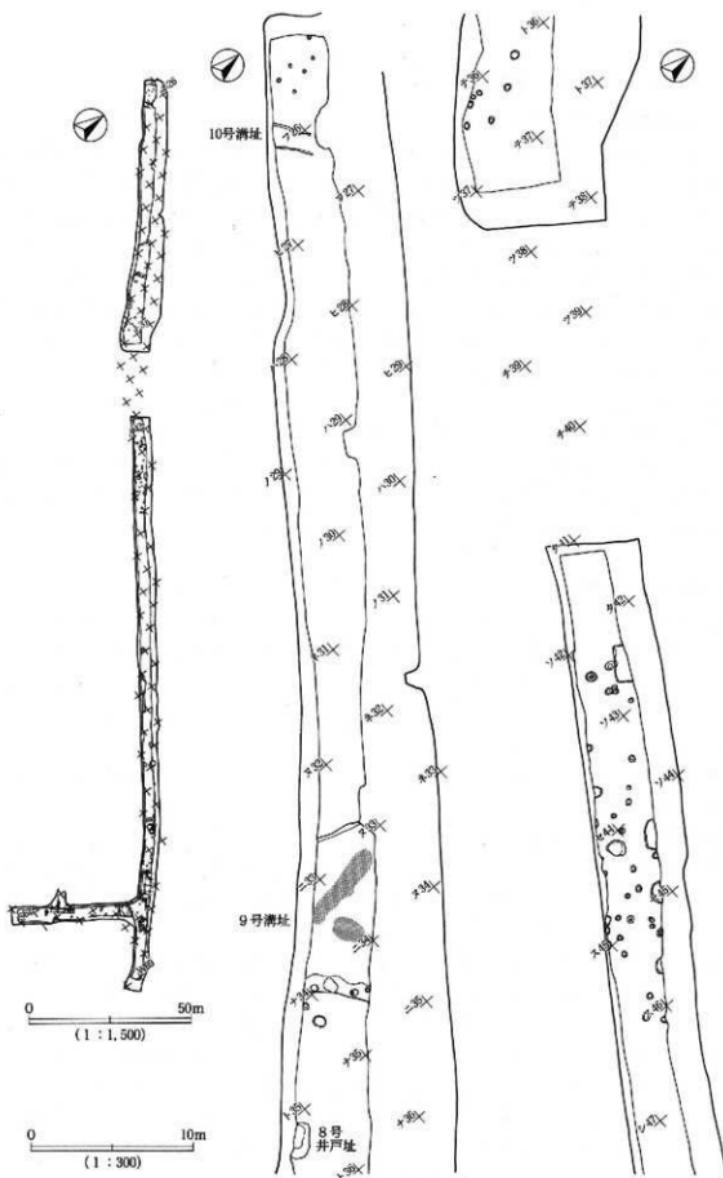
(1) 磊石建物址

礎石建物址は2棟検出している。いずれも4区の東側から検出されており、この周辺に礎石建物址が集中する可能性が考えられる。

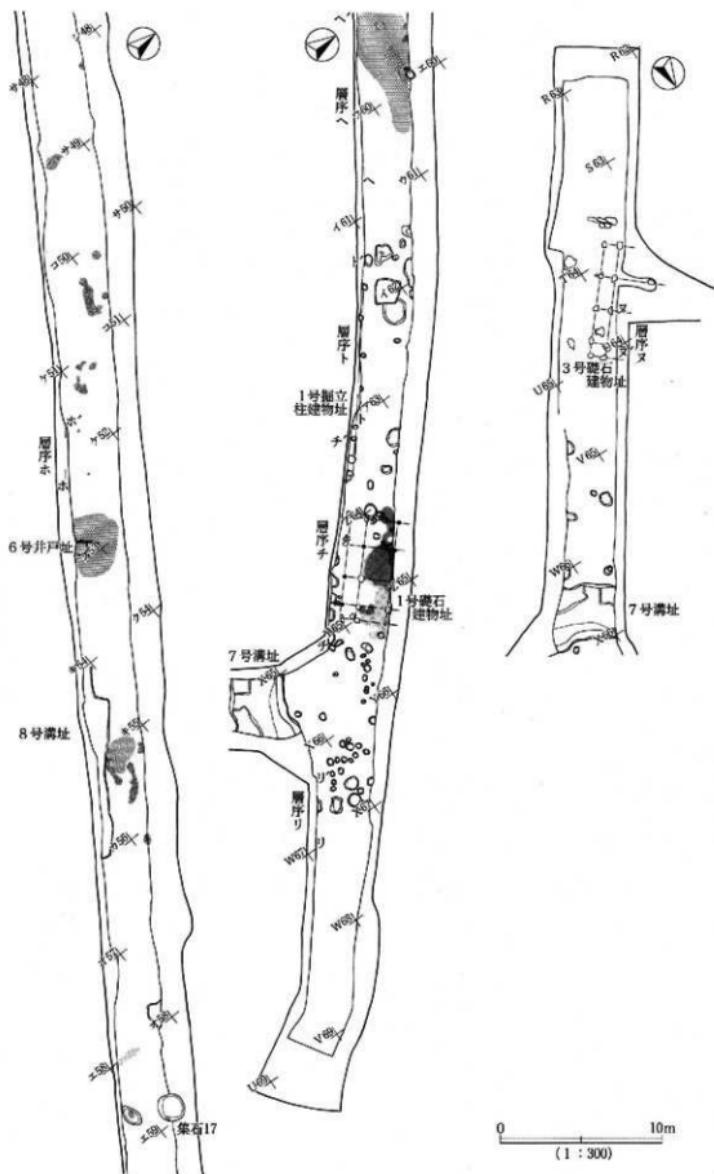
1号礎石建物址（第47図・岡版20~3~7・21-1・2）グリッドZ64・65・66・A65に位置する。当初2棟の礎石建物址が重複していることが考えられたため、1・2号礎石建物址としていたが、発掘を進めるうちに1棟の礎石建物址であることが判明した。注記は当初の通り1号・2号礎石建物址と分かれているが、本稿では、1号礎石建物址とした。

遺構の規模は大部分が調査区外であるため不明だが、礎石を9基確認し、配列から1間×3間の建物部分と半間×3間・半間×1間半の部分が判明した。半間の部分をL字に廻らした状況から、建物の縁側部分であると考えられる。遺構は、調査区外まで伸びている可能性がある。遺構の軸線方向はN-49°-Wである。建物の本体の礎石の幅はd-e-h-i間が180cm、d-h間が184cm、e-i間が192cmであり、まちまちである。縁側部の幅はc-d-g-h間が80cm、b-f間が90cmである。礎石の大きさは、aが29×21cm、bが24×21cm、cが38×28cm、dが35×30cm、eが45×35cm、fが40×24cm、gが28×17cm、hが41×31cmである。礎石の下は、大量の炭化物とカワラケが多く含む粘土によって突き固められて造成されていた。スクリーントーンを貼った場所が造成面とカワラケ溜まりである。

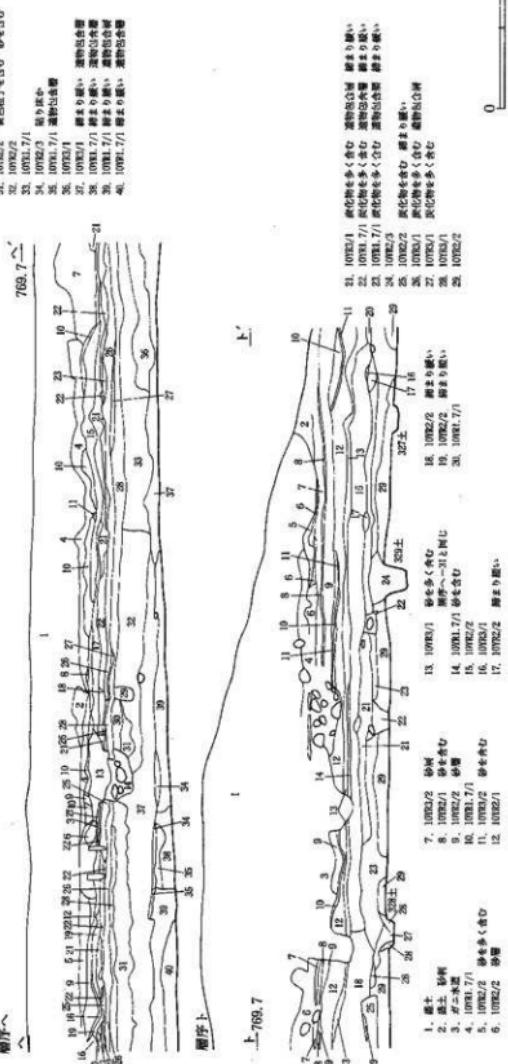
礎石建物址周辺には土坑が多く、南西側にある土坑は礎石建物址より下層から検出された。礎石建物址内



第33図 4区全体図 (1)



第34図 4区全体図 (2)



第35図 4区の断面(1)

断面图
チ-770.0

フ'



1. 地土.
2. 7.0m/2.5 ガラ水層
3. 10m/3.1 沈れ槽じら
4. 10m/3.2 沈れ槽じら
5. 10m/3.1 沈れ槽じら
6. 10m/3.1 沈れ槽
7. 10m/2.1 沈れ槽
8. 10m/2.1 沈れ槽
9. 10m/2.1 沈れ槽
10. 10m/2.2 沈れ槽
11. 10m/2.2 沈れ槽
12. 10m/2.3 沈れ槽じら
13. 10m/2.2 沈れ槽じら
14. 10m/2.4 沈れ槽じら
15. 10m/3.2 沈れ槽じら
16. 10m/2.1 沈れ槽じら
17. 10m/2.1 沈れ槽
18. 10m/3.1 沈れ槽
19. 10m/2.2 沈れ槽
20. 10m/2.3 沈れ槽
21. 10m/2.3 沈れ槽
22. 10m/2.3 沈れ槽
23. 10m/2.2 沈れ槽じら
24. 10m/2.3 沈れ槽じら
25. 10m/2.2 沈れ槽じら
26. 10m/2.1 沈れ槽じら
27. 10m/2.2 沈れ槽じら
28. 10m/2.1 沈れ槽じら
29. 10m/2.1 沈れ槽じら
30. 10m/2.1 沈れ槽
31. 10m/2.2 沈れ槽
32. 10m/2.2 沈れ槽
33. 10m/2.1 沈れ槽
34. 10m/2.1 沈れ槽
35. 10m/2.1 沈れ槽
36. 10m/2.1 沈れ槽
37. 10m/2.3 沈れ槽
38. 10m/2.1 沈れ槽
39. 10m/2.1 沈れ槽
40. 10m/2.2 沈れ槽
41. 10m/2.2 沈れ槽

断面图

フ' - チ-770.0

フ'



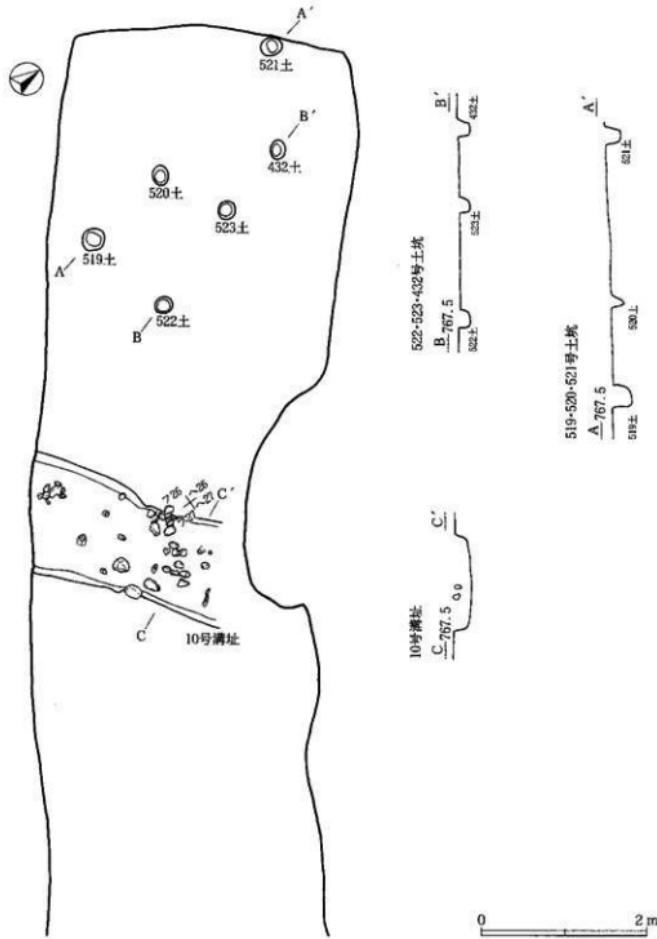
1. 地土.
2. 10m/2.1 沈れ槽じら
3. 10m/2.3 沈れ槽
4. 10m/2.2 沈れ槽
5. 10m/2.2 沈れ槽
6. 10m/2.2 沈れ槽
7. 10m/2.2 沈れ槽
8. 10m/2.2 沈れ槽
9. 10m/2.2 沈れ槽
10. 10m/2.2 沈れ槽
11. 10m/2.2 沈れ槽
12. 10m/2.3 沈れ槽
13. 10m/2.3 沈れ槽
14. 10m/2.3 沈れ槽
15. 10m/2.3 沈れ槽
16. 10m/2.3 沈れ槽
17. 10m/2.2 沈れ槽じら
18. 10m/2.3 沈れ槽
19. 10m/2.2 沈れ槽
20. 10m/2.2 沈れ槽
21. 10m/2.2 沈れ槽
22. 10m/2.2 沈れ槽
23. 10m/2.2 沈れ槽
24. 10m/2.2 沈れ槽
25. 10m/2.2 沈れ槽
26. 10m/2.2 沈れ槽
27. 10m/2.2 沈れ槽
28. 10m/2.2 沈れ槽
29. 10m/2.2 沈れ槽
30. 10m/2.2 沈れ槽
31. 10m/2.2 沈れ槽
32. 10m/2.2 沈れ槽
33. 10m/2.2 沈れ槽
34. 10m/2.2 沈れ槽
35. 10m/2.2 沈れ槽
36. 10m/2.2 沈れ槽
37. 10m/2.2 沈れ槽
38. 10m/2.2 沈れ槽
39. 10m/2.2 沈れ槽
40. 10m/2.2 沈れ槽
41. 10m/2.2 沈れ槽

0 2 m

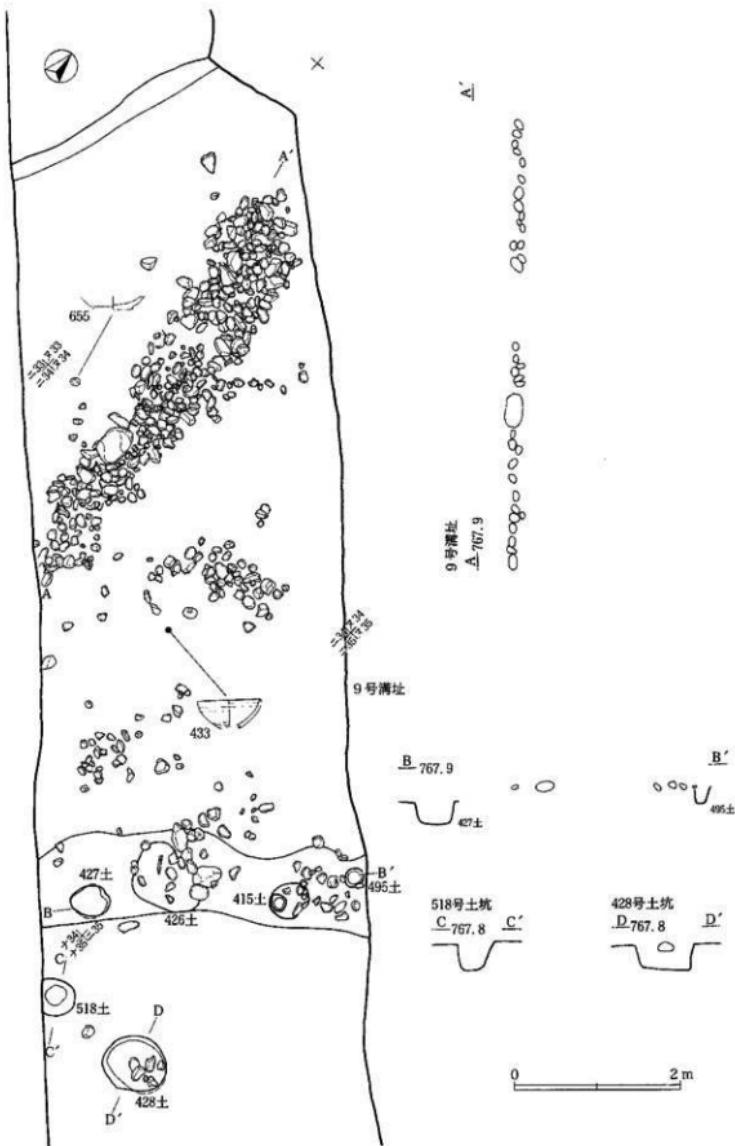
第36図 4区の断面

部にある小さな土坑は造成面上から確認できたものが多く、礎石建物址に関連する遺構の可能性がある。

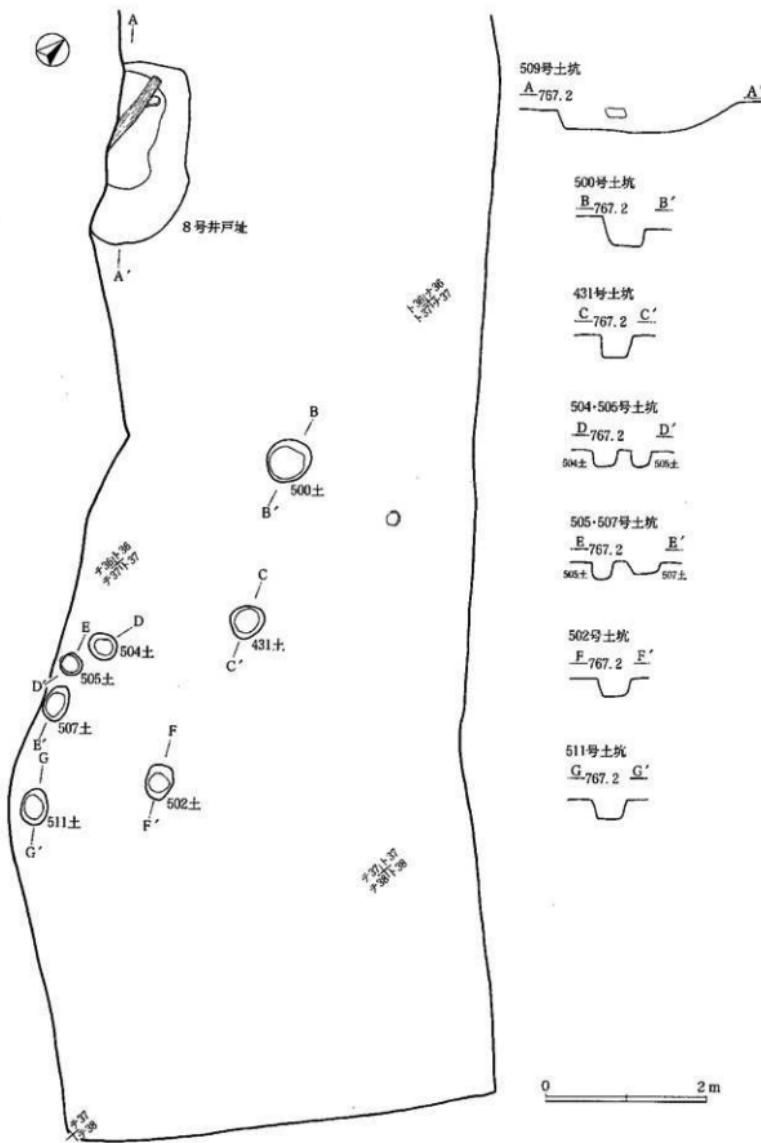
出土遺物は手捏ねカワラケ10(259)・クロカワラケ2,717(202~264)・瀬戸美濃系平碗6(405)・天目茶碗5(431・432)・盤類2・折縁小皿2(465・466)・折縁深皿1(495)・直縁大皿1(524)・壺か瓶1・花瓶1(510)・器種不明1・片口鉢2・中国龍泉窯壺1・碗4・酒会壺2・鉄釉茶入1・東濃系壺1・常滑窯壺2・珠洲窯擂鉢1(566)・器種不明1・瓦器香炉1(592)・火鉢12(600・602)・器種不明2(593)・鐵(755~757)がある。遺物の時期は古瀬戸前Ⅲ・Ⅳ期・中Ⅳ期・後Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期、磁器は13世紀であり、遺物の大部分は礎石建物址の下に突き込まれていたので、15世紀前半以降の遺構であろう。



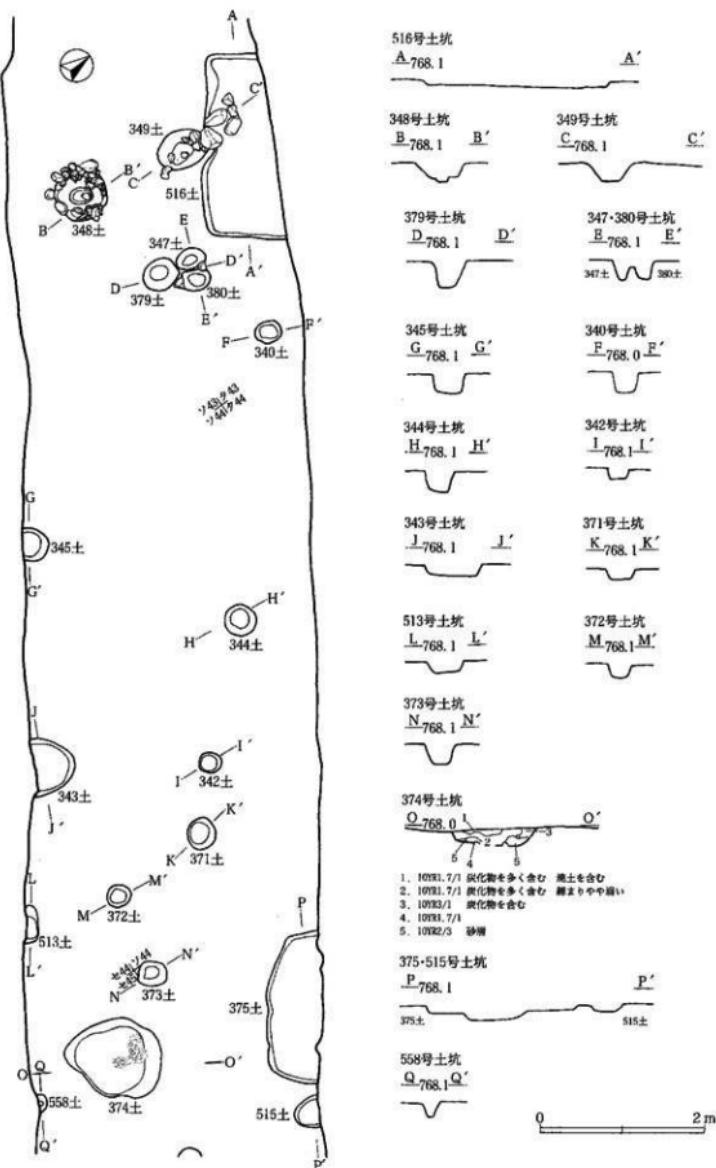
第37図 4区遺構配置図 (1) (10号溝址ほか) (1/60)



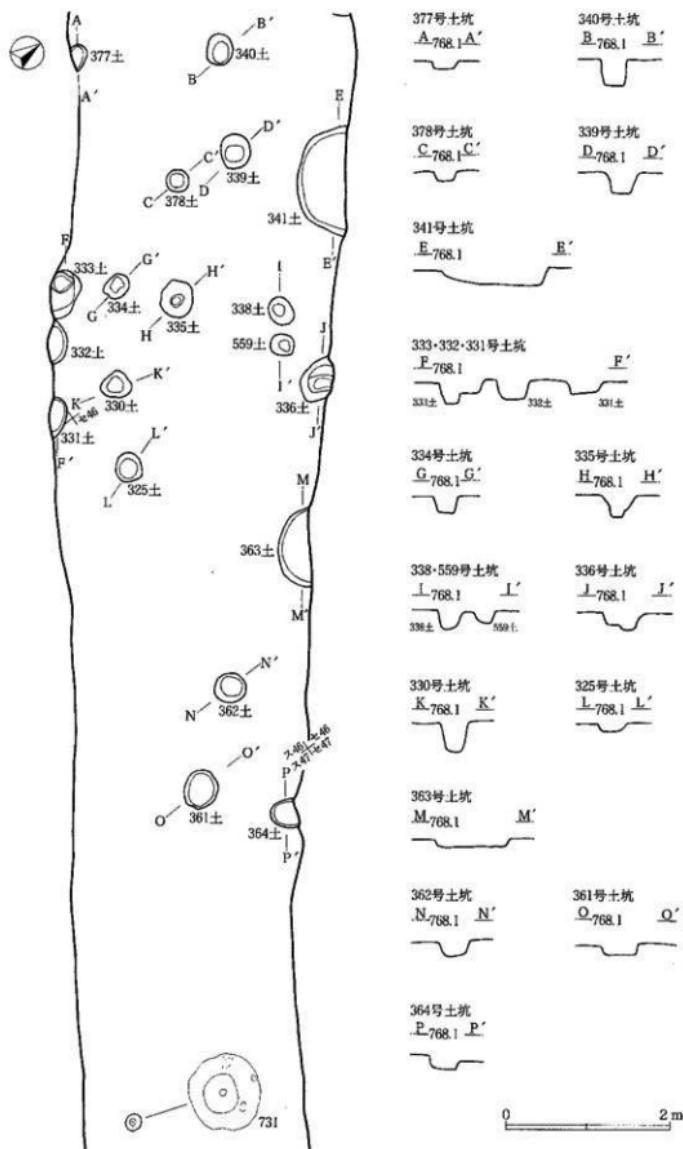
第38図 4区遺構配置図(2)(9号溝址ほか)(1/60)



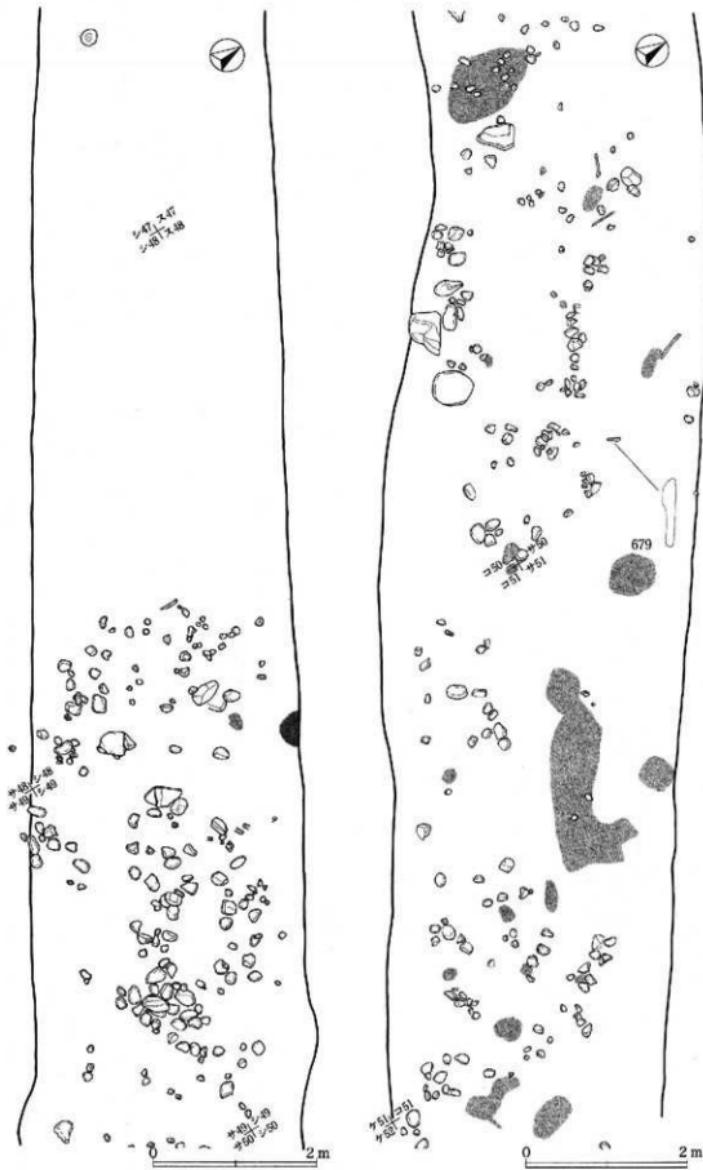
第39図 4区遺構配置図(3)(1/60)



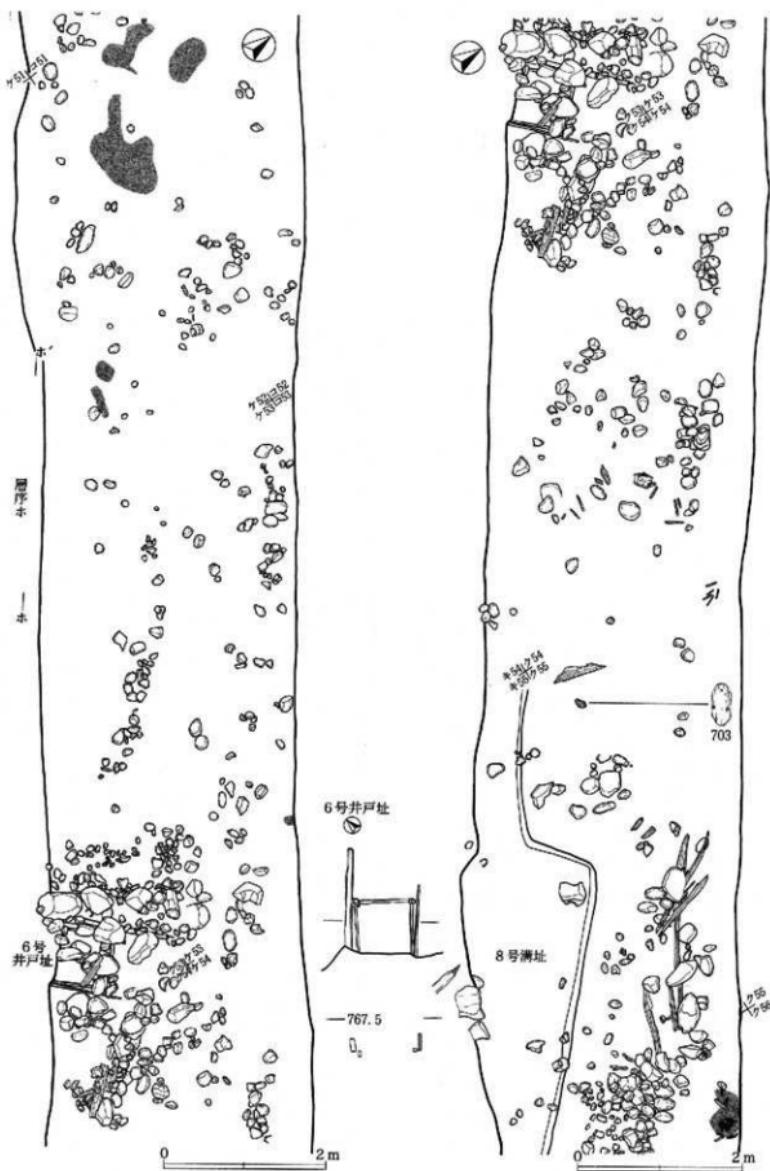
第40図 4区遺構配置図 (4) (1/60)



第41図 4区遺構配図(5)(1/60)



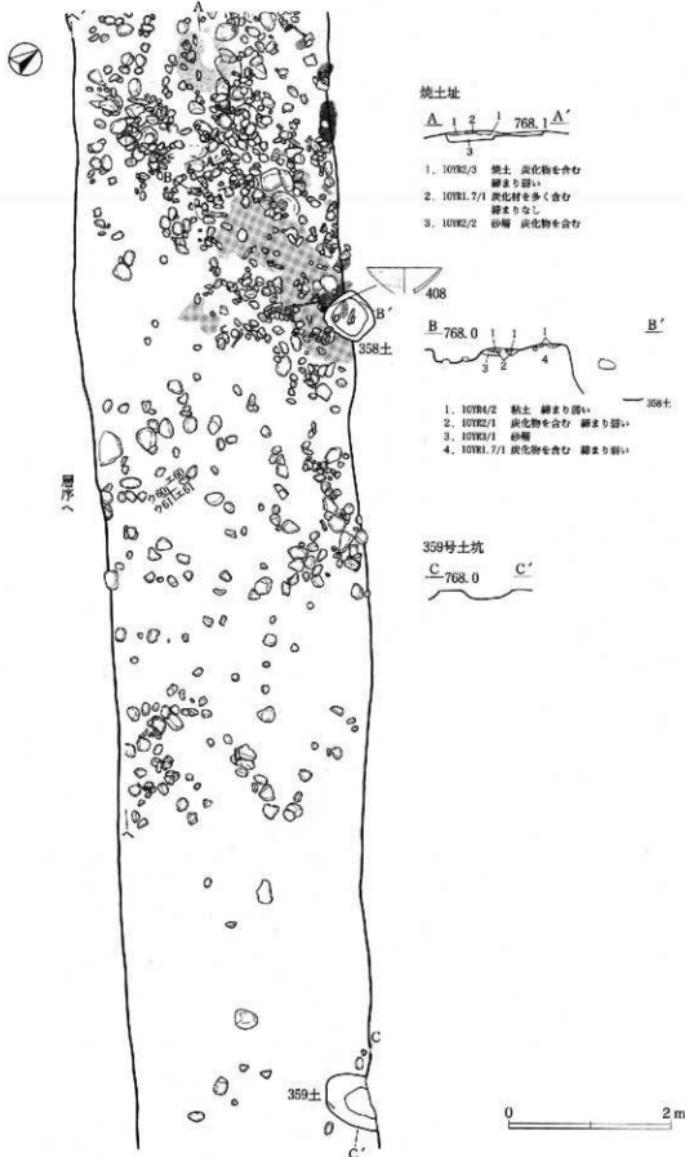
第42図 4区遺構配置図(6) (1/60)



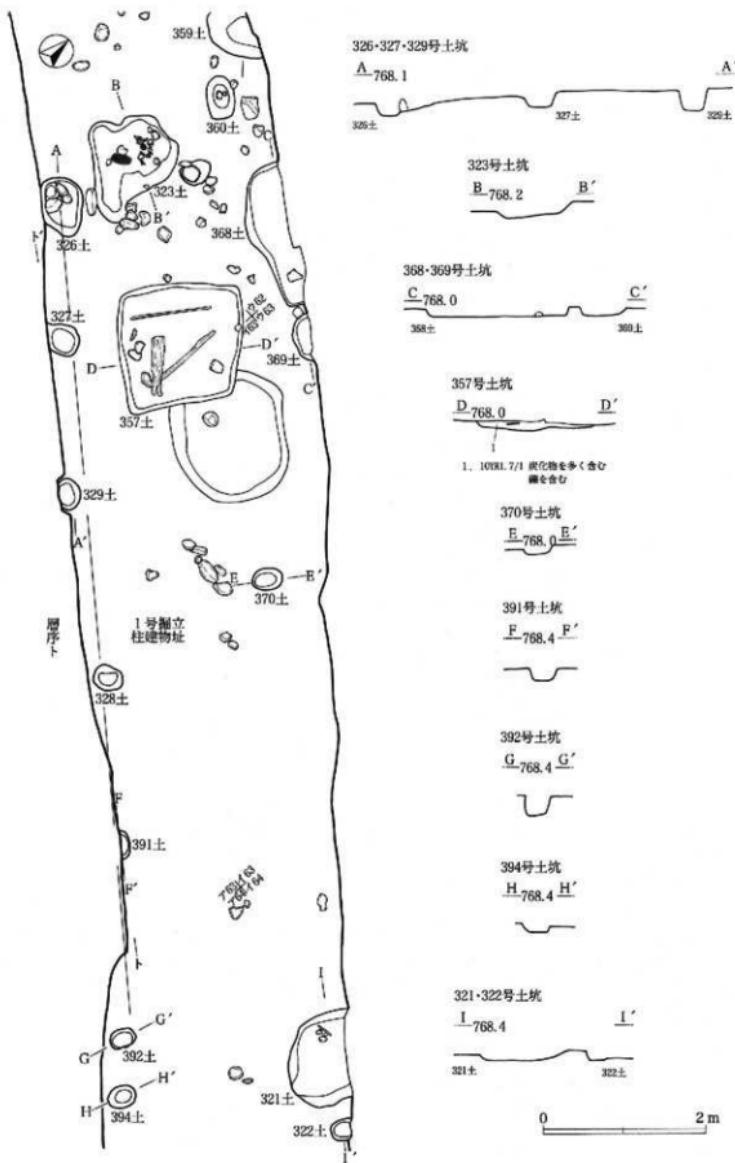
第43図 4区遺構配置図(7)(6号井戸址ほか)(1/60)



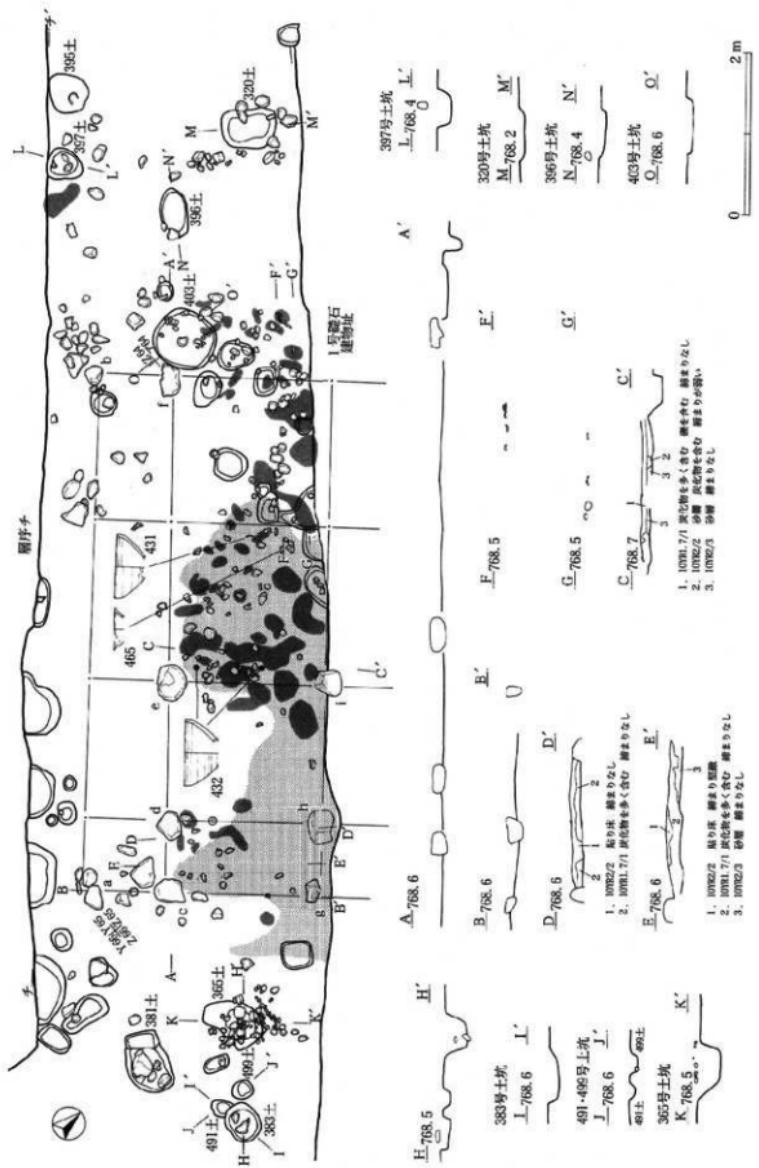
第44図 4区造構配図(8) (1/60)



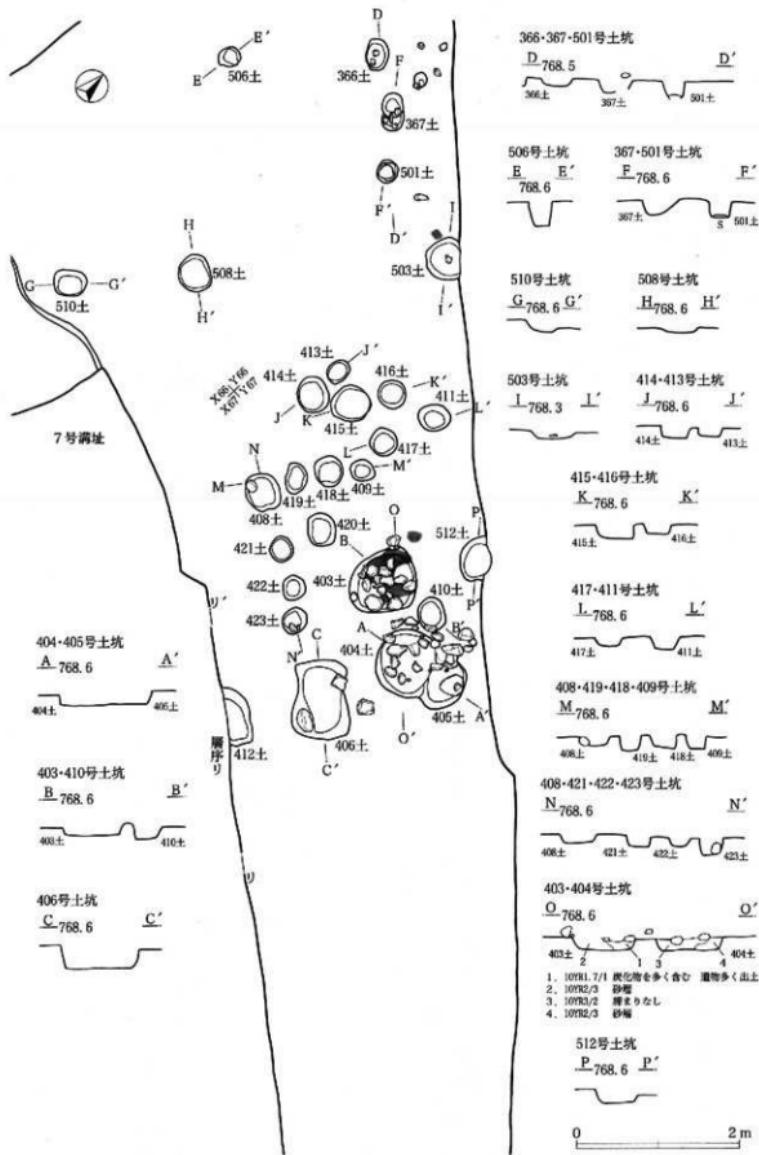
第45図 4区遺構配置図(9) (1/60)



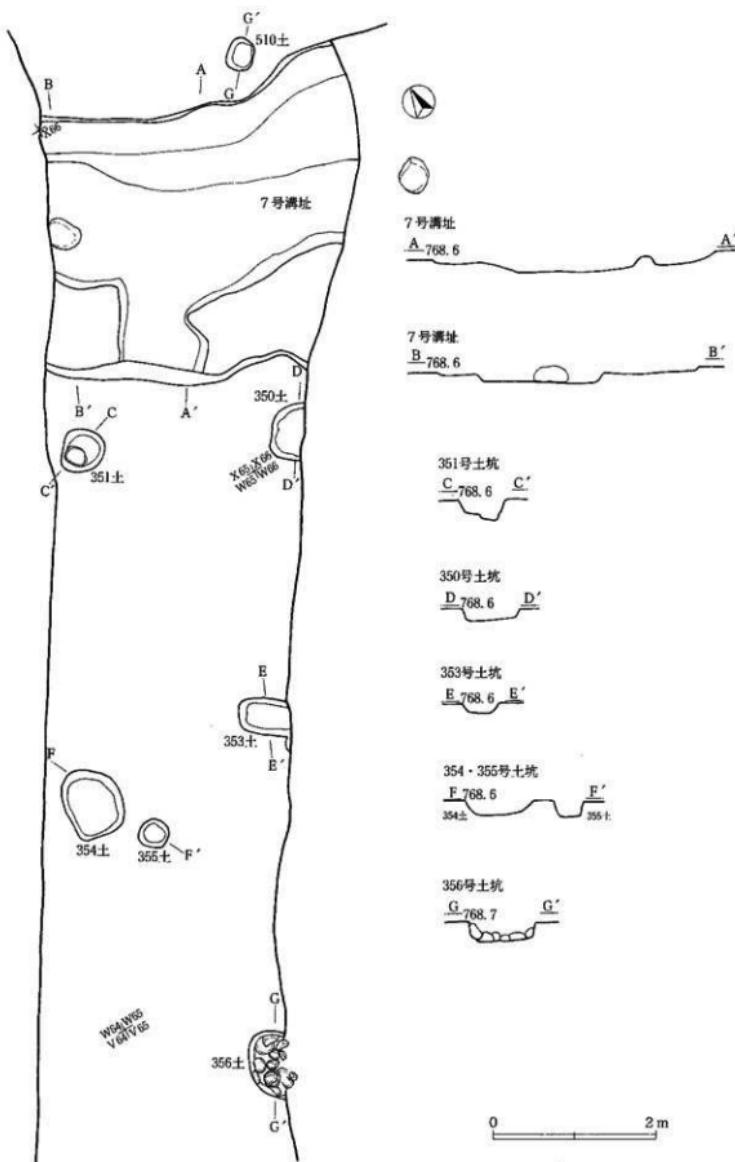
第46図 4区遺構配置図 (10) (1/60)



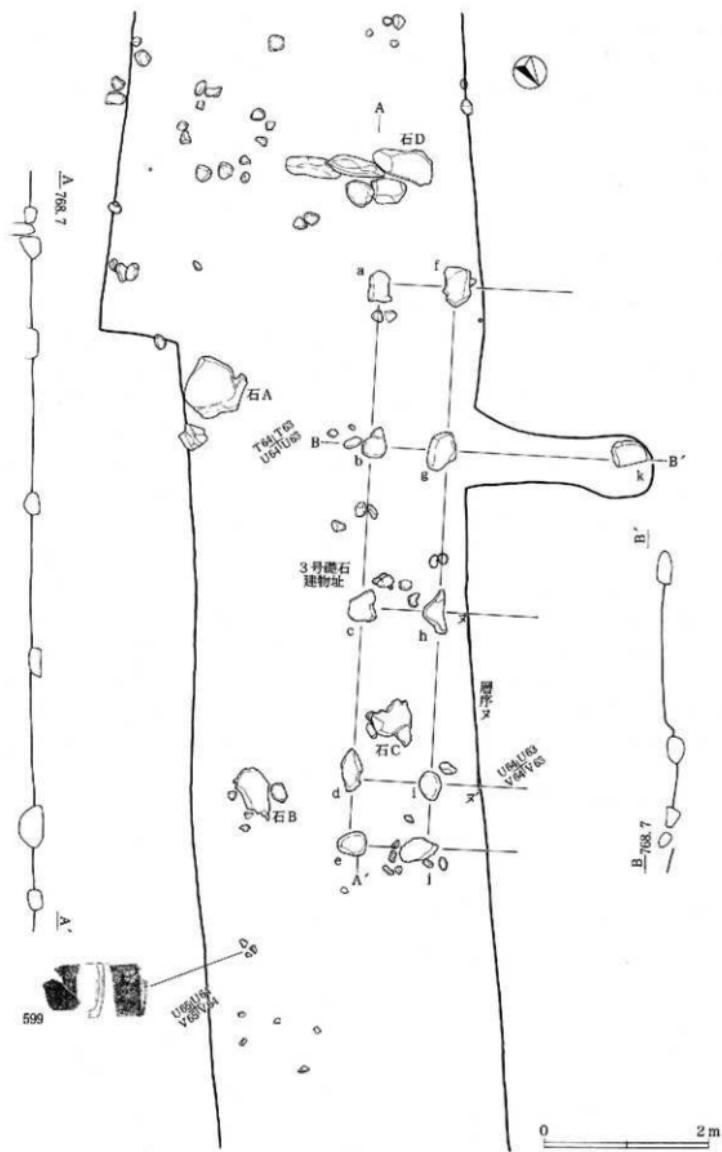
第47図 4区遺構記圖(II) (1号墳石棺部ほか) (1/60)



第48図 4区造構配置図 (12) (1/60)



第49図 4区遺構配置図 (13) (7号溝址ほか) (1/60)



第50図 4区遺構配図 (14) (3号礫石建物址) (1/60)

3号礎石建物址（第50図・図版22-4～8） グリッドT63・U63・64・V64に位置する。遺構の軸線方向はN-51°-Wであり、1号礎石建物址とはほぼ同じ軸線方向である。1号礎石建物址同様、遺構のほとんどは調査区外であるため規模は不明であるが、半間×3間半の南東側縁側の礎石はすべて検出された。縁側は南東側と北東側で確認できているが、南西側では確認できなかった。一部トレンチ状に確認を行い、北西側に建物址の本体が伸びていることが判明した。建物址本体の礎石の間隔は、北西-南東方向がg-k間で220cm、北東-南西方向がf-g・g-h間が200cm、h-iが210cmである。縁側部分は、a-f間94cm、i-j間80cmである。礎石の大きさは、aは38×28cm、bは36×30cm、cは40×36cm、dは54×26cm、eは34×30cm、fは49×33cm、gは48×34cm、hは55×28cm、iは36×26cm、jは46×32cm、kは43×30cmである。

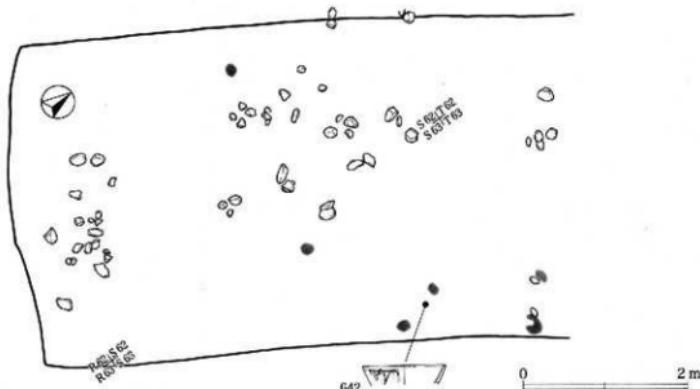
グリッドT63・64・U63・64一帯は堅緻な面で、カワラケや瓦器、炭化物が突き込まれていた。

建物址南東側に青緑色の石があり、南東側の石Aは完全な形で残っていたが（図版22-6・7）、北東側の石Bは半分に割れて、その片方が礎石建物址内部に移動していた（石C）。石Aは77cm大で厚みが40cmで、上面が平面に加工されていた。おそらく石Bもほぼ同じ大きさで、上面が平面であったと考えられる。上面が平面であるところから、何かの土台であった可能性が考えられる。また、建物址の南西側には石Dをはじめとして70-80cm大の細長い礎石が組まれていた（図版22-8）。軒落しの遺構の可能性が考えられる。

出土遺物は、手捏ねカワラケ1・ロクロカワラケ1,048（265-276）・瀬戸美濃系平碗4（406）・天目茶碗1・鉢皿1・縁釉小皿1・盤類1・折縁深皿1・片口鉢1（554）・中国龍泉窯青磁碗1（642）・白磁四耳壺1・常滑窯窓1・瓦器鉢1・火鉢11（599）・硯破片1・砥石2・火打石1である。火鉢の中には窓がついているものも確認された。遺物の時期は古瀬戸中I～IV期・後I～III期であり、1号礎石建物址と同時期であると考えると15世紀前半以降の遺構と考えられる。

（2）掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（第46図） グリッドア63・64・イ62・63に位置する。326・327・329・328・391・392号土坑が一列に並ぶため、掘立柱建物址であると考えられる。遺構の大部分は調査区外になっている。建物址の規模はわかっている部分で5間である。軸線方向はN-52°-Wである。柱の間隔は、326-327号土坑が180cm、327-329号土坑が190cm、329-328号土坑が230cm、328-391号土坑が210cm、391-392号土坑は230cm



第51図 4区遺構配置図(15)(1/60)

でまちまちである。土坑の大きさは326号土坑が 72×50 cm・深さ18cm、327号土坑が 44×36 cm・深さ18cm、329号土坑が 38×25 cm・深さ27cm、328号土坑が 35×30 cm、391号土坑が 34×30 cm・深さ15cm、392号土坑が 30×20 cm・深さ25cmである。326号土坑は内部に21cm大の柱穴があり、周囲を20cm大の石が廻っていた。柱を固定するために置かれた石であると考えられる。

(3) 溝址

7号溝址（第49図・図版22-3） グリッドX65・66・Y66に位置する。溝の北西-南東方向は調査区外であるためわからないが、幅は上端348cm・130cm・深さ18cm、軸線方向N-58°-Wである。溝の内部には段があり、中段と下端は不整形な部分がある。また、内部から50cm大の礫が出土している。手捏ねカワラケ2・ロクロカワラケ117（277・278）・瀬戸美濃系陶器は碗型鉢1・時期器種不明1・龍泉窯青磁碗2・瓦器火鉢4・器種不明4・火打ち石1が出土している。カワラケ片は一帯に突き込まれて出土している。遺構の時期は、古瀬戸後Ⅲ期の遺物が出土地していいるため、15世紀前半以降であろう。

8号溝址（第43・44図・図版18-2-8） グリッドカ55・56・キ55・56に位置する。掘り込みが浅くかなり不明瞭な溝址である。この溝址は軸線方向がN-57°-Wと他の溝址と異なっている。この周辺から多くの礫や木が出土している。遺物については周辺からも8号溝址内からとあまり変わらない種類の遺物が出土しているため、木浦まりの項で述べる。

9号溝址（第38図・図版16-3-6） グリッドナ34・ニ33・34・35・ヌ33・34に位置する。南東側で415・426・427・495号土坑と重複している。遺構の北東-南西方向は遺構外のためわからないが、幅は上端1,050cm・957cmである。軸線方向はN-35°-Eである。溝の中には約1mの幅で帯状の集石がある。集石は5~50cm大の礫で構成されている。この集石の他に、東側にもう一つ集石がある。溝に伴う遺構であると考えられる。出土遺物は手捏ねカワラケ25・ロクロカワラケ40・瀬戸美濃系盤類1・片口鉢2（555）・天目茶碗1（433）・梅瓶か瓶子1片・東濃系山茶碗1・大海茶入1（505）・常滑窑壺1・土器擂鉢1（607）・壺2（626）・漆器楕1（655）・軽石製の搗き石1（730）・火打石1が出土している。時期は古瀬戸前Ⅲ・IV期・後I・II期・III期であるところから、15世紀前後であろう。

10号溝址（第37図・図版16-2） グリッドフ26・27・ヘ27に位置する。ほとんど調査区外に出ているため、遺構の規模は不明である。幅は上端140cm・下端118cm・深さ21cmの小規模な溝である。溝中から5~20cm大の礫や木が出土した。軸線方向はN-55°-Eである。

(4) 井戸址

6号井戸址（第43図・図版17-6・7） グリッドク53に位置する。井戸址の上部には40~60cm大の大きな礫に覆われていて、遺構廃棄後に流されてきたものだろうか。井戸の構造は一部しか確認できなかったが、おそらく4本支柱を立てて、支柱のはぞ穴に横木を渡し、板を横木と外側に配置した礫で固定している井戸址である。柱の大きさは一部が調査区外に出ているため不明だが、70cm四方の方形の井戸枠であると考えられる。しかし、北西側の枠が130cm以上、南東側の枠が93cm以上と長くなっている。枠の横板の中には四角い穴と把手の様な穴が開いているものがある。井戸址の深さは25cmと浅く、底部には40cm程の礫があり、その他は砂地であった。

8号井戸址（第39図） グリッドト36に位置する。遺構の半分は遺構外に出ているので規模は不明だが、判明している部分では上端225cm・下端144cm・深さ30cmである。内部から長さ2mほどの木の板が出土している。遺物は出土していない。

(5) 集石

19号集石（第44図） グリッドオ58・59に位置し、集石の範囲は105×48cmで、12~25cmの石で構成されている。

（6）土坑

4区からは土坑が151基が検出された。このうちI群1類が6基、2類4基・3類4基・II群16基・III群12基・IV群110基である。

I群1類はX・Y67~ア64にかけて見られ、内部に石を伴うものが多い。320号土坑（第47図）はI群2類の406号土坑（第48図・図版2~5）に形状が近い。内部や周辺から石が出土している。ここからは古瀬戸後I期の灰釉折縁鉢などが出土している。358号土坑（第45図）は、粘土の貼り床を切って構築され、石や木片を検出している。また、ロクロカワラケ302片などが出土している。

I群2類は少なく、W・X66・67の350号土坑（第49図）と406号土坑（第48図・図版21~5）のみである。406号土坑は撥形であり、20cm大と30cm大の礫が入っている。

I群3類はイ・ウ62・63とソ45・タ43にある。357号土坑（第46図・図版20~2）は上端155×144cm・下端144×132cm・深さ12cmの小規模な方形竖穴である。遺構内部からは長さ70cmや100cmの板や棒、17cm大の礫が出土している。また、ロクロカワラケが27点出土している。368号土坑（第46図）はほとんどが排水溝にかかっているので規模はわからないが、357号土坑と同規模の土坑と考えられる。516号土坑（第40図）も排水溝にかかり規模は不明だが、前2基と同程度の大きさの遺構であると考えられる。349土にかかって15cm~35cmほどの礫を伴っている。

II群は調査区内で土坑が集中する場所から検出される。403号土坑（第48図・図版21~6~7）は10~25cm大の礫が充填され、ロクロカワラケ片が60片出土した。これは404・405号土坑（第48図・図版22~1~2）も同様であり、404・405号土坑には5cmから30cm大の礫が入れられている。405号土坑のものは平石であるため、礎石の可能性がある。遺物は118片のロクロカワラケの破片が出土した。430号土坑（第44図・図版19~2）は石とともに196片のロクロカワラケ片が出土した。428号土坑（第38図・図版16~7）の断面図は袋状である。中から5~25cmの石と手捏ねカワラケ片が出土している。

III群には礫を伴う土坑が多い。381号土坑（第47図・図版21~3）は5~35cm大の礫が入れられている。礫が入っている部分は土坑が深くなってしまい、北西側は浅い掘り込みとなっている。出土遺物にはロクロカワラケ1・手捏ねカワラケ3・瓦器香炉1がある。近くに365号土坑（第47図）があり、2~20cm大の比較的小さい石が大量に入れられていた。ロクロカワラケ28・古瀬戸後期平碗1・土器香炉が出土している。323号土坑（第46図）からは10cm大の礫のほか、ロクロカワラケ109・古瀬戸中期灰釉小瓶1・後IかII期の灰釉盤類1・後III期直縁大皿1・砥石1が出土している。429号土坑（第44図・図版18~7）は5~20cm大の礫の他、50cm大の木片が出土している。この木片の中に3片の卒塔婆が含まれていた（687~689）。374号土坑（第40図）は遺構確認面の高さで36×45cmの範囲で焼土が検出された。ロクロカワラケ40のほか、青磁獸脚香炉1・古瀬戸後III期灰釉単皿2・後期灰釉平碗1・中津川窯1・砥石1が出土している。

IV群はX67~ウ62、ス46~ト36、ヘ26、に集中している。土坑の平面形の形態には円形・梢円形・方形・長方形がある。数は少ないが、柱を固定したと考えられる石を伴う土坑が見られる。IV群の土坑の中には1号掘立柱建物址の柱穴があり、つながらなかった柱穴でも掘立柱建物址の柱穴がある可能性がある。ヘ26は非常に小さい柱穴列が2列に並ぶが、一部描写しない柱穴があるので掘立柱建物址の柱穴かは不明である。ス47~ト36は1区ツ40付近の柱穴と関連があり、この辺りに掘立柱建物址があったと考えられる。Y66~ア64にかけて、1号礎石建物址内かその周辺に集中しているため礎石建物址に関連する土坑であろうか。X・Y

67には柱穴が密集しており、方形に配置されているように見えるため構造物に伴うものであろうか。

(7) 焼土址

グリッドエ60から検出された（第44・45図・図版19-5・6）。直径75cmの焼土址で馬蹄形である。焼土の厚みは5cmで少し厚い。焼土の周辺は白味を帯びた粘土で貼り床がなされており、その下部から大量の縛群が検出されているところから、縛群より新しい時期の遺構と考えられる。遺物は、ロクロカワラケ19(280)が出土している。周辺の出土遺物から古瀬戸後Ⅲ期頃の遺構か。

(8) 貼り床状遺構

グリッドキ56（第44図）とオ58・59（第44図）、エ60（第44・45図）の焼土址周辺の3ヶ所に見られる。キ56の貼り床状遺構は約4mの範囲で確認され、途中で排水溝となっているのではほんの一部しか遺構がわからないが、かなり広い範囲で貼り床がされていたことがわかる。これらの貼り床は白黄色の粘土を5cmほど厚さで貼った遺構である。オ58・59は54×162cm以上の細長い貼り床状遺構である。このような遺構は7区でも検出され、遺跡内には所々このような遺構が構築されていたことが考えられる。

(9) 木溜まり

木が多く出土する場所を便宜的に木溜まりとした。グリッドカ57～サ50の範囲からは特に集中的に出土している（第43・44図・図版18-1～6）。この中で特に集中している場所をスクリーントーンで示した。また、石も多く検出するため、流されてきた木や石である事が考えられる。

遺物も多く出土し、手捏ねカワラケ128（317・318）・ロクロカワラケ123（279・319・320）・瀬戸美濃系平碗10（407・409・411）・天目茶碗7（439）・小天目茶碗1（434）・端反碗1・卸皿1・底卸目皿1（482）・折縁小皿1・折縁中皿2（468・469）・折縁深皿2・縁軸小皿2（475）・盤類2・洗1・直縁大皿1・卸目付深皿1・深鉢1・柄付片口3（492）・鉢1・碗型鉢1・瓶1・瓶子2・仏花瓶1（511）・壺か瓶1・器種不明2・山茶碗1・東海系鉢1・常滑窯變14（579）・東濃系壺4（577）・瓦器火鉢2・珠洲窯擂鉢1（565）・瓦器擂鉢1（587）・内耳土器6（621）・青磁碗3・杯1・皿1（641）・漆椀2（654）・曲物の底部3（668～670）・タガ3（675～677）・箸447（660・661）・しゃもじ状木製品1（666）・人形1（680）・木製卒塔婆11（683～686・690～692・694～697）・呪符（698）・木札（699）・漆塗りの柄1（700）・下駄3（703～705）・不明木製品（713・714・716）・胡桃の殻5・俵の実1がある。出土遺物の時期は古瀬戸中II・後I II・III・後IV古・後IV新期であるため、14世紀後半から15世紀後半に流されてきたものが堆積したものであろう。

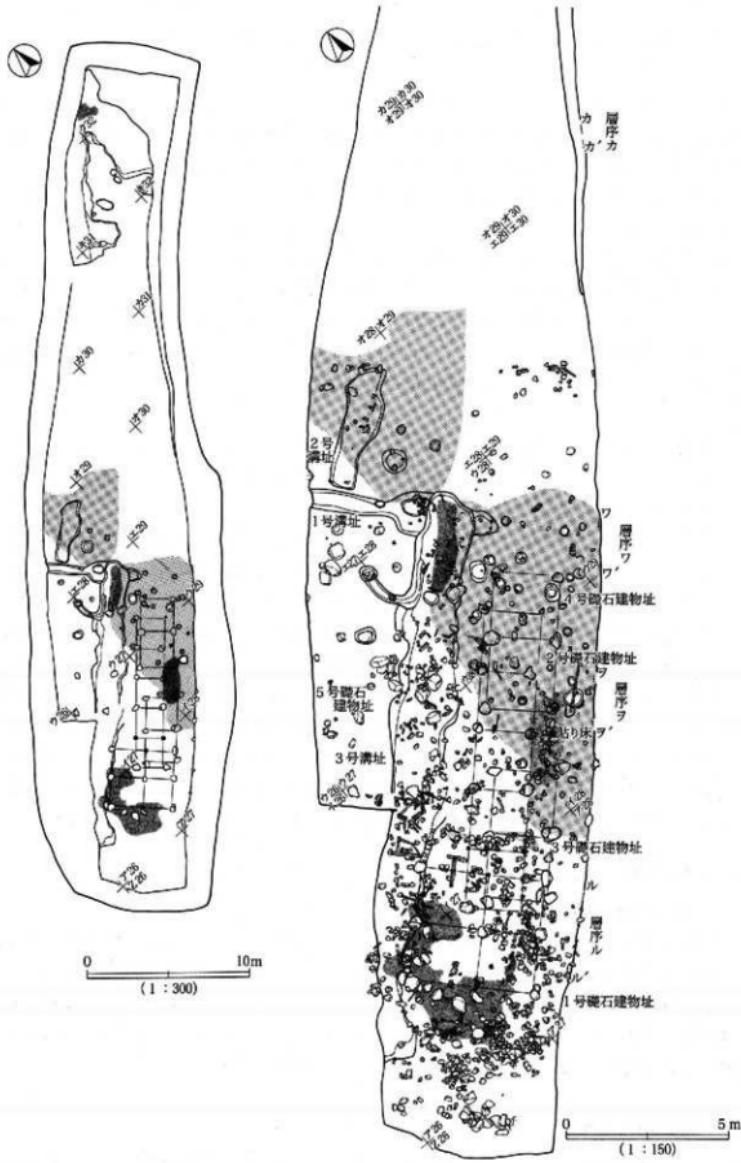
第5節 5区の遺構

1. 5区の層序（第53図）

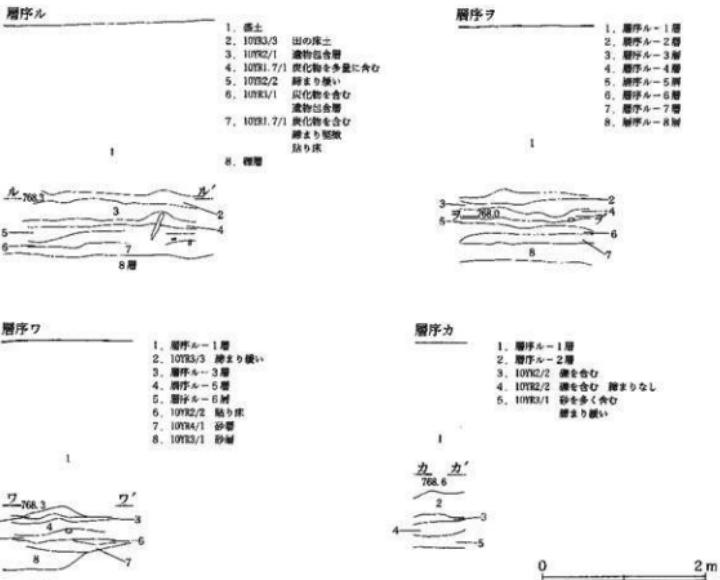
5区も埋土が深く、近代以降約2mの埋土がなされていた。層序を見ると、中世の遺物包含層が3層以下であるため、近世から近代の表土は2層のみとあまり堆積はしなかったようである。中世の層では、3から7層と5層あり、生活面がいくつかあることが判明した。8層以下は砂層となっており、この層以下には遺構が確認できなかった。4層から6層にかけて杭が打たれており、5層から6層の生活面の時に打ち込まれた杭である事が考えられる。

2. 発掘された遺構

5区からは礎石建物址5・方形竪穴1・溝址4・土坑40基・焼土址2・貼り床が検出されている。4軒の礎石建物址と3号溝址が重複しており、この周辺からは様々な種類の陶磁器などの遺物が出土している。測



第52図 5区全体図



第53図 5区の層序 (1/60)

査区全体に炭化物が散布しているところから、火災などがあったと思われる。

(1) 碓石建物址

1号礎石建物址（第56・57図・図版24-1・25-2～7・26-1・2）グリッドア26・27・イ26・27に位置する。本遺構の下層は造成が行われ土が盛られており、その下層から2号礎石建物址と3号溝址、木溜まりが検出された。本遺構は2号礎石建物址と3・4号礎石建物址、3号溝址より新しい遺構と考えられる。

礎石は8基が確認されている。ニが移動していると考えられ、チーハ間の礎石は検出できなかった。調査区が狭いため、遺構が北西-東南方向へ伸びる可能性がある。軸線方向はN-44°-Wである。検出できた規模は2間×2間で、礎石の間隔は推定であるが、イ-ロ間180cm・ロ-ハ間171cm・イ-ニ間213cm・ニ-ヘ間が177cmで、イ-ニ間が広くなっている。礎石の大きさは、イが50×41cm・ロ43×36cm・ハ41×34cm・ニ49×22cm・ホ36cm×28cm・ヘ33×30cm・ト41×35cm・チ52×33cmで、ロ以外の礎石は上面が平坦になっている。付近にあるリ・ア・サは上面が平坦な石であるため、礎石として使用されていた事がわかる。本遺構を造るにあたって、地面を造成したと考えられ、造成した土には大量の炭が含まれていた。周辺からは板や木が多く検出されている。礎石付近からは80cm大の板材などが出土し、付近から鉄の細い棒が中に差し込まれている漆塗りの棒状製品（701と類似の遺物）などが出土している。礎石イ・サから南側に木が集中して出土し、礎石の下部から出土している。木溜まりの上部に土を盛って礎石建物址を築造していたと考えられる。

出土した遺物は、手捏ねカワラケ40（326）・ロクロカワラケ627（327～337・387～391・393）・高台付カワラケ（394）・瀬戸美濃系平碗7（412・413）・天目茶碗15（444・445・446・452）・灰釉小皿（463）・折縁小

皿1・折縁中皿1・縁軸小皿(478)・御皿(487)・折縁深皿2・鉢口付大皿(486)・柄付片口4(493)・碗型鉢2・楕体型小鉢1・壺3・仏花瓶1(509)・大型腰持香炉1・持腰香炉3・燭台(534)・片口鉢11(557)・器種不明3・東濃系山茶碗12(539)・壺15・常滑窯壺24・須恵器鉢2・瓦器壺2(594)・香炉か風炉1・鉢1・火鉢1・火鉢か風炉1・器種不明8・内耳鍋35(624)・深鉢1・中国龍泉窯青磁碗4(643)・同安窯青皿1・天目茶碗3(448・449・453)・褐釉天目茶碗1・不明1・木製箸500(663・664)・下駄1(708)・矢柄と思われる鉄棒が入った漆塗りの木製品(図版26-1)・器種不明1(718)・石臼1(737)・石鉢(735)・蠍石製の石鉢・搗き石2(732・733)・砥石2・火打石7・硯2・軽石製の紡錘車1(724)・滑石製の風炉1・錢(800~805)がある。遺物の時期は古瀬戸中I~III期・後I~III期、山茶碗は大畠大洞新・大洞東・脇之島が礎石建物址の下の造成面であるので、15世紀前半以降の遺構であろう。

2号礎石建物址(第55・56・59図・図版26-3~7) グリッドA27・イ27・28・ウ28に位置する。1・5号礎石建物址より出土層が下の遺構である。礎石はカ・ヨ・タ・レ・ソ・ツ・ネ・ナ・ラ・ムの10基を確認しているが、カーヨ・ツー・ネ間の礎石を確認する事ができなかった。この建物址は1間×5間であるが、南東側が調査区外へ出ており、北西側は3号溝址となっているため、調査区外へ伸びていると考えられる。軸線方向はN-45°-Eである。礎石の間隔は、ソーム間は175cm、ヨータ間180cm・ターレ間186cm・レソ間183cmである。礎石の大きさはカ46×34cm・ヨ46×28cm・タ32×28cm・レ37×29cm・ソ33×26cm・ツ48×41cm・ネ39×36cm・ナ36×27cm・ラ38×30cm・ム16×14cmで、だいたい同じ大きさの礎石であるが、ムだけはかなり小さい。礎石のほとんどは上面が平面な平石である。この平石上に板を載せている礎石がある。ヨ・レ・ソの上に板が載せてあるが、ヨ(図版26-6)・ゾが1枚なのに対し、レは4枚の板が載せられていた(図版26-7)。これは、礎石を置く位置がもともと低かったのか、礎石が沈んだためなのかはわからないが、柱の高さを調整するために置かれた板であろう。レの4枚の板はほぼ正方形に加工されていた。

出土遺物は2・3・4号礎石建物址が重複していたり近接しているため、本遺構に付随すると思われる遺物を明確にはできなかった。3軒の礎石建物址の遺物についてここで述べ、重複関係から時期を考えたい。

出土した遺物は手捏ねカララケ54(338~341・356・357)・ロクロカララケ290(342~352・366~369)・瀬戸美濃系平碗16(414・415)・天目茶碗8(447・450・451・455・456)・小天目茶碗2(442・443)・小皿1・丸皿1・折縁小皿6(470)・折縁中皿1(472)・鉢皿5・折縁深皿8(497・498)・折縁小皿(471)・鉢口付大皿2・碗型鉢6・片口鉢15(558)・椭鉢型小鉢4(528)・梅瓶1・水注2・仏花瓶2・壺2(531)・四耳壺11(532)・入子2・持腰形香炉1(514)・筒形香炉1(518)・東濃系山茶碗11(540・541)・器種不明3・壺51・常滑窯壺48・須恵器産地不明撃鉢1(562)・珠洲窯撃鉢2(567・568)・壺1・瓦器撃鉢1・火鉢11・瓶1(595)・香炉1(591)・香炉か風炉1・火鉢か風炉6・器種不明12・内耳鍋3・中国青磁窯地不明口刷げ小碗1・杯1(646)・皿1・龍泉窯碗1 5 b 1・II 2・III 1・碗1・器種不明1・白磁碗IX 2・花瓶2・青白磁梅瓶1・景德鎮水注1(649)・茶入3・褐釉茶入1(462)・褐釉壺3・硯1・編み石1・搗き石2(734)・砥石2(741)・火打石2・漆器椀1(658)・下駄1(709)・1号礎石建物址で出土したものと同様の矢柄と思われる漆塗りの木製品1(701)・陽物1(682)・錢(770~799・817・819)が出土している。遺物の時期は古瀬戸前I期~後III期・東濃系山茶碗は大畠大洞~脇之島であるため、13世紀初頭から15世紀中頃まで継続していた遺構群であると思われる。中でも最も新しい1号礎石建物址が15世紀前半以降であり、3号溝址と同じ時期の遺構と考えれば、本遺構は15世紀初頭の建物であるといえる。

3号礎石建物址(第55・56・59図・図版26-3~8) グリッドA27・イ27・28に位置する。3層目に包含される遺構で、1・2号礎石建物址と重複し、最も古い時期の遺構と考えられる。1間×2間の遺構を確認し

たが、北西－南東方向へ伸びる可能性がある。軸線方向はN-45°-Eである。礎石の間隔は、ウ-オ間が192cm、ウ-キ間193cm、キ-ノ間195cmである。礎石の大きさはウ41×30cm・ヰ35×26cm・ノ47×27cm・オ39×29cm・ク52×43cm・ヤ39×32cmである。遺物については2号礎石建物址で述べたが、2号礎石建物址より3号礎石建物址は古いが、明確な時期の確定はできなかった。

4号礎石建物址（第55・59図・図版24-1） グリッドイ27・ウ27に位置する。3層目に包含される遺構で、2号礎石建物址より古い遺構である。1間×2間の遺構を確認したが、北西・南東方向へ伸びる可能性がある。軸線方向はN-43°-Eである。礎石の間隔は、マ-コ間が213cm、マ-ケ間219cm・ケ-フ間195cmである。礎石の大きさは、マ38×36cm・ケ48×44cm・フ38×35cm・コ42×38cm・エ53×35cm・テ36cm×28cmである。フ・コの上には板が載せられており、柱の高さを調節したものか。フには板の他、石も載せられていた。遺物については2号礎石建物址で述べたが、2号礎石建物址より4号礎石建物址より古く、3号礎石建物址と同時代と考えられるが、明確な時期の確定はできなかった。

5号礎石建物址（第55・56・57図・図版26-8） グリッドイ27・28・ウ27に位置する。礎石ワが移動しているが、ヌ・ル・ヲが並ぶので礎石建物址とした。南東側は確認できなかったが、北西側は調査区外になっているため、遺構が伸びている可能性がある。礎石の間隔は、ヌール間225cm・ヌ-ヲ間187cmである。礎石の大きさは、ヌ41×30cm・ル40×31cm・ヲ40×36cm・ワ44×33cmで、ほぼ同じ大きさである。軸線方向はN-42°-Eである。5号礎石建物址は、ほぼ1号礎石建物址の礎石と同じレベルに礎石があることが確認されている。本遺構の周辺からは瀬戸美濃系型鉢1・四耳壺1・器種不明1・東濃系鉢1・常滑窯壺3・瓦器擴鉢1が出土し、遺物の時期は前III・IV期・中期・後III・IV期であるため、遺構の時期は1号礎石建物址同様15世紀前半以降であると思われる。

（2）方形堅穴

方形堅穴（第54図）グリッドカ・キ31に位置する。この遺構は4号溝址と477号土坑と重複しており規模はわからないが、上端短軸177cm・下端短軸132cmである。深さは9cmで非常に浅い。

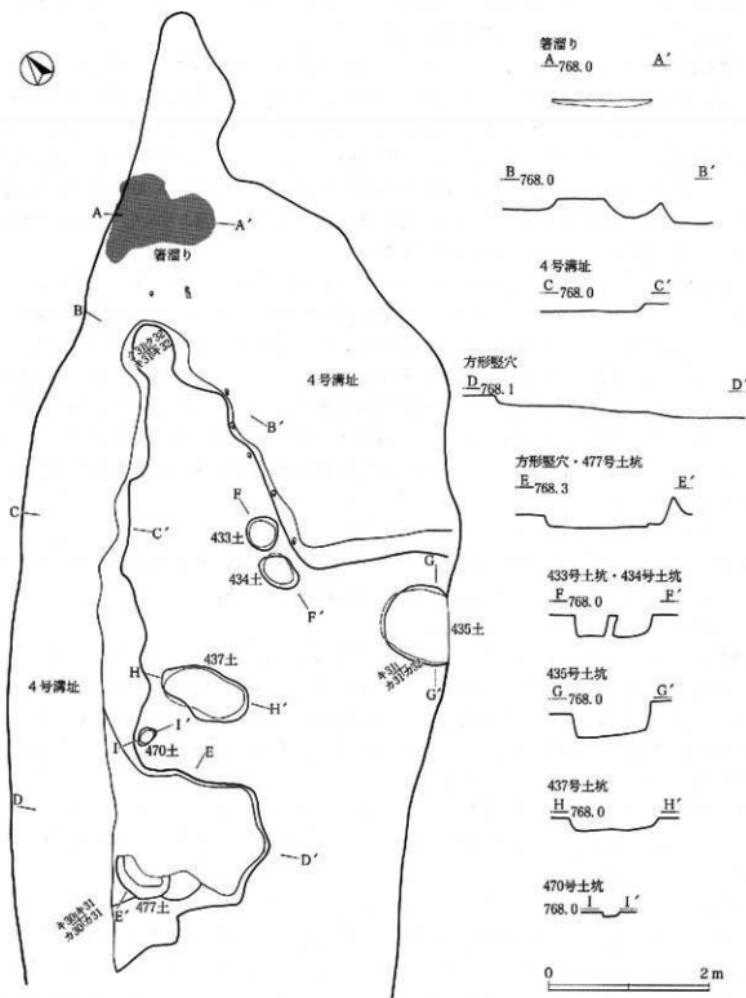
（3）溝址

1号溝址（第55・58図・図版24-2・27-5）グリッドウ28・エ27・28に位置する。3号溝址に切られているため古い遺構と考えられる。また、471-474号土坑と重複している。471号付近には5~20cm大の砾が密集しているため、1号溝址より新しい遺構であろうか。溝の長軸は調査区外に出ているので不明であるが、確認できた範囲でも長軸方向は570cm以上ある。上端短軸は130cm、下端短軸は120cm、深さ14cmである。軸線方向はN-44°-Wで、5区検出の溝址と直交する。

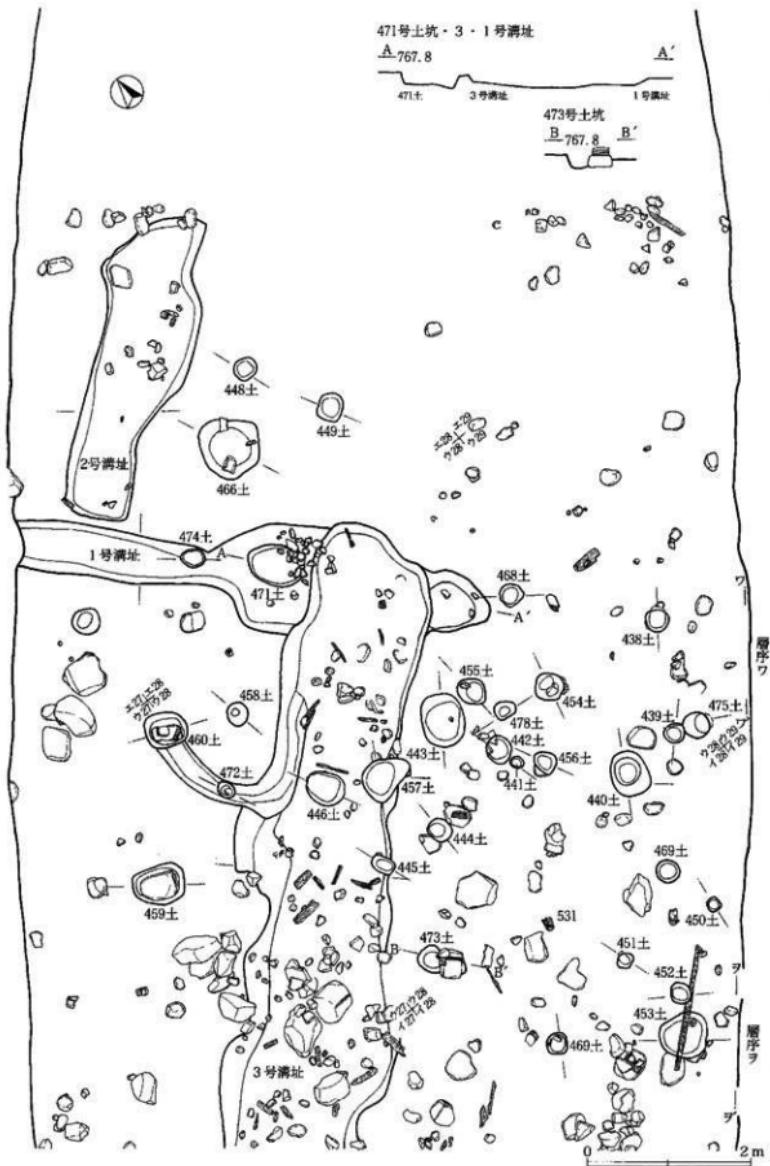
出土遺物は手捏ねカワラケ6・ロクロカワラケ76（370・373~383）・瀬戸美濃系天目茶碗1・折縁中皿1・鉢皿1・片口鉢2（556）・筒形香炉1（516）・常滑窯壺3・東濃系窯1・瓦器擴鉢1・中国龍泉窯青磁草花文碗I 2 a（645）・硯1である。

2号溝址（第55・58図・図版27-6） グリッドエ28に位置する。本遺構は規模が小さく全体が判明している。上端長軸382cm・短軸111cm・下端長軸366cm・短軸100cm・深さ18cmである。軸線方向はN-53°-Eで1号溝址と直交する。出土遺物は手捏ねカワラケ1・ロクロカワラケ1・中国龍泉窯青磁碗I 4 a（644）がある。

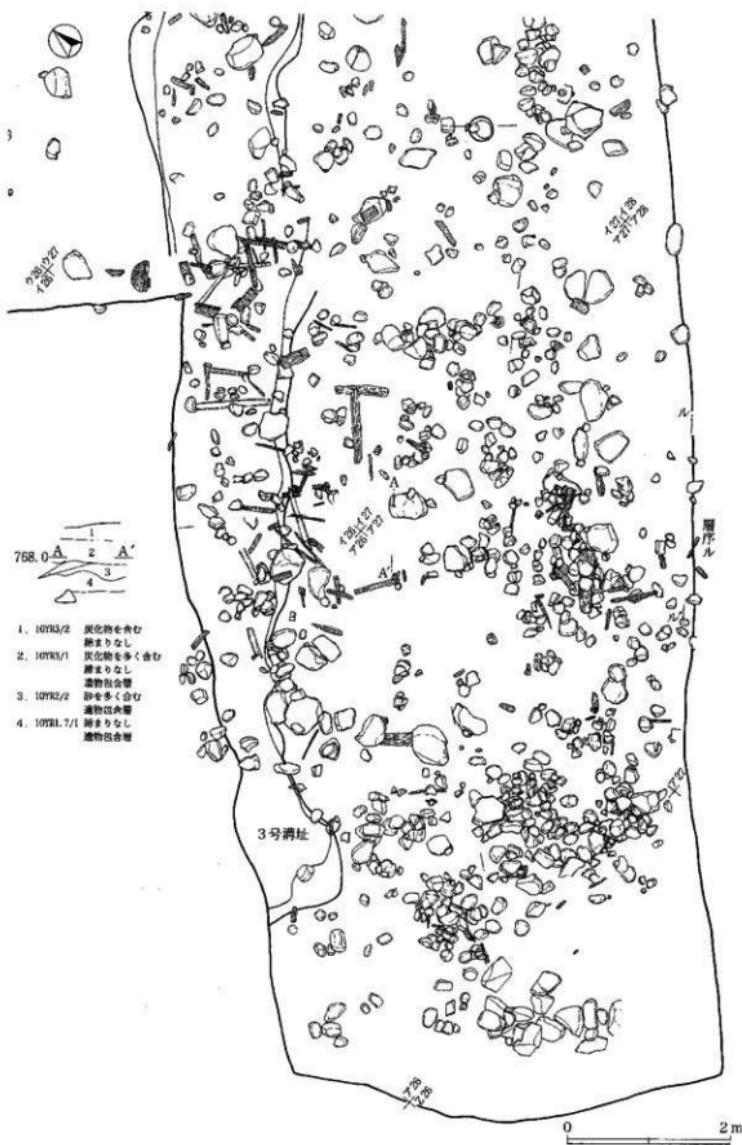
3号溝址（第55・56・58図・図版24-1・28-1~3） グリッドア26・イ26・27・ウ27・エ28に位置する。南西側の一部が調査区外に出ているが、一部プランが見えているため、長さが1,760cmの溝址であることが判明した。1号礎石建物址の造成面や貼り床より下層にある遺構である。1号溝址を切り、445・456号土坑に切られている。上端長軸1,760cm・短軸168cm・下端長軸1,730cm・短軸134cm・深さ37cm・軸線方向N-



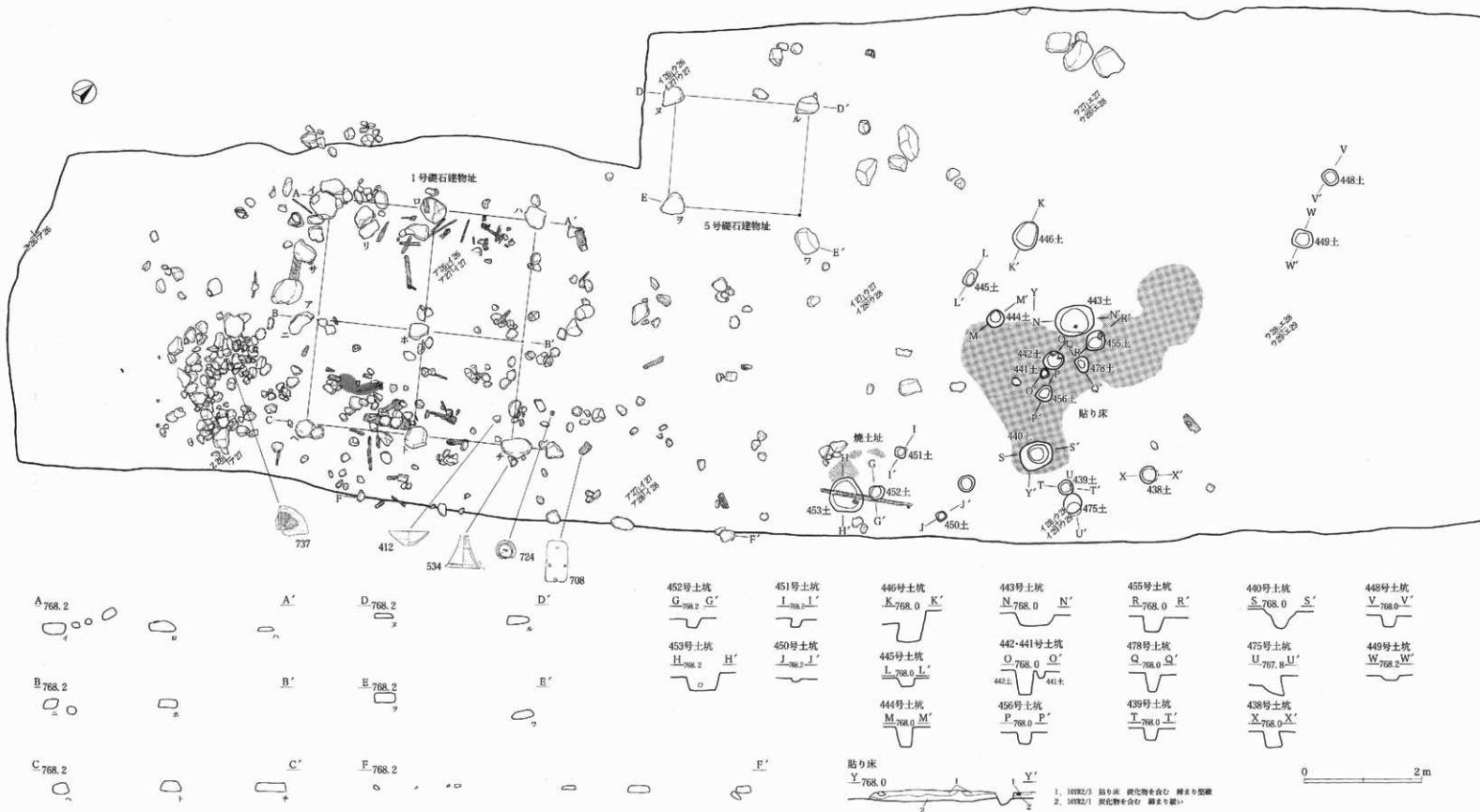
第54図 5区遺構配置図(1) (1/60)



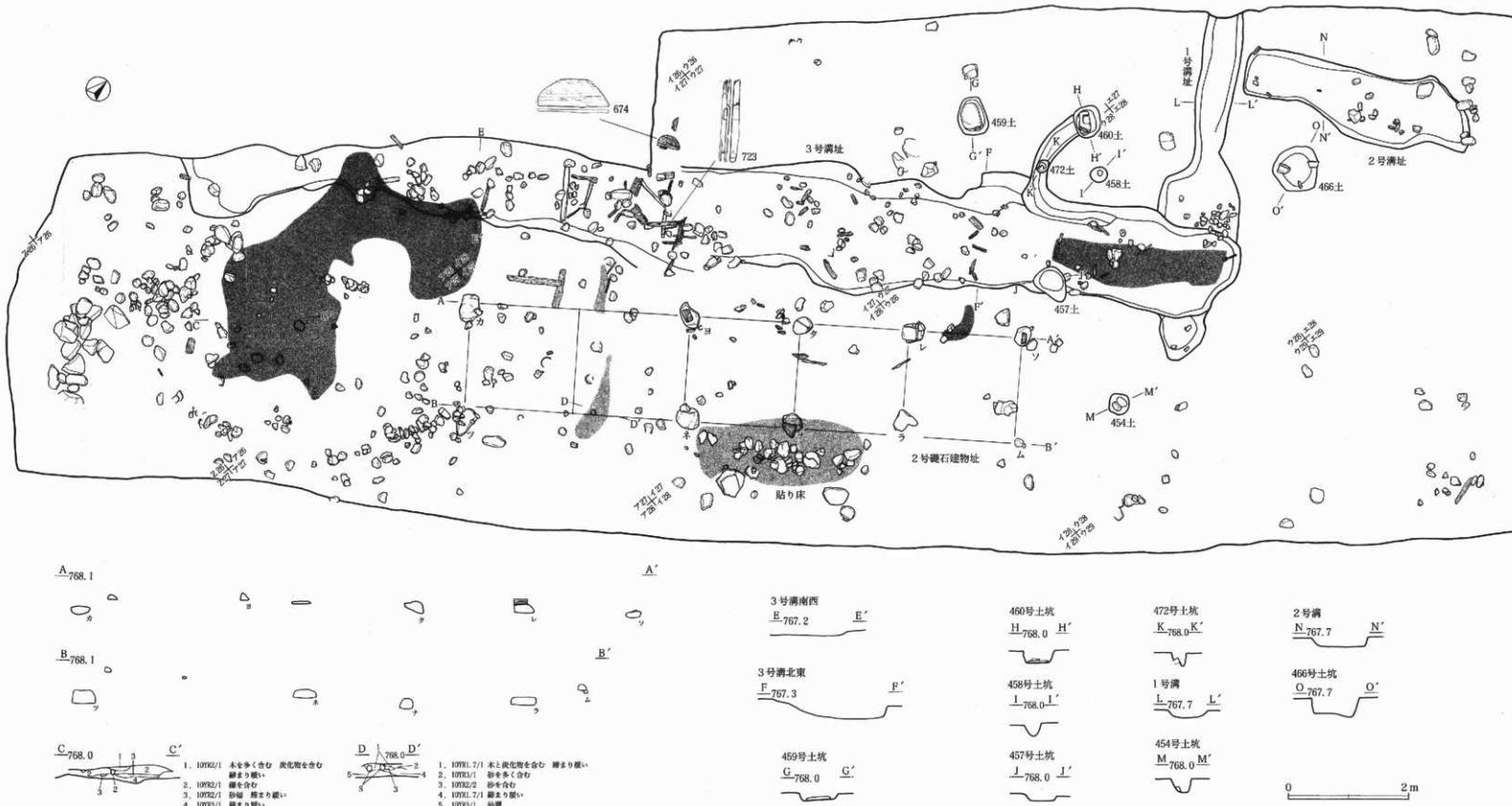
第55図 5区造構配置図(2) (1/60)



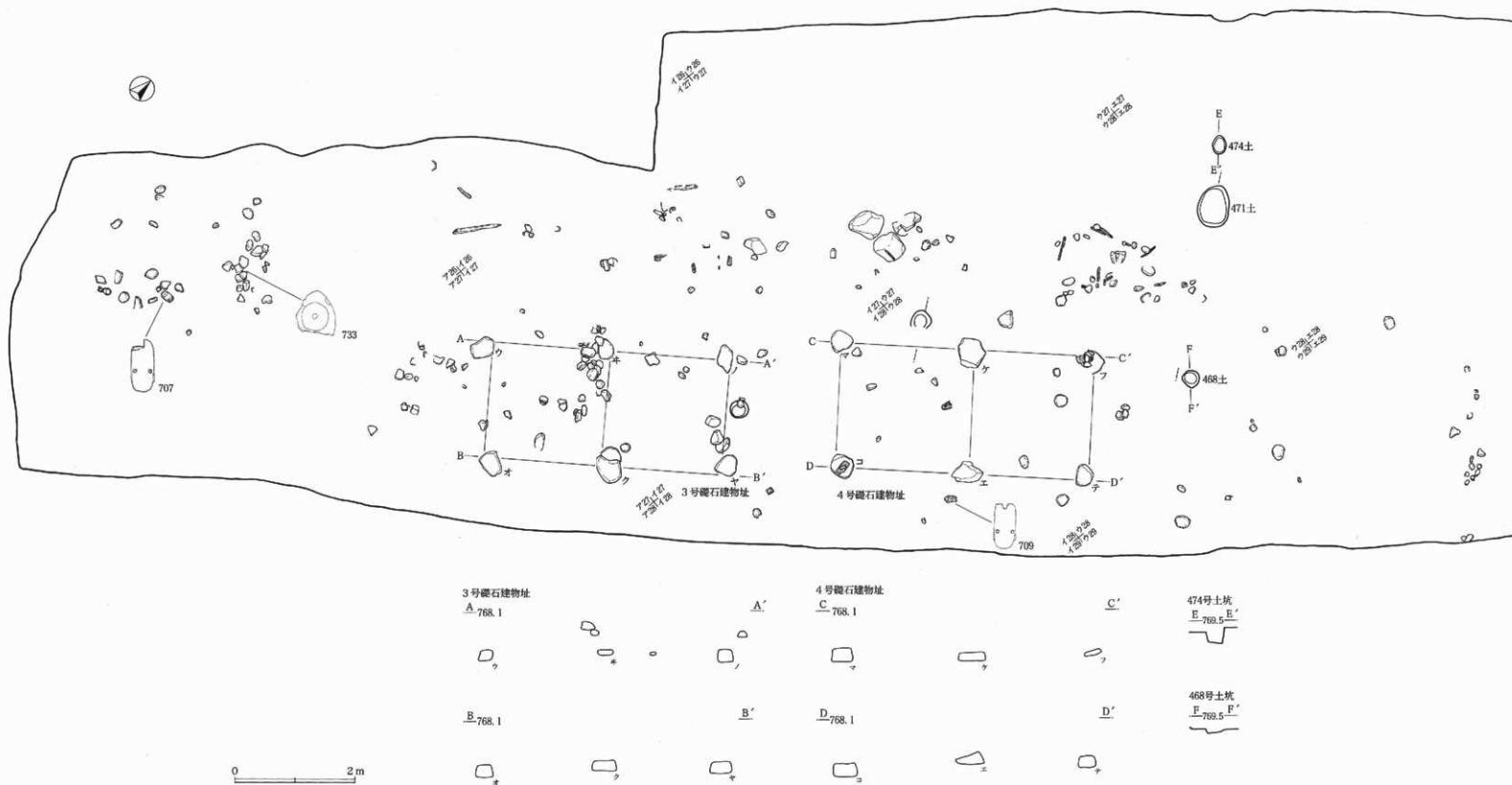
第56図 5区遺構配置図 (3) (1/60)



第57図 5区第1層目造構配置図 (1/60)



第58図 5区第2層目遺構配置図 (1/60)



第59圖 5區第3層目遺構配置圖 (1/60)

45° - Eである。ウ27・28に小規模な溝址があり、3号溝址と接続している。溝址の外側の施設から何かを流すために設けられた溝であろうか。溝の中から礫や木片が多く出土している。木片の中には建築部材らしき遺物（723）がある。ウ27・28に279×72cmの範囲で405本もの箸が出土している場所があった。出土遺物は手捏ねカワラケ15・ロクロカワラケ73（371・372）・瀬戸美濃系平碗1・盤類1・碗型鉢1・仏花瓶1・不明1・東濃系壺8・山茶碗4（542）・常滑窯鉢1・壺10・瓦器擂鉢1（588）・火鉢2・火鉢か風炉1・不明1・中国青磁碗1・曲物の底部1（673）・箸1（665）・竹を割って一部に穴を開けた木製品（717）・砥石1である。遺物の時期は古瀬戸中I～IV・後I・IIであり、1号礎石建物址の下層にあるため、14世紀初頭の遺構である事が考えられる。

4号溝址（第54図・図版28-5）グリッドカ30・31・キ30・31・32・ク31・32に位置する。ク32で分岐しており、北西側が北東-南西方向へ、南東側が北-南側へ伸びていると思われる。ほとんど調査区外に出ているため規模は不明である。北西側はほとんど調査区外に出ているので規模は不明であるが、少なくとも1,200cm以上の溝址であると考えられる。この溝は1区の溝と同方向であるため、1区の溝址に平行するか接続すると考えられる。軸線方向はN-37° - Eである。ク32の溝が分岐する辺りから箸溜まりが検出され、箸が170本出土している。出土した遺物は箸170本の他、手捏ねカワラケ・瀬戸美濃系大口茶碗2（454）・瓶子1・腰持形香炉2・器種不明1・東濃系壺1・常滑窯壺1・内耳土器1である。時期は古瀬戸中I～III期・後I期であり、14世紀後半の遺構であろう。

（4）土坑

5区からは40基の土坑が検出され、I群2類3基・II群6基・III群2基・IV群29基である。I群2類の459・460土（第55・58図・図版27-4）には37cmと39cm大の平石が埋置されていた。460土の平石の上には15cm大の木の板が載っていた。この板は木柱の板の部分が残ったものなのか柱の下に重いた板なのかはわからないが、いずれにしても柱にかかる遺物であると考えられる。5区の掘立柱建物址の軸線方向から、この2つの平石をもつ土坑は礎石である可能性が考えられる。IV群の土坑で、438・439・440・441・442・443・444・445・446・450・451・452・453・455・456・475・478号土坑（第55～57図）は確認面の最上層にある。452号土坑の下層からは木板と453号土坑が検出された。IV群の土坑は掘立柱建物址の柱穴と考えられるが、明確に建物址になる柱穴の配列は見られなかった。

（5）貼り床・焼土址

貼り床・焼土址（第52・57図）グリッドア27・28・イ27・28・ウ27・28・オ28・29で確認された。貼り床部分は突き固めてあり堅密である。部分的に白黄色の粘土を突き固めてある場所がある。1～3号溝址、2～4号礎石建物址の上部にあり、貼り床面と1号礎石建物址は同時期の遺構である可能性がある。貼り床上には焼土址があり、また、貼り床から掘り込まれている遺構に438・439・440・441・442・443・444・445・446・452・453・455・456・475・478号土坑（第55～57図）がある。

焼土はグリッドイ28から検出された。1層目の遺構であるが、453号土坑に切られているため、453号土坑より古い遺構であると考えられる。焼土址のある場所は貼り床がなされており、貼り床の上部に焼土址があり、周辺に炭化物が散布していた。焼土址の中心は43×36cmの範囲で、周辺に焼土が散布している。

出土遺物は2号礎石建物址の項で述べたが、新しい時期の遺物が本遺構に伴うものと考えられる。また、1号礎石建物址と同時期の遺構と考えると、時期は15世紀前半以降であろう。

第IV章 発掘された遺物

第1節 土器・陶磁器

出土遺物には縄文時代から中世のものがあるが、ほとんど中世であり、縄文時代から古代のものは微量に出土しているに過ぎない。そのため、遺物は中世を中心に述べる。

土器・陶磁器は25,144点出土している。土器・陶磁器の種類は、カワラケ・瀬戸美濃系陶器・東濃系陶器・東濃系・常滑窯系・中世須恵器・瓦器・土器・貿易陶磁器が出土している。器種組成は、109・110頁の表にまとめである。他に木器や石器、金属製品が出土している。以下、代表的な出土遺物の内容について述べていくが、ほとんどの遺物は破片の状態で出土しているため、数量は特別断らない限り破片の数である。

(1) カワラケ

カワラケは土器であるが、出土量が多い上に、用途も特殊であるところから、土器とは別の項で述べる。

カワラケは22,715出土した。手捏ね成形とロクロ成形、ロクロ成形で高台が付くカワラケがあり、Ⅲ群に分けることができる。

I 群 手捏ね成形のカワラケ。全部で1,220点出土している。法量により以下の3類に分ける事ができる。

1類 口径が61cm~118cmの小型のカワラケ。形状により次の7種に分かれる。

1種 器高が浅く、口径の広いもの。胴部と底部の境界が明瞭であり、口縁部が広がる (29・46)。

2種 器高が浅く、口径の広いもの。胴部と底部の境界が不明瞭で底部が丸くなる (193・302・356)。

3種 器高が浅く、口径の小さいもの。胴部と底部の境界が明瞭で胴部が丸く立ち上がる。底部は平面である。(26・45・353)

4種 器高が浅く口径の小さいもの。底部が小さく、胴部が比較的直線状に立ち上がる。このうち、口縁部を面取りしていないものをa (25・191・398)、面取りしているものをb (190・194・324・325)とする。

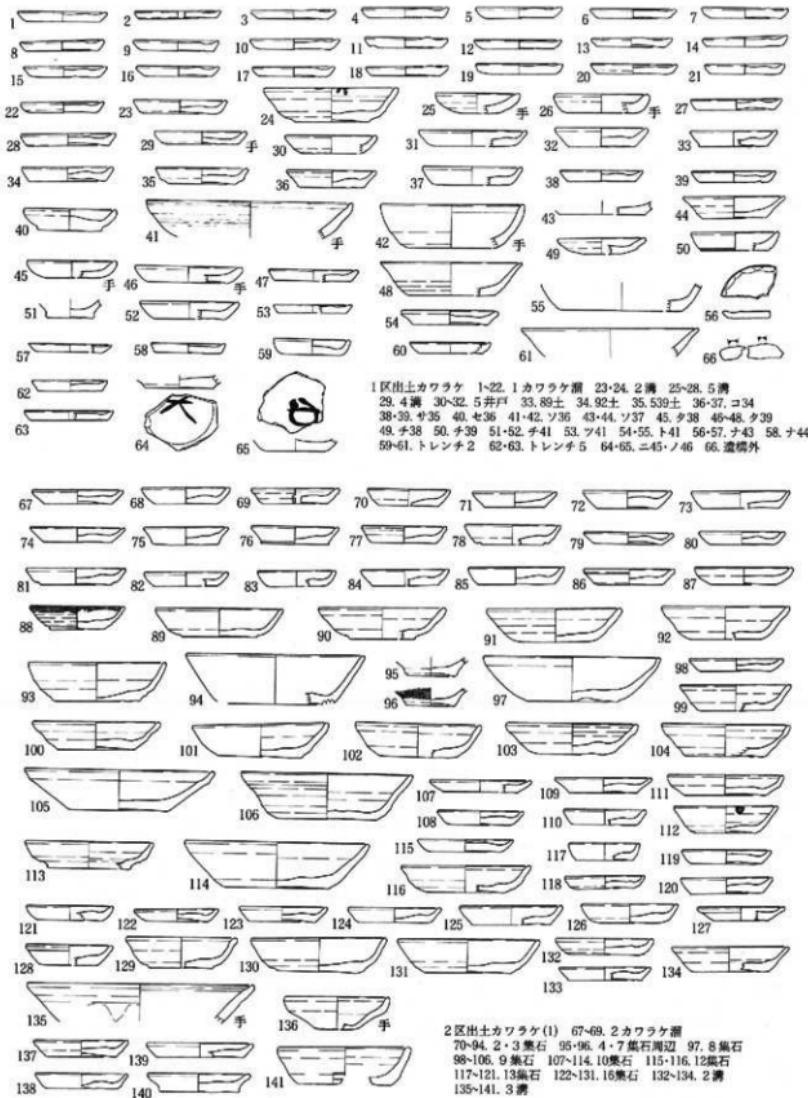
5種 器高がやや深く、口径が小さいもの。底部は丸くあまり安定感がない。口縁部付近をナデている。(354・355)

6種 口縁部から胴部を横方向にナデ成形し、腰部に段がつくもの。胴部は口縁部向かって垂直に立ち上がる。底部は削り、平らにしている。器高が浅いa (305・357・図版29-5・6) と深いbがある (326・360・361・362・369・385)。

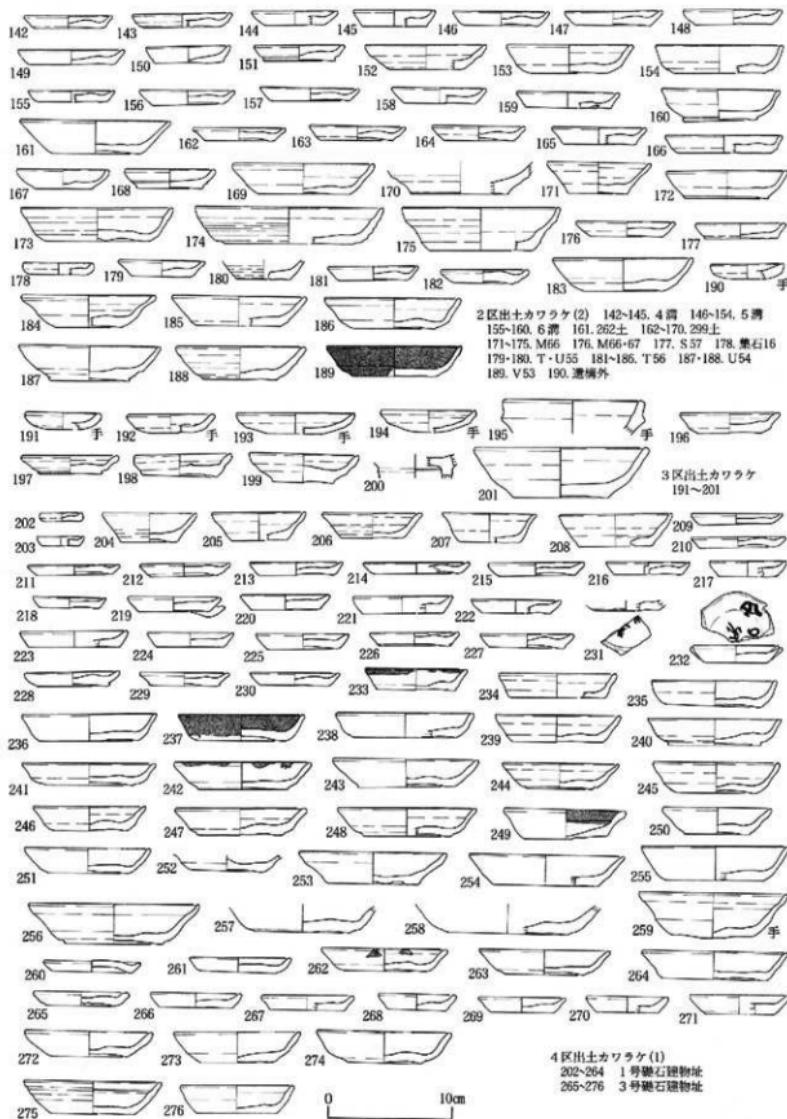
7種 6種と同様に口縁部から胴部の中程まで横方向にナデ成形し、腰部に段がつくもの。胴部はラバ状に外反する。底部は丸く、安定感はない (192・303・338・358)。

2類 口径が118cm~122cmの中型のカワラケ。口縁部付近を1回ナデ取りしている。339(図版29-1・2)と340は横方向にナデ取りして平らにしている(1種)。312と341(図版29-3・4)は口縁付近をナデ取りして、胴部中程に段がついている。ともに口縁部付近以外はナデか削りで成形し、底部が丸くなっている。かなり強調されているが、195は2種であろう。7区1群2類に該当する。

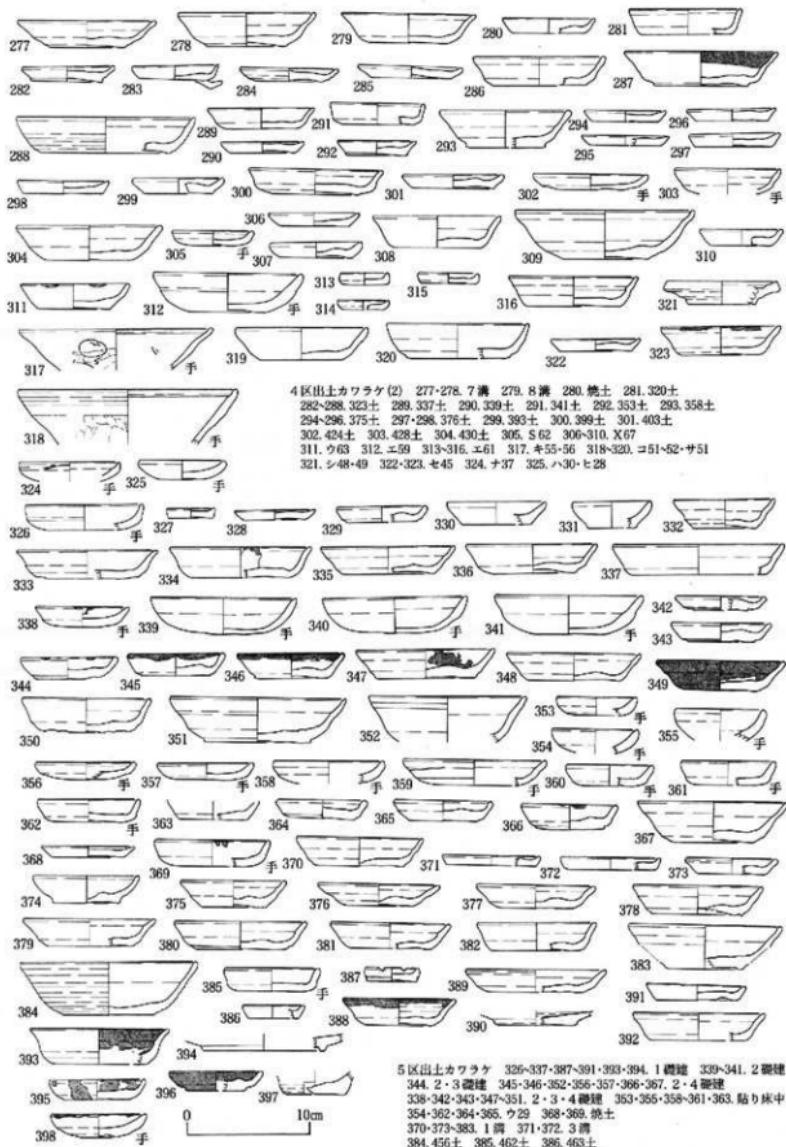
3類 胎土が白いわゆる「白カワラケ」である。法量が大きく深振りの器と考えられるが、底部が確認できるものはなかった。体部の厚みは薄い傾向にある。口縁部を面取りし、内側が段になっている。口縁部から胴部中程まで2段にナデしている。下半分は指頭圧痕が残っていたり、削られている(41・135・317・318)。317は胴部に墨で模様が描かれている。おそらく草花文であると思われるが、植物



第60図 カワラケ(1)(1/4)



第61図 カワラケ (2) (1/4)



第62図 カワラケ (3) (1/4)

の種類は不明である。焼き上がった後に描かれた模様である。7区1群1類に該当する。

II群 ロクロ成形のカワラケ。外底部に糸切り痕を残している。法量や形態により以下の3類に分類できる。

1類 口径が36mm~51mm、器高が56mmの小型のカワラケ。内底部の外縁部をドーナツ状にナデ、中央部を鳥状に残して高くし、鳥状になっている部分の中央部を軽く1回か2回ナデで凹ませている。外底部は糸切り痕を残し、調整はしていない。口縁部の形態で次の2種類に分けることができる。

1種 器高が浅く、口縁部へ向かって垂直に立ち上がるものと、若干内湾するものがある(178・202・313・314・315・327・387)。387は口縁部を半円状に押さえて凹ませている。このような例は7区でも確認されている。7区II群1類である。

2種 口縁方向に向かって外反するもの。203と386が該当するが、117も形態が同じなので、口径58mm・器高14mmと他のカワラケより大きいが、この分類の範疇に入ると思われる。7区II群1類である。

2類 口径が3類と同じくらいの大きさであるが、器高が深く、底径が小さいカワラケ。体部が傾斜している。口縁部から胴部中程まで強く横にナデしているため、胴部中程で屈曲している。内底部の外縁部をドーナツ状にナデ、中央部をナデしている(171・204・205・206・207・208・332)。208は中央部に穴を開けている底部穿孔カワラケである。7区II群2類に該当する。

3類 口縁部を欠いていて全体はわからないが、底部が小さく腰部がくびれて口縁部へ向かって広がると思われるカワラケ。内底部中央部は凹み、外底部には糸切り痕が残る(51・95・96)。

4類 内底部中央に円錐形の突起を残しているカワラケ。内部の整形方法で次の2種に分ける事ができる。

1種 内底部に円錐形の突起はあるが、ロクロ引きしただけで削りやナデなどの成形は行っていない。252は礎並遺跡II群B1類に該当すると思われるが、284は皿状である。

2種 高台部を厚めに切り、腰部が屈曲し、内湾気味に立ち上がる器形である。内底部を工具などにより成形し、中央部を円錐形に高くしている。内底部を成形している点で1種とは異なる。礎並遺跡II群B3類に該当する(40・65・199)。65には内部に墨書きで模様が描かれている。

5類 口径が68~96mm・底径50~68mm・器高9~17.5mmの小皿状のカワラケ。6類と異なり、中央部にナデ成形がないカワラケ。内底部に渦巻き状にロクロ成形痕が残り、中央部に向かって凹ませている。中央部に円錐状に突起があるところを指で押さえて凹ませてあるものもある。この中にはII群7類1種と同様で板状のものがある(1種)(115・122・210・213・260)。1種以外は体部がやや立ち、見込み部がある(2種)。(69・70・119・137・147・151・164・166・176・196・280・364)。5類の中には、底部に穿孔があるものや(69・図版30-1)、墨書きのあるもの(64・232・図版30-4・5)がある。また、232は、口縁部を輪花状に成形しているため、製作段階から特殊な遺物として作られていたことがわかる。

6類 口縁59~82mm・底径30~76mmの皿状のカワラケ。内底部の外周をドーナツ状にナデで凹ませ、中央部を鳥状に残し、鳥状の部分をナデしている。形態などで次の3種に分類できる。

1種 口径が59~96mm・底径51~74mm・器高が6~10mmの小皿状のカワラケ。底部はいずれも糸切り痕が残る。口縁部の高さと中央部の高さがほとんど無く、内底部の一部が口縁部より高いものもある。胎土のほとんどが明赤褐色(5 YR5/6)である。諏訪神社上社遺跡では板状カワラケ、礎並遺跡ではII群B8類としている。1~22は1区の1号カワラケ溜まり出土であり、他のタイプのカワラケは出土せず、このタイプのカワラケは単独で使用されていた事が考えられる。

2種 成形技法は1種と同じであるが、口縁部62~97mm・底径30~76mm・器高7~27mmで、体部が傾斜

し、見込み部があるカワラケ。底部に質の子痕があるものが1、ないものが2である。体部が直線状に外反するものがa (36・71・72・75・81・109・111・132・140・143・145・177・265・283・343)、体部が内湾するものがb (344・345・365・366・395) である。

3種 成形技法は1・2種と同じであるが、底部を厚めに切り腰部が若干柱状に残るものである (182・342・396) がある。

7類 6類に較べて法量の大きいカワラケ。口径71~139mm・底径44~108mm・器高12~32mmの壺状である。いずれも外底部に系切り痕が残る。見込み部の整形方法は6類と同じ外縁部をドーナツ状に凹ませ、内底部をナデて凹ませている。内側に縫のないものが1種、あるものが2種である。2種は口縁部から胴部中程まで横方向にナデて整形されたものである。184・249・287・393のよう体部が屈曲するものがある。底部に質の子痕があるものが1、ないものが2である。7区II群4類に該当する。

8類 7類よりもさらに法量の大きいカワラケ。口径118~156mm・底径60~133mm・器高20~43.5mmの碗状である。成形方法は2・3類と同じである。体部は外側に直線状に聞く1種がほとんどであるが、174・288のように体部が直立気味に立ち上がる2種がある。97・105・106・175・256・309・367のように口縁部付近を強くナデて面取りを行っているものがある。底部に質の子痕がないものが1、あるものが2である。

Ⅲ群 高台部のあるカワラケ (200・394)。個体数は極めて少なく、カワラケといえるかどうかは不明であるが、特殊なので独立した群とした。成形方法はロクロ引きで高台は付高台である。

(2) 潤戸美濃系陶器

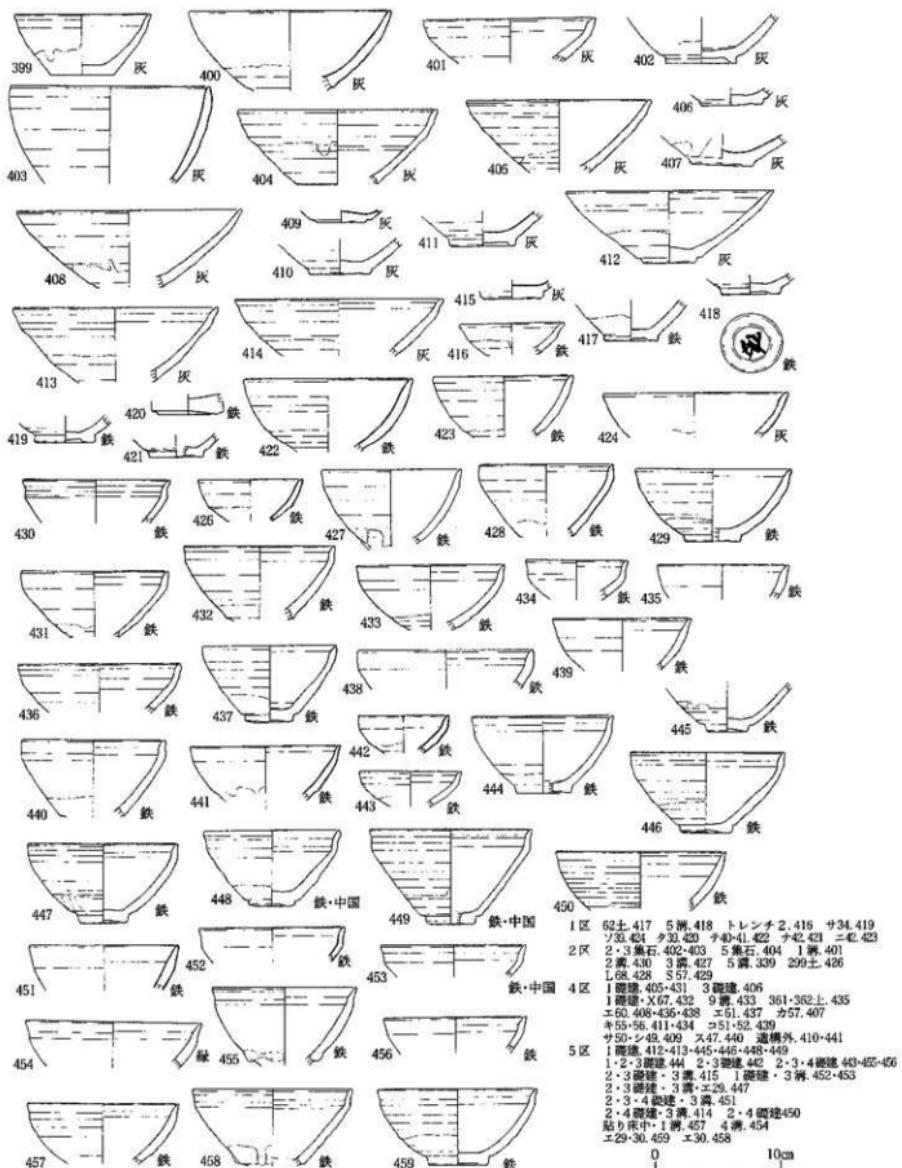
潤戸美濃系施釉陶器はカワラケを除く器種の中で最も数が多く、728点が出土している。施釉陶器は灰釉と鉄釉の2種類に大別され、量は少ないが、綠釉と、時期がかなり下るが志野釉が見られる。灰釉が509点と最も多く、鉄釉は216点である。鉄釉のうち天目茶碗が151点で、ほとんど天目茶碗で占められている。施釉陶器の器種は様々であり、下記に主要な器種について述べていく。

a. 瓢類 瓢には平底末広碗・平碗・小天目茶碗・天目茶碗・縁釉碗・端反碗がある。内訳は、平底末広碗1点・平碗149点・天目茶碗162点・小天目茶碗9点・縁釉碗1点・端反碗1点である。平碗・天目茶碗とも、数量が増えるのは古瀬戸後期に入ってからである。

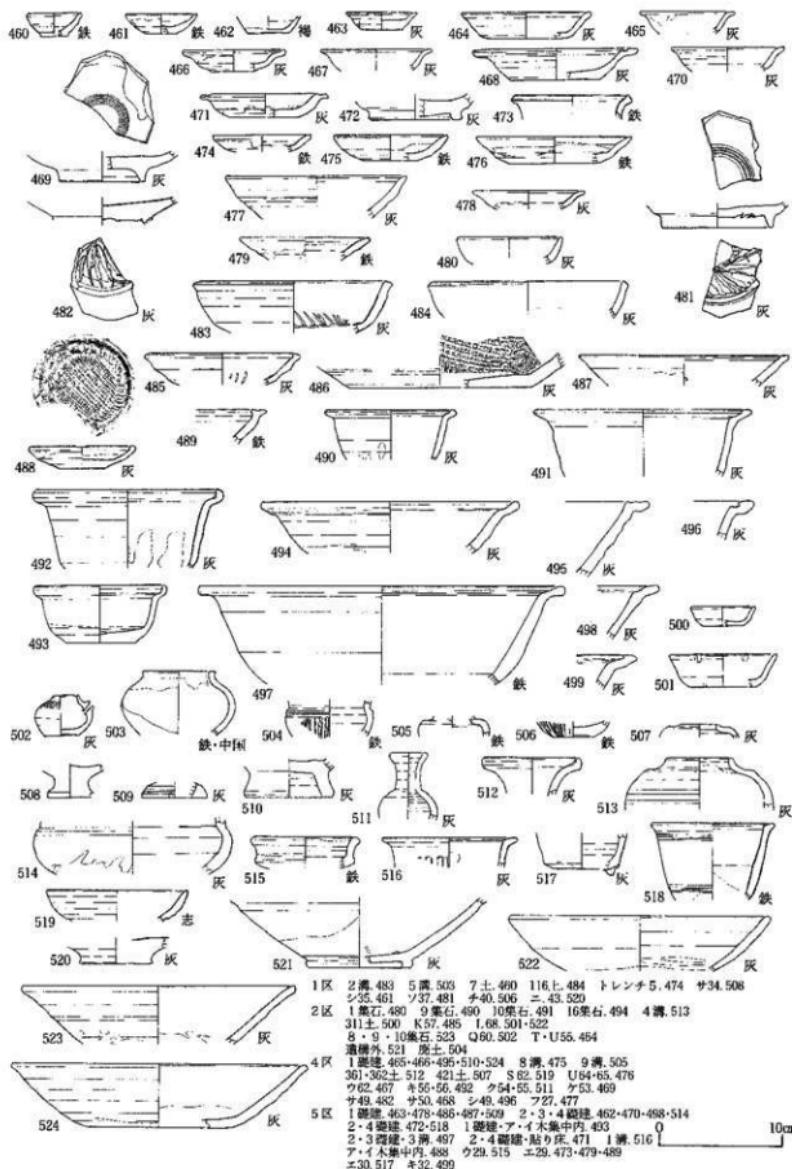
平底末広碗・平碗 (第63図) 平底末広碗1点・平碗149点が出土している。平底末広碗は399の古瀬戸中Ⅲ期のもののみが1点出土している。内面全面と外面上部まで灰釉が施釉され、見込み部の釉は一部が背くなっている。平碗は後Ⅰ期以前は8点に過ぎないが、後Ⅰ期から増加し136点出土している。すべてに釉がかけられており灰釉である。固化できたのは400~414までの15点で、破片による出土が多い。平碗の多くは412のように口縁部へ向かって直線状に聞くものが多いが、403のように体部が丸味を帯び、器高が深いものもある。出土地点は1区18点・2区24点・4区66点・5区42点で、4・5区に多く出土する傾向にある。

小天目茶碗・天目茶碗 (第63図) 天目茶碗は、法量により小天目茶碗と天目茶碗の2種類に分かれる。実測できた遺物の中で全体の法量が判明するものは少ないが、小天目茶碗 (416・426・434・442・443) が口径73~85cm・底径42cm・器高25cm、天目茶碗が口径106~148cm・底径39~48cm・器高60~60cmである。出土点数は小天目茶碗7点、天目茶碗は151点である。天目茶碗の中に縁釉が1点 (454)、灰釉が6点 (424) である。出土地点別に見ると、1区37点・2区23点・3区2点・4区58点・5区38点で、4区が最も多い。

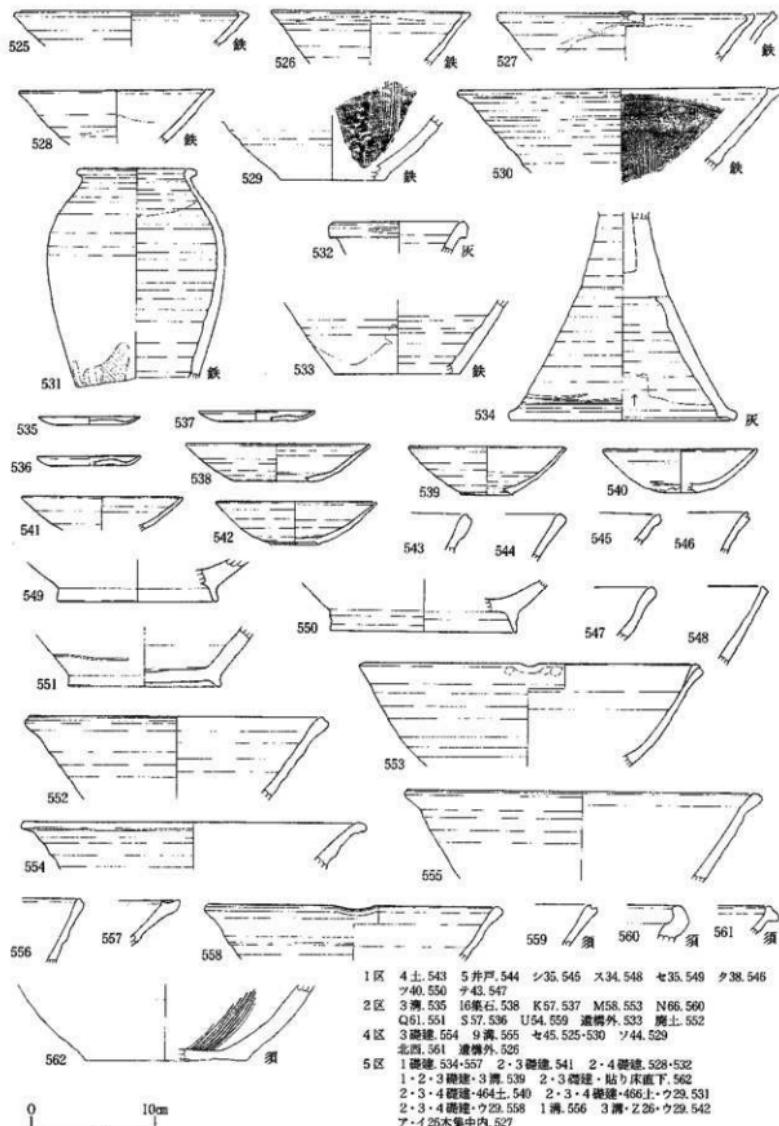
b. 盆類 盆には豆皿・小皿・中皿・折縁小皿・折縁中皿・綠釉皿・縁釉小皿・九皿・卸皿・底卸目皿・卸目付小皿がある。各器種の出土点数は109・110頁の表の通りである。卸皿・底卸目皿・卸目付小皿を合わせ



第63図 濑戸美濃系陶器及び輸入陶器(1)(1/4)



第64図 濑戸美濃系陶器及び輸入陶器（2）（1/4）



第65図 濑戸美濃系陶器（3）・中世須恵器（1）（1/4）

ると63点と多く、皿全体の57%を占めている。鉢の需要が多い事がわかる。折縁皿には小皿と中皿があり、縁軸折縁小皿(471)を含めると22点である。縁軸皿はほぼ小皿であり、16点である。その他、小皿・中皿・豆皿・丸皿が少量出土している。本項で取り上げている遺物は施釉陶器ではほとんどが灰釉であるが、縁軸小皿の10点と折縁中皿1点・鉢目付小皿2点が鉄釉である。遺物の時期は、縁軸皿系が後I～IV新期、折縁小皿中IかII期・後I～IV古期、折縁中皿が前IIIかIV・中II・後I・II期、鉢目付系は前III～後III期である。鉢皿は各時期に満遍なく出土している。豆皿・小皿は中IV～後I期の時期に集中している。

c. 鉢類 鉢類としたものには盤類・洗・折縁深皿・直縁大皿・鉢目付大皿・鉢目付深皿・柄付片口・鉢・片口鉢・折縁鉢・碗型鉢・盤型鉢・深鉢・捕鉢がある。このうち264点が無施釉の涅ね鉢・片口鉢と呼ばれるもので、施釉されている鉢類は178点である。盤類39点・折縁深皿32点が多く、碗型鉢14点・直縁大皿13点で、他の器種の数は少ない。

無施釉の鉢がほぼ半数を占め、最も大量に消費されていたことがわかる。産地は瀬戸か東濃地方であると考えられるが、明確な産地は不明である。鉢の中に片口の物が見られ(553・558)、他のものも片口であったのではないかと考えられる。胎土中に長石が入る物があるが、だいたいは精製された胎土である。口縁部に沈線状の段が付くもの(543・545・546・552)、玉状になるもの(544・547・554)、平らに面取りをするもの(548・553)、蓋の受け口になりそうなもの(557)の4形態に分類できそうであるが、蓋の受け口に形状が似ているものは、別器種である可能性も考えられる。

d. 瓶 瓶類としたものには瓶・瓶子・梅瓶・水注・花瓶・小瓶・片口小瓶・水滴がある。瓶類は72点と瀬戸美濃系陶器では割合が少ない。瓶・瓶子・梅瓶は合わせて27点、花瓶が多く21点出土している。

花瓶には花瓶・仏花瓶・尊式花瓶の3種類がある。出土量が多いのは仏花瓶の12点であり(509・511)、8点が5区から出土し、2区から2点、4区から2点出土している。花瓶は7点で、5点が1区、1点が5区、尊式花瓶は2点で1・2区で出土している。花瓶は1・5区が主体に出土している事がわかる。

瓶子の中には、焼成後に輪や器壁を剥いで木の葉の模様を彫り、さらに施釉をして象嵌しているものがある(図版30-6)。水滴は2区グリッドQ60から出土し(第27図・図版13-6・502)ほぼ完形である。注口部が短く、上部には刺突による模様が施されている。遺物の時期は古瀬戸中III期である。

e. 薩 薩類としたものには壺・四耳壺・小壺・合子・合子蓋・広口壺・茶入・茶壺・酒会壺がある。壺か瓶か不明なものがあるが、壺類に分類した。壺類は56点である。壺・四耳壺が42点出土し、壺類の主体をなしている。特徴的なのは、茶入・茶壺が5点出土していることである。茶入には肩衝(507)・大海(505)・播磨(504・506)の3種類が出土している。茶道具関係の遺物では、茶煮らしき壺が1点出土している(531)。

f. その他の遺物 上記分類した器種以外に、入子・小盃・仏供・香炉・燭台がある。

天日小盃は3点出土し(460・461)、いずれも1区から出土し、時期は後I期かII期である。

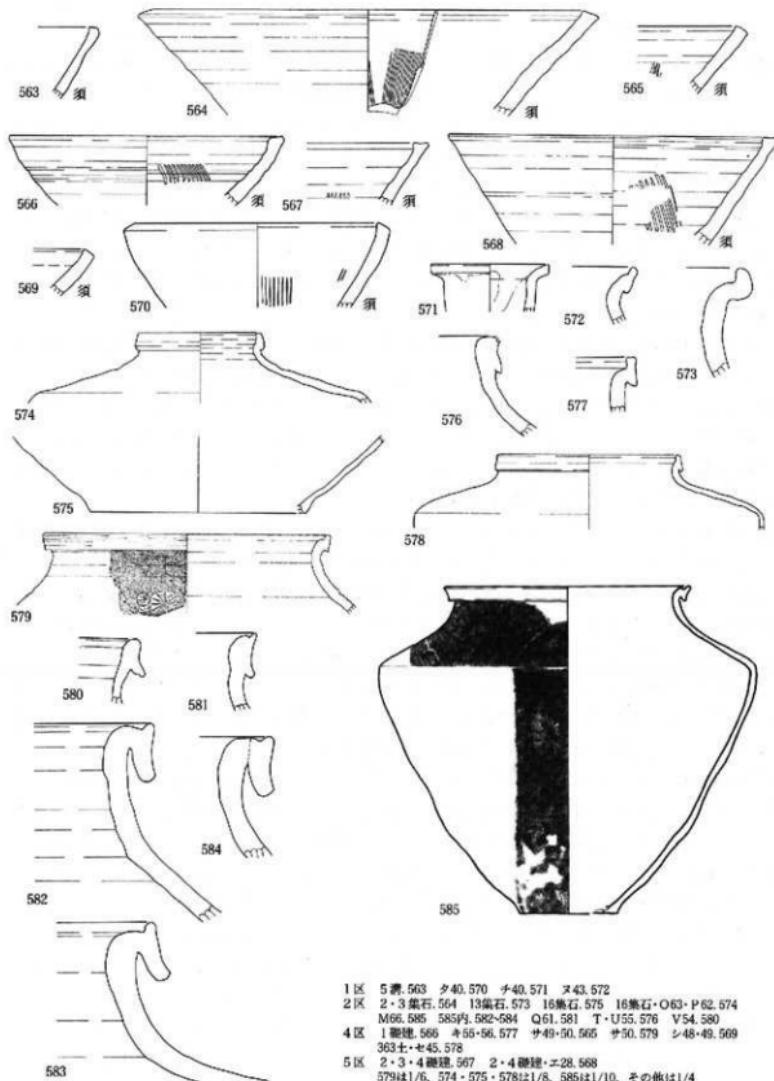
入子は6点出土し、1点灰釉である以外はすべて無施釉である(500・501)。501は口縁部が輪花である。

仏供は僅かに1点出土しているのみで(508)、1区から出土し、時期は中I～III期である。

香炉には腰持形香炉(514・515)・筒形香炉(516～518)がある。香炉は全部で14点あり、すべて5区から出土している。時期は中I期かII期、後I～III期である。

特殊な遺物として灰釉の燭台の台の部分が5区から出土している(534)。時期は後I期かII期である。

g. 山茶碗 山茶碗は東濃産であろう。無施釉の陶器で、皿と碗の形態がある。皿が3点(535～537)、碗が45点(538～542)出土しているが、陶器類の中では比率は小さい。



1区 5 滝.563 タ40.570 チ40.571 メ43.572
 2区 2・3集石.564 13集石.573 16集石.575 16集石.O63・P62.574
 M66.585 585½.582-584 Q61.581 T・U55.576 V54.580
 4区 1集桂.566 キ55-56.577 サ49-50.565 サ50.579 シ48-49.569
 363土・セ45.578
 5区 2・3・4縫建.567 2・4縫建・エ28.568
 579は1/6、574・575・578は1/8、585は1/10、その他は1/4

第66図 中世須恵器(2)・中津川常滑窯

(3) 中世須恵器

中世須恵器は32点出土している。この中で産地が判明しているのは17点にすぎない。産地は珠洲窯が16点、備前窯の可能性があるもの1点である。珠洲窯は擂鉢9点・鉢2点・壺1点・甕4点であるが、鉢は擂鉢の可能性もある。珠洲窯の器種の需要は擂鉢であることがわかる。遺物の時期は、珠洲Ⅲ期が563、Ⅳ期が564～566・568、Ⅴ期が567である。562は体部が丸味を帯びている須恵質擂鉢であるが、備前窯系の擂鉢の可能性が考えられる。その他はロクロ成形ではなく、珠洲窯などより若干軟質で、胎土中に砂や長石を多く含む産地不明の須恵器である。569や570は擂鉢で、口縁部をきれいに整形しているが、体部はランダムにナデている。570は小型の甕の口縁部と考えられ、短く内側に折れている。これも軟質であり、産地不明である。

(4) 常滑・瀬戸・中津川系陶器

中津川窯と考えられる遺物は鉢と甕があり、鉢は116点、甕は282点である。鉢は555・556・558を中津川窯産と考えたが、瀬戸美濃系の鉢と見分けがつかないため、543～554の中に中津川窯産の鉢がある可能性がある。表では瀬戸美濃系に含めた。甕は572～578が図示できた遺物である。中津川窯の甕の胎土は白灰色で長石や若干の砂を含む物で、常滑窯の甕に較べると不純物が少ない。大きさは小型のものが多い。口縁部の折り返しが小さく、573のように上方にだけ折れている形態もある。甕の内部に黒漆の付着しているものが多い。

常滑窯産と考えられる遺物はすべて甕で、344点出土している(579～585)。585(図版30-7)は2区の常滑窯埋置遺構であり、かなり欠損した状態で出土した。この中から別個体の常滑窯甕の口縁部から頸部にかけて3点(582～584)出土している。

1点瓶が出土し、常滑窯か瀬戸美濃窯の瓶と推定している(571)。口縁部付近に自然釉が厚く付着している。他に東海系や尾張系の甕が出土しているが、出土量は少ない。

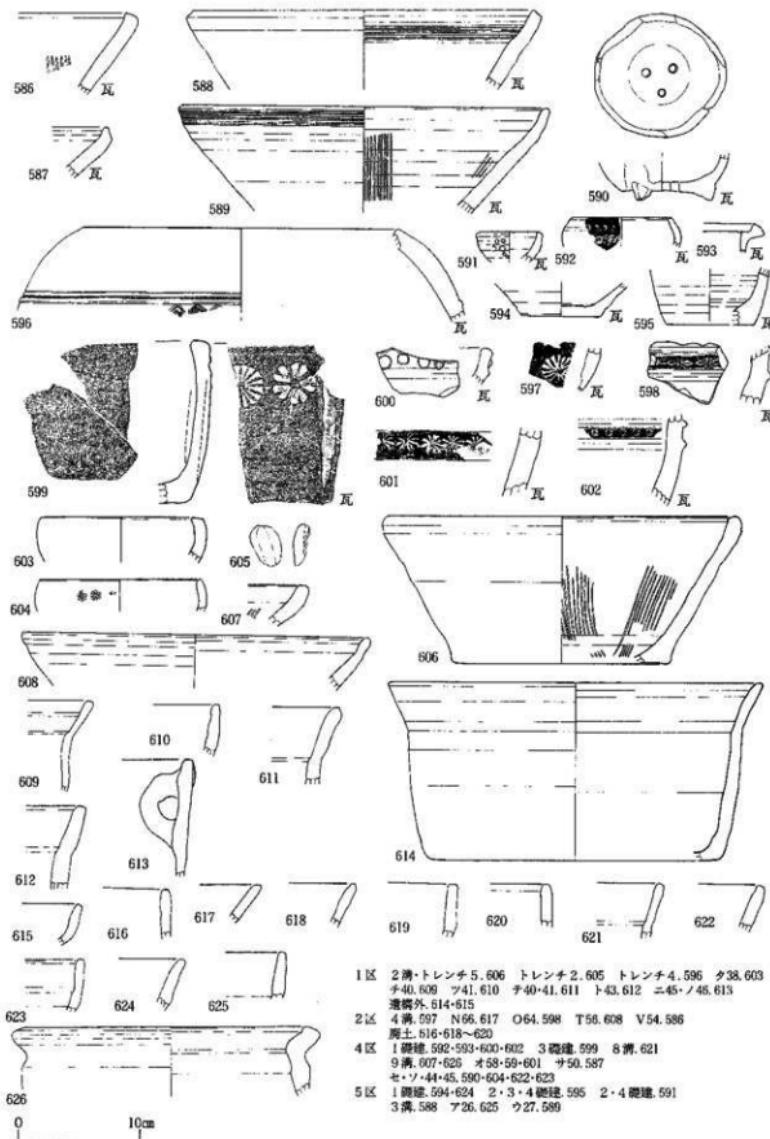
(5) 瓦器

瓦器は222点出土している。内訳は碗3点(594)・擂鉢が10点、鉢6点、深鉢3点、瓶1点(595)、楕木鉢と思われるもの1点(590)、香炉が3点、香炉か風炉2点、火鉢120点、火鉢か風炉17点、不明54点である。不明の大部分は火鉢の破片ではないかと考えている。擂鉢・鉢は、ロクロ成形ではないが、口縁部から頸部付近までかなり丁寧に整形している。頸部に段を付けるか屈曲させて上方に立てている。586・587は口縁付近だけ整形し、内側に口唇部を曲げている。この二つは、須恵質擂鉢によく似た形状である。590は茶色の胎土であり、底部に3ヶ所小さな穴が開けられている。外底部には3つの足があり、胎土は軟質である。上部は故意に打ち欠いているように思える。楕木鉢ではないかと考えている。香炉は3点出土し、そのうちの2点(591・592)を図示した。ともに碗形であるが、592は口縁部が内側に窄まっている。ともに外部にスタンプ文で花の模様が陰刻されている。596～602は火鉢である。いずれも胴部の上部を隆起や沈線により区画し、その間や下にスタンプ文(596～599・601・602)や竹管(600)などで模様を陰刻・陽刻している。模様は花模様が多い。599は、胴部を縱方向に部分的に窪ませて、輪花風に成形している。

(6) 土器

カワラケは土器であるが、出土量も多く、用途も特殊であるため、別項で述べることにした。その他の器種には鉢・擂鉢・深鉢・内耳鍋・甕・香炉、特殊なものとして土鍤がある。

a. 鉢・擂鉢 土器の鉢・擂鉢は19点出土している。図化できたのは606～608である。606は輪積みで外面を難に成形し、内面は横方向にナデ成形し、9本以上の単位で掘り目が付けられている。607は小破片であるが口縁部付近まで掘り目があるため、擂鉢であることが判明した。口縁端部を横方向に強くナデしている。608



第67図 瓦器・土器 (1/4)

は上部しか出土していないので鉢か擂鉢かは不明である。

b. 内耳鍋 内耳鍋はすべて土器で、陶器の内耳鍋は出土していない。瓦器の内耳鍋は出土している可能性があるが確認できなかった。内耳鍋は195点出土している。図示できたのは、609~625である。ほとんどの内耳鍋は外側に外反するタイプであるが、口縁部付近で段がついて垂直に立つタイプ（610・619・623・625）、垂直に立つタイプ（613）、内湾するタイプ（616・620）がある。いずれのタイプも口縁頂部が平らであるものが多い。

c. 香炉 土器香炉は4点出土し、実測できたのは603・604の2点である。603は内湾する器形である。器面には模様が付けられていない。外面は綺麗に磨かれ、口縁頂部は平らに整形されている。内外面とも口縁部の少し下の部分を横ナデしている。内面はザラザラして黒くなっているが、内部で香を焚いた痕なのであろうか。603が全体的に黒味が付いているのに対し、604は赤い胎土である。外面にはスタンプで花の模様が付けられている。全体的にザラザラしている器面であるが、比較的丁寧に成形を行っている。

d. 頸 土器の壺の破片が3点出土している。図化できたのは626である。626は非常に粗雑な作りである。口縁部付近しか出土していないので下部は不明だが、一部残っている胴部を見ると、外側は指で雑にナデで成形している。それに対し、外面の口縁部から頸部や、内面全体は綺麗にナデされて成形されている。特に屈曲している頸部は強く横ナデしている。頸部から口縁部に向かって外反し、口縁内部に段を作っている。

(7) 輸入陶磁器

輸入陶磁器には磁器と陶器があり、磁器には青磁・白磁・青白磁の3種がある。青磁は114点、白磁30点、青白磁12点、陶器24点である。

a. 青磁 青磁は磁器の中でも最も数が多いが、そのほとんどは龍泉窯系の製品で占められている。同安窯系は碗と青皿の2点に過ぎない。また、器種で見ると、91点が碗で、約80%を占めている。そのうち、38点が龍泉窯碗I 5 aである。他の器種には、杯・皿・盤・梅瓶（633）・酒会壺・獸脚香炉・植木鉢（632）がある。

b. 白磁 2点と少量であるが景德鎮窯の製品がある。碗が17点と半数以上を占めているが、他に皿・花瓶・四耳壺・合子蓋・杯がある。

c. 青白磁 出土数がとても少なく、ほとんど产地は不明である。梅瓶が4点と多い。他に水注2点（649）と型押皿（648）・杯・小碗がそれぞれ1点づつ出土している。

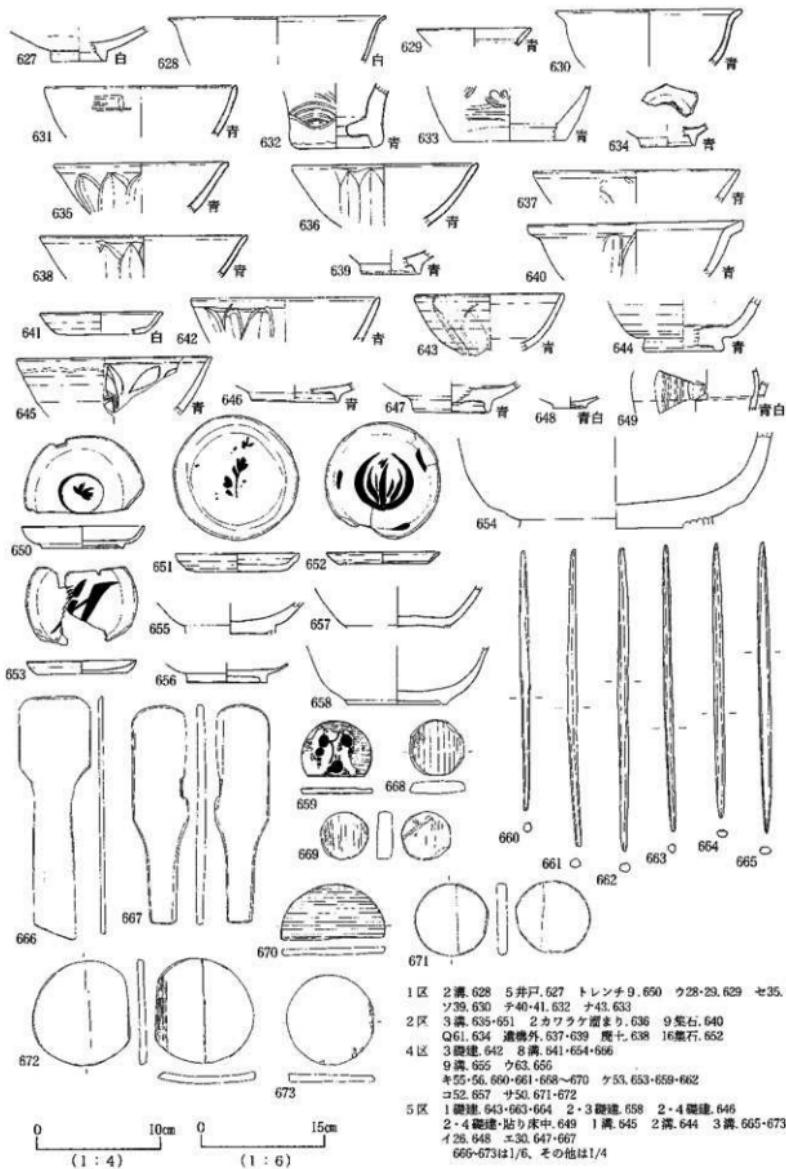
d. 陶器 陶器はほぼ茶道具に限定される。茶入は褐釉1点・鉄釉6点、天目茶碗は11点（448・449・453）、褐釉の壺6点である。壺は小型のもので茶壺の可能性が考えられる。茶入は肩付きが多いが、1点内海茶入（503）が出土している。

第2節 木製品

木製品は大量に出土しており、遺存状態が悪く整理ができないものが多かったので、総数は不明である。整理できた遺物によると、器種は漆器皿・椀・箸・しゃもじ・竹木製品・曲物・下駄・えぶり・信仰遺物・建材などが出土している。

(1) 食器類

a. 漆皿・椀 漆器皿10点・椀15点・鉢2点を確認している（口絵）。皿は、両面黒漆7点、内黒・外朱1点、内朱漆・外黒漆が2点である。両面黒漆のものだけ内面に朱で模様が描かれている。650は両面黒漆で、見込み部に草か葉の模様が描かれている。短い高台がある。651~653（図版30~8）も両面黒漆で内面に草や葉の模様が描かれている。高台はない。大きさは口縁部が88~102mm、底部68~78mm、器高8~18mmである。



第66図 磁器・木製品(1)

漆椀は、両面黒漆7点・内朱外黒1点・内朱外黒2(658)・両面朱漆2点である。いずれも高台が付いているが、658は高台が短い。655は器厚が厚く深振りである。模様はない。654は底部直径が約16cmあるかなり大きなもので、高台があったと思われる。これは両面黒漆で模様はない。遺物の状態が悪くて図示はできなかったが、片口の鉢が出土している。この遺物は外側が黒漆で、内側が朱漆である。外面には鶴と松の模様が描かれている。

b. しゃもじ状木製品 666は非常に薄い板を切ったもので、667のように丸味を帯びていないため、しゃもじとして使用されたのではない可能性がある。667は厚めの板を切り、角を丸く加工している。しゃもじであると考えられる。

c. 箸状木製品 箸は荒玉社周辺遺跡全体で6,951本出土した(660~665)。折れているものが多く、箸の長さがわかるものが少なく、長さは113cmから265cmと様々であるが、平均するとだいたい195cmほどである。特に多いのが19cm~21cmであり、基本的な箸の長さは20cm前後であると思われる。箸は、すべて両端を細くするいわゆる利休箸タイプである。箸の中には片側または両側が焦げているものが散見されるが、火災にあつたためだろうか。箸はまとめて出土する場合が多く、豪華で使用されたものであると考えられる。

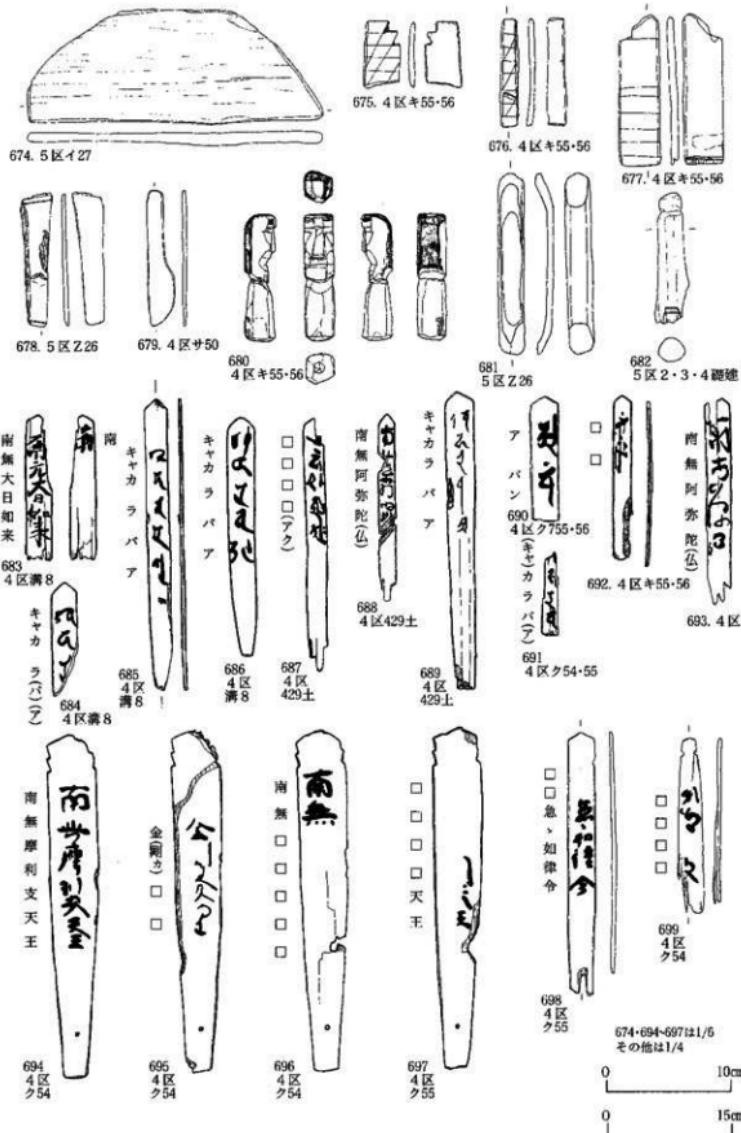
d. 曲物 曲物は多く出土していたと思われるが、断片的に出土している場合が多いため、図示できるものは少なかった。最も大きい曲物は、1区1号井戸址の井戸枠として使用されていたもので(図版3~6)、直徑約30cmである。非常に脆くて固化はできなかつた。曲物の底ないしは蓋と思われる丸く加工された板は数点出土しているが、大きさは5.5cmから39cmと様々である(668~674)。他に曲物の部品として675~677がある。これはおそらく曲物のタガではないかと考えられ、曲げやすくするために丸く加工された板が入れられている。曲物に関する部材として櫛類の樹皮がある。樹皮を薄く剥いだもので、螺旋状に丸くなっているものが出土した。曲物の留め具として採集されたものであると考えられるが、使用しないで廃棄したか、貯蔵していて洪水で流されたものと思われる。曲物の用途は食に関するものだけとは言い切れないが、便宜上食器類の中に分類した。

(2) 信仰遺物

信仰に関する木製品には人形・舟形・陽物・木製卒塔婆(柿経)・呪符がある。

a. 人形・舟形・陽物 人形と舟形は1点づつ出土している。680(図版31~4)は人形と考えられ、長さ10cm、太さ2.5cmほどの木を整などで削って顔などを作り出している。頭頂部付近と後頭部と眉に当たる部分を墨で塗って、髪の毛や眉毛を描いている。頭頂部は墨で塗られていない。下の木口の部分は円形に抉られている。隣接する干沢城下町遺跡からは鳥帽子のある男性の人形が出土しているが、表現が全く異なるので、女性の人形であると考えられる。681は舟形で整などで木を削り抜いて作っている。干沢城下町遺跡でも出土している。682は陽物と考えられる遺物で、整などで削って作られている。

b. 木製卒塔婆 柿経とも言われる木製卒塔婆は数多く出土しているが、文字が判読できるのは極めて少ない。出土地点は、ほとんど4区の8号溝址付近である。様々な木製品などと一緒に出土しているところから、流されてきたものだろうか。木製卒塔婆には漢字と梵字の2種類がある。漢字では683が「南無大日如来」、688・693が「南無阿弥陀仏」、梵字では684・685・686・689・691がキカラバア、690はアバンランカンケンと考えられる。694~697(図版31~7~9)は7枚重なって4区から出土したうちの4枚で、図示したのは1字でも字が読めるものである。薄い板に墨で書かれ、先端は宝珠形に刻まれている。横元の部分には穴が開けられ、紐が通されて扇のように使用されていたことが考えられる。書かれている文字は、754は「南無摩利支天王」である。その他の卒塔婆も「~天王」とあるため、同様の天部の名称が書かれていると思われる。



第69図 木製品（2）

c. その他の木札 698（図版31-10）は上部を三角形に切断し、卒塔婆状にし、板の片面に墨で文字を書いている。文字は上部に2文字程あると思われるが判読できず、その下の「急・如律令」が判読でき、呪符であることが判明した。699（図版31-11）は1字も判読できなかったが、上部を切って括れさせて、紐をかける部分を作っているので、荷札であることが考えられる。

（3）装身具

装身具と思われる遺物には、櫛・下駄が出土している。櫛は保存状況が悪く同化できなかった。下駄（図版31-5）は多く出土している。下駄には無齒・連齒・露卯の3種類がある。無齒下駄は齒のない下駄で、板を切って穴を開けただけの簡素な作りである。無齒下駄は703・708である。703は非常に小型で、12.6cmである。708は28.8cmの大きさで、最も大きい下駄である。特別な用途で使用された下駄であろうか。連齒下駄は一本の木から台と歯の部分を作り出す下駄である。702・704・706は前歯より後歯の方がかなり磨り減っていた。露卯下駄は歯の部分を差し込む下駄である。705・710が露卯下駄で、台歯を差し込む部分を方形に掘り込み、裏面の差し込み部をぼぞに切っている。705は歯を差し込む穴が前後1つずつであるが、710は、差し込む穴が前2ヶ所である。705の鼻緒を通す穴は、焼き鏡などで穴を開けたようで、穴の中が黒く焦げていた。

（4）武具

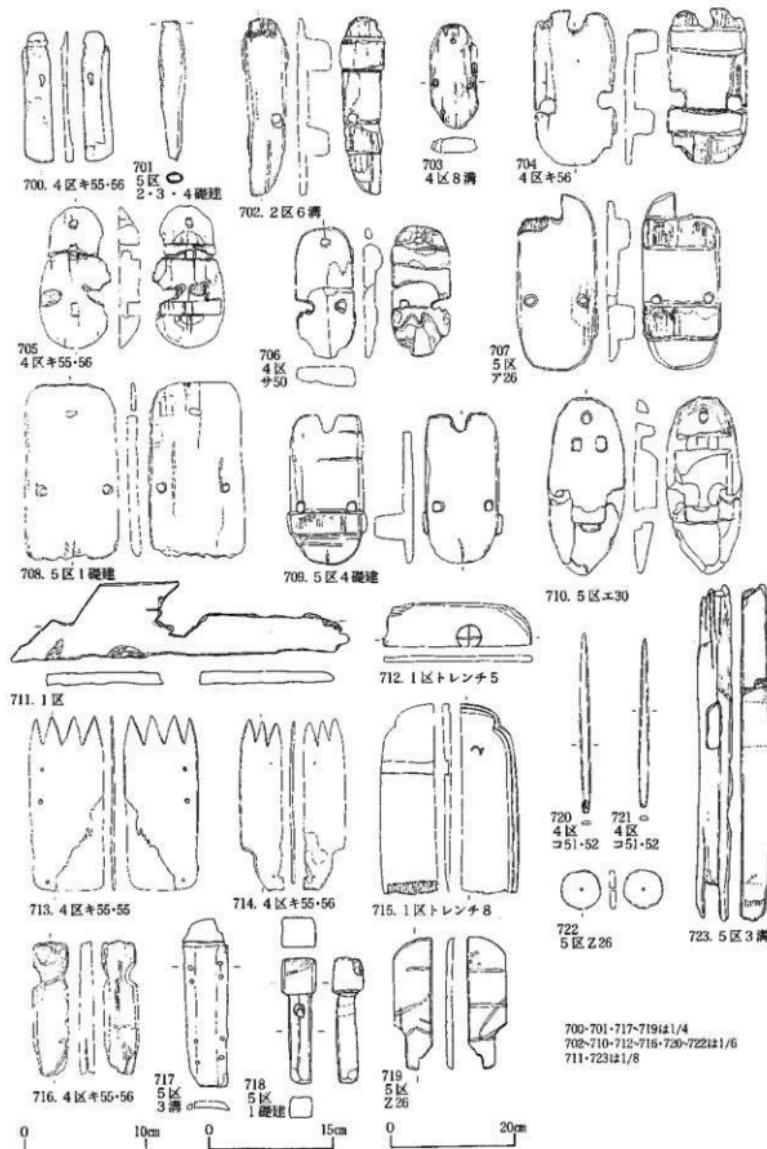
武具に関する遺物には小刀の柄の部分と、矢の柄の部分と思われるものがある。700（図版31-6）は長さが10.6cmしかないため小刀の柄であると思われる。半面しか出土しなかった。柄の外側は黒漆で塗られており、内側の茎が入る部分は漆が塗られていない。目釘の穴が貫通している。701は矢柄と思われる遺物である。筒状にした木の外面に漆を塗ったもので、これと同一のものが1点、5区1号礎石建物址から出土している。これは、中に鉄棒が入っており、漆の茎の部分と考えられるため、矢の柄と判断した。

（5）その他の道具

木製品の中には用途不明な物も多い。659（図版17-5・31-1）は丸い板の片面に黒漆に塗り、朱漆で草花文が描かれている。もう片面は漆が塗られていない。板の側面には加工痕が確認できず、丸い板の状態で使用されたのだろうか。711は形状からえぶりであると思われる。712は○に十字の焼き印が捺してある板で、家具類の一部か。713・714は薄い板の片方を鋼歯状に切れ込みを入れ、3ヶ所に小さい穴を開けている。715は板の一部を雲形状にし、溝状に何かを差し込むように掘られている。その反対の面の縁を彫刻し、数字の「2」のような模様を彫刻している。これも家具の一部であろうか。716は全面が焦げている木製品で、おそらく火災にあったものと思われる。上部に括れが作られており、紐に掛ける用途の木製品であろうか。717は竹製であり、2つ一組の穴が4ヶ所開けられている。718は断面形が四角形で、頭と思われる部分がほぼ正方形に加工されている。最初陽物と考えたが、中央部に穴が開けられているので、別の用途で使用されたものと考えた。719は薄い板に焼けた金属などで筋などをつけたものである。一部焼けた金属で点の模様を付けている。720・721は串状の木製品で、着とは異なり片面が尖っていない。この木製品の出土量は多い。722は丸く切った薄い板の中央部に穴を開けたものである。723（第58回・図版28-3）は建材の一部と考えられ、2ヶ所に臍穴が開けられている。

（6）自然遺物

自然遺物は胡桃の殻・桃の種子や樹皮・骨などが出土している。胡桃の殻と桃の種子は数多く出土し、胡桃は142個・桃の種子は94個出土し、干沢城下町遺跡出土のものと合わせるとかなりの数値にのぼる。『干沢城下町遺跡』（守矢 1995）の分析によると、胡桃の種類にはオニグルミとヒメグルミがあるため、本遺跡出



第70図 木製品 (3)

土の胡桃も、このどちらかであることが考えられる。種子は千沢城下町遺跡によると、桃・李・梅が出土しているが、梅の種子は確認できず、桃か李であろう。胡桃や李は諏訪上社の神事で食されていたことがわかっているため（柳川 2006）、神事で食されて廻棄された可能性が考えられる。

骨の種類はわかっていないが、「千沢城下町遺跡」では鹿・猪・馬、人の骨が出土しているが、本遺跡でもこのいすれかの骨が出土していると思われる。

第3節 石製品

(1) 紡錘車

石製の紡錘車は724の1点が出土している。形状は帽子形で、上部が小さく下部が広がっている。中央部に2ヶ所穴が開けられている。石材は軽石で、非常に軽い紡錘車である。

(2) 滑石製石製品

725は滑石で作られた石製品である。出土した部位が脚の部分であると考えられるところから、かなりの器高のある大きな器であることが考えられる。底径は40cmである。出土した部位は脚部の一つの単位で、16cmの幅で脚がいくつか作り出されていたと思われる。脚の下部を一部斜めに削って、装飾としている。補修孔であろうか、上部に穴が開けられている。この器は、おそらく一つの大きな滑石を磨いて作り出した物であると考えられる。器種は風炉のようなものであろうか。図化はできなかったが、滑石製の器と思われる遺物が5区でも確認されている。

(3) 捣き石・石鉢・石臼

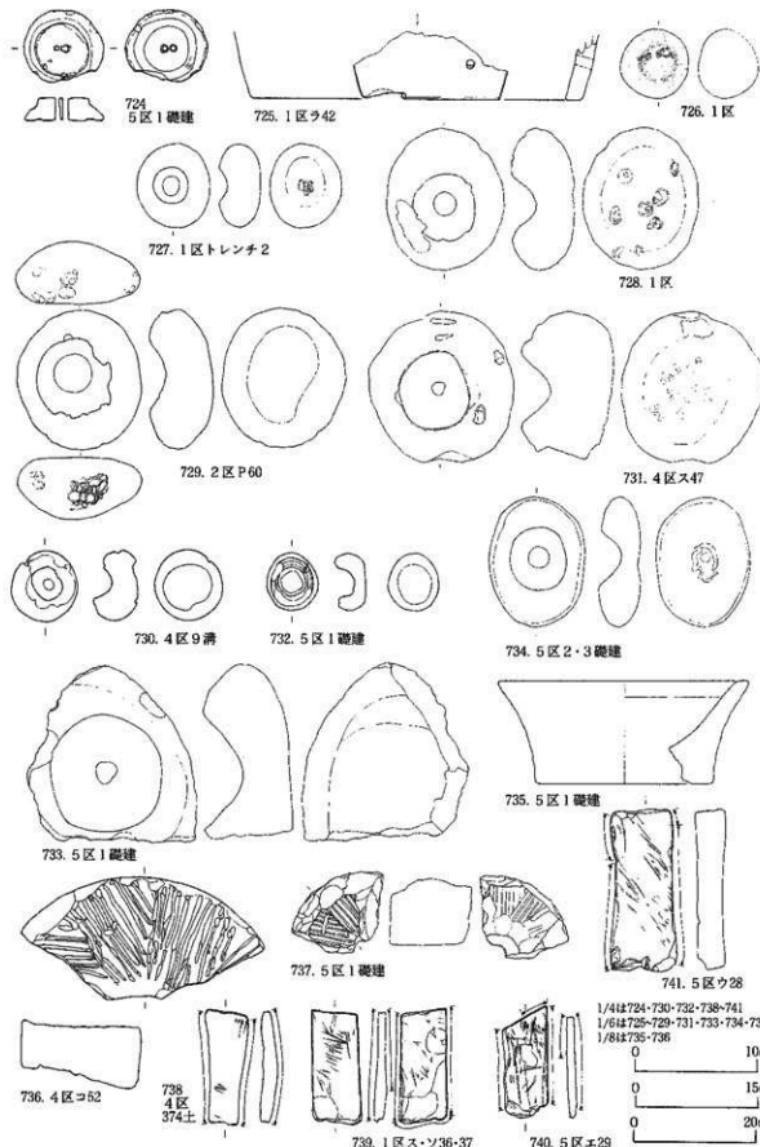
搾き石は12点出土しており、そのうちの8点を図示した(727～734)。大きさは様々で、4.7cm～21.5cmの大きさである。いずれも円形か楕円形の石の中央部を、丸く凹ませたものである。その反対の面は、敲打痕があるものが多く(727・728・731・734)、側面に敲打痕があるものもある(729)。石材は安山岩が主であるが、730・732は軽石である。小製品に軽石製が多いようである。丸く凹んだ部分はよく使用しており、非常に滑らかである。

735は石鉢である。口径が41cmと大振りである。石材は安山岩で全面を磨って加工している。内面の使用したと思われる場所は、非常に滑らかになっており、何らかの物を捏ねたり擂ったりして使用していたことが考えられる。

石臼は736・737の2点が出土している。736は直径が45cmほどの石臼と考えられる。縁を故意に打ち欠いていると考えられる。目は直線状に目立てができなかつたようで、何回か繋いで目立てを行っているようだ。また、目が磨滅したためか、2回ほど目立てを行っている。737(第57図)は直径約20cmほどの石臼と考えられ、おそらく茶臼の上臼ではないかと思われる。縁の部分は故意に打ち欠かれている。目は直線状に付けられている。目のある逆の面には、薄く目の痕が残っている。726は丸石であるが、若干敲打痕が認められるため、本項で述べる。石材は安山岩で、非常に丸く磨られている。

(4) その他の石製品

その他、砥石・火打石・硯が出土している。砥石は33点出土しており(738～741)、その大半は折れて出土している。出土地点は遺跡内のほぼ全域である。火打石は176点出土しており、遺跡内のほぼ全域で出土している。硯は小破片であり、接合できなかつたので、図化できなかつた。7点出土しているが、1点4区から出土しているのみで、6点は5区からの出土である。



第71図 石製品

第4節 金属製品

(1) 六器・小刀・切羽

金属製品は、銅製の六器・鉄製の小刀・切羽・金属の銚子・釘が出土している。742は六器と考えられる。口径4.2cm、器高1.3cm非常に小型な器である。胴部に2条の縫が入れられ、浅い高台が削り出されている。742の1点しか出土していないので、六器ではない可能性もある。743は小刀で、長さ20.5cm、幅2.7cm、厚さは0.3cmである。切っ先は折れている。錆びてるので刃が残存しているかは不明である。744(図版31-3)は刀の切羽である、模様が何もなく雑な作りである。刀身を通す穴は、一方が狭まりV字状になっている。固化できなかったが、金属製の銚子と思われる遺物が出土している。出土した部分は釣り手の根元のところである。材質は不明である。

(2) 銭貨

銭貨はすべて銅銭で、75枚出土している。出土地点の内訳を見ると、1区9枚・2区1枚・4区15枚・5区50枚と、5区の出土枚数が最も多い。5区の出土銭のうち、32枚が礎石コトヤのほぼ中間の地点から出土している。3・4号礎石建物址のさらに下層であるため、この場所に土坑があって、廃棄されたのではないかと考えられる。出土地点別に銭種を見ていくと次の通りである。

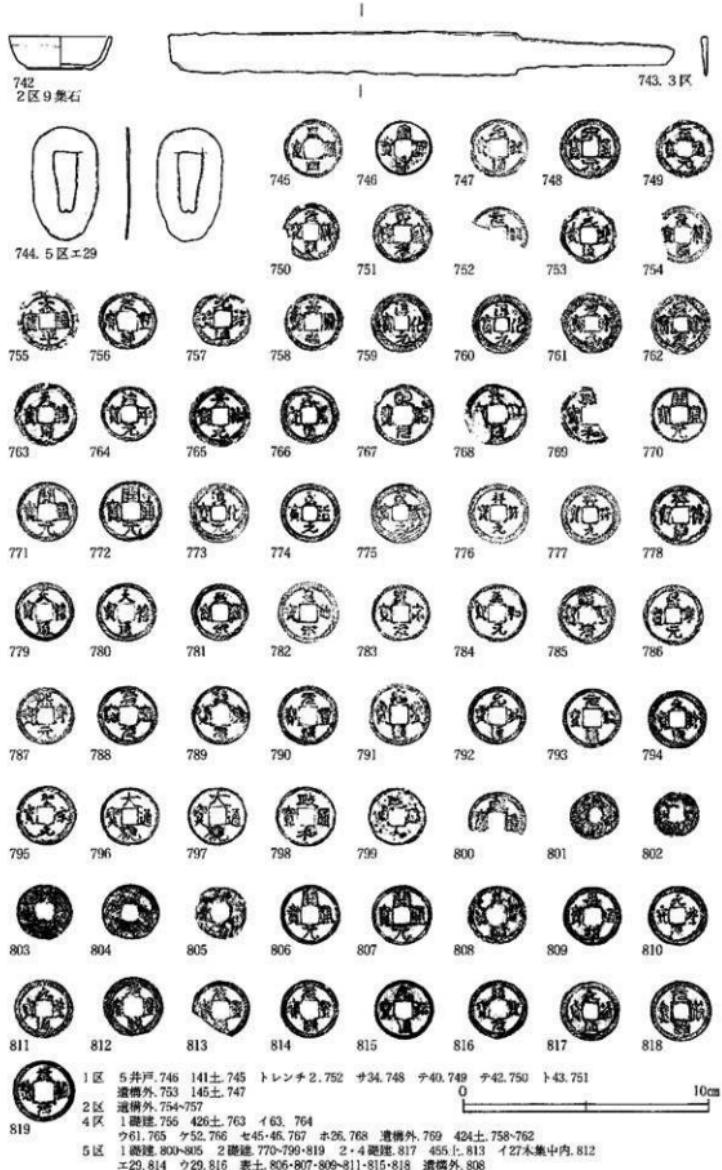
1区は宋通元宝1枚(748)・至道元宝1枚(749)・皇宋通宝1枚(745)・熙寧元宝1枚(751)・元豐通宝1枚(753)・元祐通宝2枚(747・752)・元符通宝1枚(750)・宣和通宝1枚(746)である。

2区は元符通宝1枚(754)しか出土しなかった。

4区は太平通宝1枚(755)・淳化元宝2枚(759・760)・天禧通宝1枚(763)・明道元宝1枚(767)・景祐元宝2枚(765・768)・嘉祐通宝1枚(758)・治平元宝1枚(764)・元豐通宝2枚(756・766)・元祐通宝1枚(757)・聖宋元宝2枚(761・762)・政和通宝1枚(769)である。

5区は銭貨が集中して出土したものと、その他の場所で出土したものを分けて述べる。礎石コトヤ間の出土銭の銭種は、開元通宝3枚(770~772)・淳化元宝1枚(773)・至道元宝2枚(774・775)・祥符元宝2枚(776・777)・祥符通宝1枚(778)・天禧通宝2枚(779・780)・景祐元宝1枚(819)・皇宋通宝2枚(781・782)・至和元宝1枚(784)・治平元宝1枚(785)・熙寧元宝4枚(786~789)・元祐通宝2枚(790・791)・元祐通宝2枚(792・793)・元符通宝2枚(794・817)・聖宋元宝2枚(783・795)・大觀通宝2枚(796・797)・政和通宝1枚(798)・□和通宝1枚(799)である。グリッドA-28からは乾享重宝1枚(800)・模鋳銭5枚(801~805)が出土している。その他の地点からは開元通宝2枚(806・807)・嘉祐通宝2枚(808・809)・元豐通宝5枚(810~814)・元祐通宝(815)・紹聖元宝1枚(816)・元符通宝(818)が出土している。

全体を通してみると、最も古い初鑄年をもつものは、621年初鑄の開元通宝で、最も新しいものは1119年初鑄の宣和通宝であり、洪武通宝や永樂通宝は全く見られない。銭種では元豐通宝が10枚と最も多く、以下、6枚が元祐通宝、5枚が開元通宝・熙寧元宝・元符通宝・模鋳銭、4枚が聖宋元宝、3枚が嘉祐通宝・景祐元宝・天禧通宝・皇宋通宝・至道元宝・淳化元宝、2枚が祥符元宝・大觀通宝で、その他は1枚ずつである。



第72図 金属製品・銭貨 (1/2)

第V章 調査の成果と課題

荒玉社周辺遺跡の本調査を平成13年度から行い、その後数回にわたって調査を実施している。平成13年度の第1次調査で設定した発掘区を1～4区、14年度の第2次調査の発掘区を5区、15年度の立会調査を6区、16年度の第3次調査の発掘区を7区、17年度の第4次調査の調査区を8区とした。本報告書は第1・2次調査時の報告であるが、本稿ではまず第1・2次調査の発掘成果を述べ、その後、遺跡全体の概観を述べたい。

第1節 発掘調査の成果

1区 井戸址が1区南西側に集中して検出された。また、溝が4条検出されている。井戸址は5基確認されているが、それぞれ形状が異なる。1号井戸址は井戸の底部に取水用の曲物が埋置され、石や炭化した草状の植物遺体で上部が埋められていた。炭化した草状の植物遺体は2号溝址内からも検出されているため、1号井戸址と2号溝址は廃棄時期が同じことが考えられる。炭化物は1区全体に散布しているため、何らかの原因で火災で起り、炭化した草状植物が井戸や溝に廃棄されて、その上部を造成し、溝や井戸が埋められたと考えられる。この時に、付近にあった土を盛って造成したため、炭化物が散布しているのだろう。

5号井戸址は板材で井戸枠が造られた井戸で、1号井戸址は曲物を底部に埋置した井戸、2～4号井戸址は石だけで造った井戸である。出土遺物から、5号井戸址が最も古い14世紀前半で、1～4号井戸址が14・15世紀であると思われる。

井戸址はグリッドゾ37から宮川側からは検出されず、ゾ36から5区側しか検出されないため、居住域は1区の5区寄りの場所から5区であったことが考えられる。

溝は、5区の溝と軸線方向がほぼ同じであり、5区から1区にかけて溝が作られていたことがわかる。溝は調査区外まで伸びているので全体規模がわかるものはない。2号溝址は調査区内で止まっていることがわかるため、排水の溝というよりも区画溝として造られていたことが考えられる。

溝と土坑群とカワラケ溜まりは重複しており、2面以上の生活面があったことが推定できる。カワラケ溜まりや土坑群は溝を切っており、溝が土坑群やカワラケ溜まりより古い遺構であることがわかる。1区北東側と2・4区の一部に多くの柱穴が検出され、掘立柱建物址があったことが想定される。1区のほぼ中央部から方形堅穴が1基出土し、方形堅穴周辺からは多くの柱穴状の土坑が検出された。方形堅穴に関する土坑だろうか。

調査区北東側からは遺構が確認できなかったが、グリッドナ42から宮川方向に大量の木が出土し、その中から漆器などの木製品が出土した。4区のグリッドエ60からコ51までの間に大量の木が出土する場所があり、1区の宮川側もこの延長線上に位置すると考えられる。これらの木は、自然木や建材と思われる板や柱、生活道具などであるため、上川上流から流ってきた木や、荒玉社周辺・十津城下町遺跡が洪水に遭い、遺跡内の遺物などが流されて建材などが溜まった場所ではないかと思われる。

2区 2区全体から溝址が検出された。軸線方向は1・5区と同様であり、北東～南西方向である。区画としての溝であるとともに排水のための溝であったのだろう。しかし、4号溝址だけが軸線方向が北西～南東方向である。4号溝址から6号溝址まで集石が検出されたが、自然に形づくられた集石のか人為的なのは判断できなかった。5号溝址内の集石は流されてきた可能性があるが、4号溝址内の16号集石は、磨滅していない中津川窯の壺の破片が石の間から出土しているため、人為的な集石であると考えられる。6号溝址内の14号集石はかなり密集した集石で、上部に焼土が厚く堆積していたところから考えると、人為的な集石

であると考えられる。

グリッドP60から南東側からは集石とともに多くのカワラケ溜まりが検出された。4・7区付近から礎石建物址が検出され、その周辺からカワラケが大量に出土しているところから、7区から2区グリッドM65まで神事を行う領域であったと考えられる。

2区で建物に関する遺構と考えられるのは、グリッドZ47から1区側の柱穴群と、6号溝址内の1号掘立柱建物址である。グリッドZ47から1区側の柱穴群は掘立柱建物址の柱穴と考えられるが、木柱は出土しなかった。もしかしたら、1区の井戸址を伴っていた建物が伸びていた可能性が考えられる。1号掘立柱建物址は6号溝址や13号集石より下層に位置すると考えられ、古い遺構である事が考えられる。この遺構は木柱が3本並んでいるところから建物址であることが判明した。木柱はすべて角柱である。

グリッドX50からS56の間はほとんど遺構がなく、箸溜まりとカワラケ溜まりが検出された。7区のこの付近も遺構はほとんど検出されていない。遺跡内には、溝と同じ軸線方向で無遺構部があることが判明した。3区 調防上社前宮の前に位置している。付近の水路からの水の漏出が激しく遺構は確認できなかったが、小刀・カワラケ・陶磁器などが検出された。しかし、遺物の出土量は少量である。平成12年に前宮入口にある溝上社周辺の立会調査が行われた。遺構は確認できず、湿地状の土層観察がなされ、沼地であると判断されているが、3区もおそらく溝上社周辺に展開する沼地に繋がるのではないかと考えられる。

4区 遺構では礎石建物址・溝址・井戸址・土坑・遺物ではカワラケのほか木が大量に出土した。掘立柱建物址は調査区の東隅で検出された。7区からは、4区に隣接する場所から2間×8間と4間×4間の2棟の礎石建物址が検出され、礎石建物址が立ち並ぶ場所があったことがわかる。7区の礎石建物址は重複しているため、建て替えが行われていたことがわかる。4区と7区の礎石建物址は軸線方向が平行もしくは垂直であり、関連する建物であろう。4区1・3号礎石建物址は、半間間隔で並ぶ礎石があり、縁側を持つ建物址である。1号礎石建物址の下部から大量のカワラケや陶器が突き込まれていた。遺物の時期は古瀬戸前期から後III期までの幅広い時期のもので、古瀬戸後III期前後に造成され、建物址が造られたと考えられる。3号礎石建物址の南西側には上面を平面に加工した大きな青色の石が2つ据えられている。灯籠か鳥居を上に載せる礎石なのではないかと考えられる。以上のことから、7区から4区東隅にかけて特殊な礎石建物址群が集中していることが判明した。

グリッドY66周辺からは内部に礫を充填した土坑が出土している。出土遺物は古瀬戸中期か後III期であるので、礎石建物址に隣接する土坑群であると考えられる。

グリッドエ60からグリッドコ51の間は、2区の無遺構部から1区の木溜まりへと続いていく場所と考えられ、中世では流路であったと考えられる。自然木や建材、生活道具などの木が多く出土しているため、洪水に遭って流されてきたものであろう。出土遺物の中に、7枚重なって出土した木製卒塔婆などの仏教的な遺物があり、干沢城下町遺跡方向から流れてきたと考えると、安国寺から流されてきた遺物であろうか。

ス47からは造成土の中から造成土とともに突き固められて粉々になった中津川窯の甕が1個体分出土している。ス47から1区シ34～ニ43・2区ズ47からイ44にかけて、小甕を多く含む堅い安定した地盤となっており、この辺りが小島状になっていたと考えられる。この小島の肩の部分を造成したときに中津川窯の甕が入り込んだと思われる。小島状になっている堅い場所からは掘立柱建物址の柱穴と思われる土坑や方形窪穴が多く検出された。テ38からヘ26間はほとんど遺構はなく、8号井戸址や9・10号溝址と若干の土坑が検出されているだけで、遺物の出土量も少ないが、手握ねカワラケの出土量が多いのが特徴的である。荒玉社周辺遺跡の遺構の限界はヌ32付近と考えられるが、フ・ヘ26からは10号溝址と近世と思われる掘立柱建物址の柱

穴が検出され、散発的に周辺に伸びていることも考えられる。

5区 碓石建物址が5棟と溝が4条検出された。そのうち、最も新しい時期になるとされる遺構は1号 碓石建物址と貼り床、掘立柱建物址と思われる柱穴である。3号溝址は1号 碓石建物址より下層にあり、3号溝址を埋めて造成し、1号 碓石建物址が構築されたことが判明した。造成土の中から多くの炭化物が検出され、火災などがあった後の土を使って造成を行ったらしい。1号 碓石建物址の下層には2号 碓石建物址がある。2号 碓石建物址は1間×5間が検出されているが、おそらく南西側に伸びていると思われる。3・4号 碓石建物址がさらに下層から出土し、1間×2間が検出されている。おそらくこれらも南北方向へ伸びていると思われ、1号 碓石建物址と同規模の建物であると考えられる。2・3号 碓石建物址は溝址より低いレベルから検出されているが、 碓石建物址のある場所は軟弱地盤であるため、沈下した可能性がある。

全体の概要 荒玉社周辺遺跡全体から見ると、5区と4区・7区に 碓石建物址が集中する場所がある。4・7区の 碓石建物址周辺からは大量のカワラケが出土しているが、5区からは多くても破片が約600点程度と、4・7区よりは出土量は少ない。また、この傾向は天目茶碗・平瓶・瓦器は5区から多く出土する。

溝址は遺跡全体から出土している。軸線方向はほとんどがN-44°~58° - EかN-44°~57° - Wで、ほとんど同じであるため、区画として造られた事が考えられる。溝の中には礫が護岸的に積まれたと見られる2区5・6号溝址・4区9号溝址が見られる。

2区T56-W51間・7区X56-イ57以北・4区カ57-シ48間・1区ト43-ネ43以東は遺構が検出されず、1・4区側から大量に木材などが出土していることから、東西方向に水害などによって押し流された場所があることが判明した。遺跡の範囲は遺構の検出状況からK69からヌ33の間と考えられ、4区ヌ32北西から3区・溝上社周辺が遺跡の限界と捉えられる。

遺構が重複しているので数回遺跡内の改変が行われたと考えられるが、ほとんどの建物址や溝址の軸線方向がN-43°~51° - WかN-44°~57° - Eであるため、区画はそれほど変えずに遺構の変更が行われたと考えられる。これは、宮川がN-52° - W、守屋山麓の山裾に平行に造られた国道152号線がN-58° - Wであるところから、周辺の地形に沿って遺構が構築されたと考えられる。

第2節 歴史的事象と遺跡の性格

発掘調査により出土した遺物の時期は、輸入陶磁器では宋代の同安窯から明代まで、瀬戸窯では古瀬戸前Ib期から後IV新期、山茶碗では大畑大洞から脇之島と300年にわたる遺物が出土している。遺物が爆発的に増加するのは14世紀後半からである。

「大町」と荒玉社周辺遺跡 今回発掘調査を行った場所は前宮の周辺に位置し、調査区内には荒玉社が位置し、歴史的に重要な場所であると認識してきた。地元では「大町」のあった場所であるといわれてきた（諏訪史談会1958・安国寺寺友会 1997）。

文献史料での荒玉社の初見は、建武2年（1335）の『大祝職位事書』である。また、大町の初見史料は文明2年（1470）である。荒玉社と大町の成立は不明であり、荒玉社はかなり古くからあったことが考えられる。大町は「守矢満喜書留」天文11年（1542）7月2日条に「安国寺の門前大町」とあるように、安国寺の門前にあったことがわかる。干沢城下町遺跡のB区2号屋敷割から 碓石建物址が1棟検出され、これが、3間四方の特殊な建物であるため、安国寺の堂宇の一つであると考えている（守矢 1993・1994）。このことから、安国寺の前に広がる荒玉社周辺遺跡は、大町であることが推定される。安国寺の創建が14世紀前半であるところから、遺物と併せて考えると安国寺が創建されてから「大町」が発展した可能性が考えられる。

出土遺物や遺構の状況から14世紀後半以前にも遺構があったことが確認できているが、非常に密度は薄いようである。干沢城下町遺跡（守矢 1993）では、遺構が確認できる第Ⅰ期を13世紀中頃とし、干沢に町ができる時期を13世紀中頃以前としている。干沢城下町遺跡第Ⅰ期の遺構は、A区の掘立柱建物址1棟と井戸址1だけで遺構の密度は薄い。第Ⅱ期になるとB区に礎石建物址が造られ、町が溝によって区画され始める。この時期を14世紀前半としている。荒玉社周辺遺跡で遺物が爆発的に増加するのは14世紀後半であることを述べたが、古瀬戸窯の陶器が増加し始めるのは13世紀後半であり、干沢城下町遺跡とほぼ同じ傾向を示すと考えられる。干沢城下町遺跡と荒玉社周辺遺跡の中間に位置する荒玉社周辺遺跡8区からは、3面の生活面が確認され、最下層から火葬遺構が検出されている。このことから、初期の干沢城下町から荒玉社周辺遺跡にいたる場所は、あまり広がりもなく、荒玉社周辺遺跡側は火葬場が形成されていたように、町場が形成されていなかったことが考えられる。その後、前述したように、安国寺の創建とともに大町の範囲が拡張していったことは、遺物の出土量が増加し、遺構も増加することから言えると思われる。

2・4区には遺構の検出されない場所が帯状あることが確認されている。これは、何らかの自然な流路があったのではないかと考えている。史料10では大町が東西に分かれていたことが記されているが、この自然流路によって東西に区切られていたことも考えられる。

史料によると文明12年（1480）に火災があり（史料10）、文明14年には洪水が（史料11）、文明15年と天文11年（1542）には合戦があり、大町は火災や水害に遭っている。調査区のほぼ全体に炭化物が散布しており、1区1号井戸址や2号溝址内には炭化した塊状炭化物が出土している。また、4区礎石建物址1や5区1号建物址は、炭化物を多く含んだ土で造成しており、火災があったことが考えられる。これらの火災の層を文明12年と考えると、1区1号井戸址・2号溝址は文明12年以前、5区の第1面の遺構や4区1号礎石建物址は文明12年以降に構築された遺構である可能性が考えられる。守矢は、土層から文明12年の火災層・14年の洪水・15年の争乱時の火災層の3層を想定しているが（守矢 1993・1994）、5区1号礎石建物址を文明12年の層であると考えると、文明15年の層は確認できなかった。

礎石建物址の性格 級石建物址は4・7区と5区の2ヶ所から検出され、5区は3回建て直しが行われていることが判明している。4・7区は7区以外建て直しは確認できていないが、建物の形状が異なっているため、1度かなり改変されたことが想定される。また、これらの礎石建物址周辺からは数10ヶ所のカワラケ溜まりが確認され、大量のカワラケが出土している。周辺からは仏教的な遺物も出土しているが、中世は神仏混淆であるため、神事に六器・仏供・仏花瓶・木製卒塔婆などの仏教的な道具が使用されていたことは否定できない。しかし、カワラケが非常に大量に出土するところから、何らかの神事が行われていたことが想定される。また、4区1号礎石建物址内の造成土中からは若干の陶磁器が出土するが、4区3号礎石建物址や7区からはほとんど生活道具らしき遺物は出土していない。以上から、可能性としては4・7区の礎石建物址は荒玉社であること考えられる。

第Ⅱ章第1節2の史料1・3・4から荒玉社には鳥居・舞台・宝殿・玉垣があったことを述べた。礎石建物址が荒玉社であれば宝殿か舞台であったと思われる。4区3号礎石建物址の南東側に、2つの上面が平面な青い石が置かれていたが、この石の性格は現在のところ不明である。3号礎石建物址が宝殿であれば、2つの青い石は鳥居の礎石である可能性も考えられるが、建物に非常に近接しているため、灯籠などの基壇であった可能性も考えられる。

5区の礎石建物址周辺からは、4・7区よりも様々な種類の遺物が出土しており、4区周辺では見られなかった内耳鍋や香炉・燭台が見られる。内耳鍋が出土しているところから、生活的な遺構であると考えられ

る。とりわけ香炉や燭台といった特殊な遺物が出土するため、庶民が居住していた建物ではなく、身分が高い人物の建物か、諏訪上社関係の神事を行わない建物であったことが考えられる。また、5区に隣接する1区からは井戸址が検出されているが、4・7区周辺からは井戸址が検出されていない。このことから考えても、1・5区は生活の場であり、4・7区は宗教的な場であると言える。

干沢城下町・荒玉社周辺遺跡の景観復元 碓石建物址で見えてきたように、場所によって大きく遺跡の性格が異なっていることが考えられる。

5区の礎石建物址については、上社か大祝、または家臣関係の建物で、1区の井戸址は5区の建物址に付随する遺構と考えられる。これらの建物は、溝によって区画され、整然と建物が並んでいたことが想定される。この場所は少なくとも3回にわたって、建て替えられているが、礎石建物址であることと出土遺物から、上社・大祝・家臣のいずれかの建物であったことは変わりはなかったと思われる。1区の井戸址が検出された場所から宮川側には数棟の掘立柱建物址が作られ、大町の一画をなしていたことが考えられる。これらの建物も、1区や2区北西側のような溝址で区画されていたと思われる。

2区中央部・7区・4区東側は、礎石建物址と大量のカワラケが出土し、かなりの回数神事が行われた場所である事が判明した。これらの礎石建物址は荒玉社と考えられ、大町から外れた場所に、宗教的な領域が形成されていたことが考えられる。

荒玉社周辺遺跡8区から干沢城下町遺跡A区は、掘立柱建物址の柱や柱穴、方形竪穴、多くの井戸址が検出されている。井戸址は両方併せてると13基確認されており、生活址であったようである。このことから、大町の一部であったことが想定できる。大町ができる以前の遺構は、火葬遺構以外確認できなかつたため、生活の場ではなく、荒涼とした葬送の場であったことが考えられる。

5区を中心とする場所と、干沢城下町遺跡A区を中心とする場所は、2区・4区中央部の流路により分けられている。おそらくこの流路は自然流路と考えられ、自然に分けざるを得なかつたのかもしれない。この2極化した遺構の集合体が、史料10にある東大町・西大町であると思われる。この大町から宮川側は荒玉社があり、干沢城下町遺跡B区を中心とした場所には安国寺があったと考えられる。

荒玉社周辺遺跡の終焉 13・14年度調査時の出土遺物から、古瀬戸後二期（15世紀前半）を最期に遺物が激減し、後IV古期（15世紀中葉）に10点以上出土するが、後IV新期（15世紀後半）に2点、大廟第2段階（16世紀前半）まで2点とほぼ遺物が出土しなくなる。この傾向は、干沢城下町遺跡・干沢城跡でも同様であり、前宮一帯は15世紀後半で衰退した事が考えられる。これは、文明15年に前宮で争乱があり、その後、源氏方の拠点が慈頼家のいた上原に統合されたからであると考えられ、大廟期以降の遺物は上原城下町遺跡で増加する傾向がある（守矢 1991・柳川 2005）。しかし、「大町」という記述は元亀元年（1570）の「武田信玄朱印状」まで見られるため、存在していた可能性がある。

江戸時代初期に描かれたと考えられる「諏訪大社上社古図」には荒玉社が描かれているが、1間×1間の小規模な建物である。周辺は何もなく、おそらく農地か荒地になっていたと考えられる。中世の包含層の上層には、数枚の江戸時代の水田面が確認され、間層に砂が見られているところから、水害で砂が被つてしまつた水田に土盛りをして、新たな水田を造っていることが考えられる。

今後の課題 遺跡の全体像については道路のみの発掘であり、遺構の規模や性格がわからないものが多かつた。遺構の全体像が何となくつかめたのは、平成17年度に7区を調査した成果によるものが大きく、カワラケ溜まりの広がりや礎石建物址の特殊性について理解を深めることができた。発掘調査の他、文献史料上に見られる食器や食物について考察したが（柳川 2006. 3）、本報告書では遺物について充分な考察はできな

かった。本遺跡で最も多く出土した遺物はカワラケであり、また、磯並遺跡・御社宮司遺跡・諏訪市神宮寺跡・諏訪神社上社本宮境内遺跡・下諏訪町旧御射山遺跡・武居遺跡でも数多くのカワラケが出土している。これらの遺跡と荒玉社周辺遺跡のカワラケについて、より一層の分析が必要であると思われる。

今回の発掘調査と、その後に行った7・8区の調査によって、遺跡の性格が徐々にではあるがわかりつつある。この遺跡は、中世の「大町」の跡であると言われていたが、やはりその言い伝えにふさわしい遺跡の規模と遺物が出土した。当時の状況については、守矢文書などに詳細に記録されており、記録内容と遺跡の内容が一致しており、文献史料まで揃っている非常に稀な遺跡である。

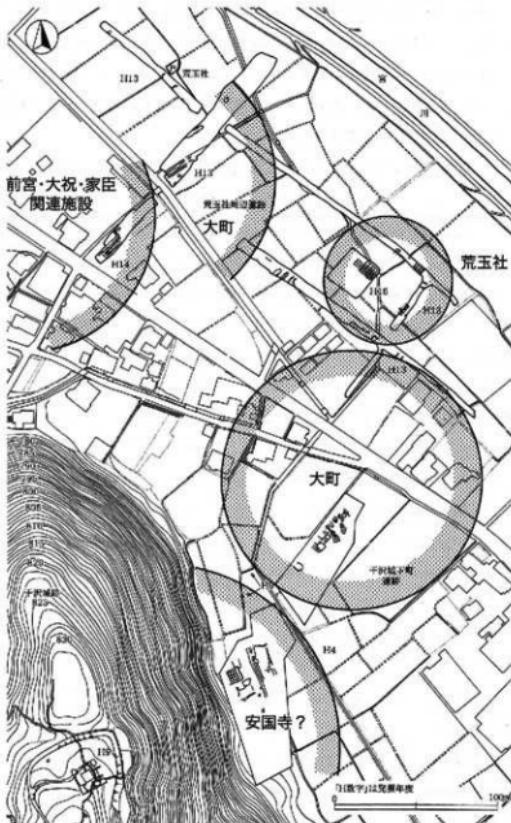
出土遺物では、陶磁器の他に、多くの木製品が出土し、食器以外の木製塔婆や人形などの様々な道具により、中世の人々の信仰について考えられる資料を得る事ができた。

食器類では、京都系のカワラケが出土するなど、京都からの文化が、安国寺の僧侶や室町幕府の奉行人である諏訪氏を通じて、また、直接諏訪の人々が京都へ行くなどしてもたらされたことが考えられる。

他に、遠方からのもたらされたものの中に珠洲焼がある。中南信地方は非常に出土量が少ないようであるが、干沢城下町・荒玉社周辺遺跡から出土している。

出土遺物の主体をなすものは瀬戸美濃地方から運ばれた数々の陶磁器があり、諏訪地方の周辺の遺跡からもこれほどまでの量の遺物が出土するのは稀である。茶道具が多く出土することもこの遺跡の特徴であるといえる。また、象嵌状に模様を付けた、特殊な瓶がもたらされている（図版30-6）。

これらの遠方の文物がもたらされたのは、諏訪上社に政治的・文化的な求心力があり、上社周辺に広がる大町に人々が集ったからであると考えられる。中世においては諏訪上社周辺が信濃国の重要な拠点であり、中世の「都市」であったと言えよう。



第73図 荒玉社周辺・干沢城下町遺跡の景観（1/3000）

〈参考文献〉

・自治体史

鳥居龍藏 1924 『諏訪史 第一卷』 信濃教育会諏訪部会

信濃史料刊行会 1956 『信濃史料 第一卷上』

1954 『信濃史料 第四卷』

1959 『信濃史料 第十四卷』

1959 『信濃史料 第十三卷』

1971 『新編信濃史料叢書 第三卷』

1971 『新編信濃史料叢書 第七卷』

1972 『新編信濃史料叢書 第二卷』

信濃史料刊行会

諏訪史談会 1958 『諏訪史蹟要項』十六 諏訪史談会 (1996 『復刻・諏訪方史蹟要項 十六 茅野市宮川篇』 郷土出版社)

茅野市 1986 『茅野市史 上巻 原始・古代』

茅野市 1986 『茅野市史 別巻 自然』

茅野市 1987 『茅野市史 中巻 中世・近世』

諏訪市文化財専門審議会 1997 『改訂 諏訪市の文化財』 諏訪市教育委員会

安国寺史友会 1997 『ふるさとの歴史を刻む－安国寺史友会三十年のあゆみ（付）史跡案内』

安国寺区誌作成委員会 2002 『安国寺区誌』 茅野市安国寺区

・論文・資料

古泉 弘 1983 『江戸を掘る』 柏書房

守矢昌文 1994 「発掘成果よりみた干沢城下町遺跡の様相－B区第1号池状遺構のあり方より見た町の終焉について」『会報』No.35 諏訪考古学研究会

中世土器研究会 編 1996 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

瀬戸市埋蔵文化財センター 1996 『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』

小野正敏 編集代表 2001 『圖解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会

瀬戸市埋蔵文化財センター 2001 『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会「戦国・繩豊期の陶磁器流通と瀬戸・大窯製品－東アジア的視野から－ 資料集』

柳川英司 2006 「中世における食器の使用について－諏訪神社の神事と発掘の成果から」『新尖石繩文考古館開館5周年記念 考古論文集』 茅野市尖石繩文考古館

・報告書

鶴岡幸雄・守矢昌文・樋口公夫・宮坂光昭 1983 『高部遺跡』 茅野市教育委員会

鶴岡幸雄・守矢昌文・宮坂光昭 1987 『磯並遺跡』 茅野市教育委員会

宮坂光昭・高見俊樹・五味裕史・小林深志 1987 『諏訪神社上社遺跡』 諏訪市教育委員会

鶴岡幸雄・守矢昌文・小林深志・宮坂光昭 1990 『狐塚遺跡』 茅野市教育委員会

守矢昌文 1991 『上原城下町遺跡』 茅野市教育委員会

茅野市教育委員会 1991 『茅野市遺跡台帳』
守矢昌文 1993 『十沢城下町遺跡』 茅野市教育委員会
功刀司・柳川英司 1998 『十沢城跡』 茅野市教育委員会
功刀司・柳川英司 1998 『十沢城下町遺跡』 茅野市教育委員会
茅野市教育委員会 2000 『茅野市遺跡台帳』
柳川英司 2005 『上原城下町遺跡』 茅野市教育委員会
柳川英司 2005 『荒玉社周辺遺跡Ⅱ』 茅野市教育委員会

〈荒玉社周辺遺跡の公開〉

荒玉社周辺遺跡については報告する機会がたびたびありました。内容については下記のとおりです。

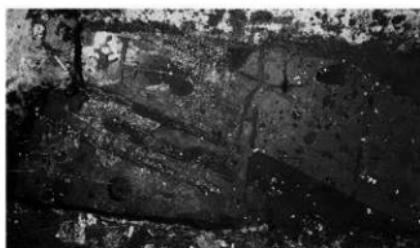
- ・講座
荒玉社周辺遺跡現場見学会 平成13年9月22日 於 荒玉社周辺遺跡2区
- 第14回 諏訪地区遺跡調査研究発表会 主催 諏訪考古学研究会 平成14年2月11日 於 下諏訪総合文化センター企画展 「守矢文書と前宮周辺－荒玉社周辺遺跡を中心として」 平成14年10月19日～11月24日
於 茅野市神長官守矢史料館
- 「歩く見る聞く」諏訪を知る歴史講座 「室町時代の諏訪～前宮周辺の景観について～」 平成14年11月6日
於 諏訪市公民館
- 第15回 諏訪地区遺跡調査研究発表会 主催 諏訪考古学研究会 平成15年2月11日 於 諏訪市公民館企画展 「守矢文書と中世と人々の暮らし」 平成15年7月26日～9月15日 於 茅野市神長官守矢史料館
- 第17回 諏訪地区遺跡調査研究発表会 主催 諏訪考古学研究会 平成17年2月11日 於 諏訪市文化センター内蔵遺跡研究会シンポジウム「海なき国々のモノとヒトの動き～16～17世紀における内陸部の流通～」
「長野県中・南信地方の様相2～瀬戸・美濃流域の中の在地土器と遺跡の性格について～」
平成17年11月19日・20日 主催 内蔵遺跡研究会 於 帝京大学山梨文化財研究所
- 遺跡調査スライド報告会 速報縄文の里茅野を掘る Vol.2 '01～'05' 「荒玉社周辺遺跡の開拓について」
平成18年1月15日 於 尖石縄文考古館
- 第18回 諏訪地区遺跡調査研究発表会 主催 諏訪考古学研究会 平成18年2月11日 於 諏訪市文化センター



(1) 1区空撮写真（北東より）



(2) 1区主要部



(1) 1区北西側



(2) 1区中央部



(3) 1区全景（南西より）



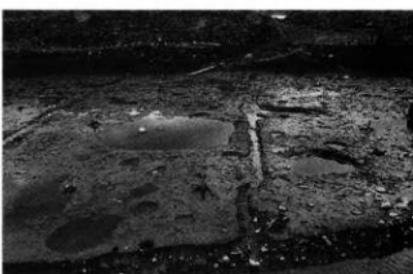
(5) 1区グリッド ソ36付近（北西より）



(4) 1区全景（北東より）



(6) 1区 2号清跡はか（北西より）



(7) 1区方形竖穴はか（北西より）



① 1区1号井戸址（東より）



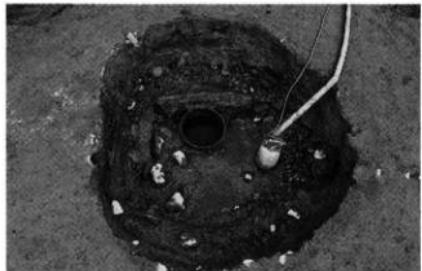
② 1区1号井戸址（南東より）



③ 1区1号井戸址草状炭化物出土状況（南東より）



④ 1区1号井戸址草状炭化物出土状況（南東より）



⑤ 1区1号井戸址（北西より）



⑥ 1区1号井戸址（北西より）



⑦ 1区2号井戸址（北東より）



⑧ 1区3号井戸址（北西より）



(1) 1区3号井戸址（西より）



(2) 1区3号井戸址（南より）



(3) 1区3号井戸址（西より）



(4) 1区4号井戸址（北西より）



(5) 1区5号井戸址（西より）



(6) 1区5号井戸址（南東より）



(7) 1区1号方形堅穴（北西より）



(8) 1区33号土坑（北東より）



(1) 1区33号土坑柱穴出土状況（東より）



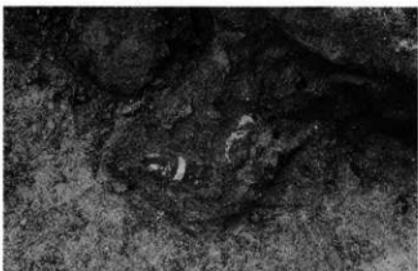
(2) 1区43号土坑（東より）



(3) 1区72号土坑（南東より）



(4) 1区2号溝址（北東より）



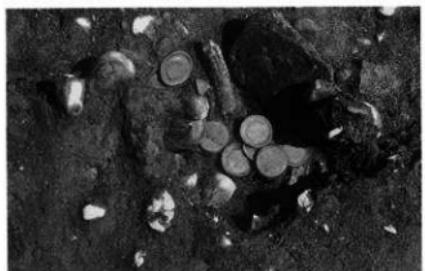
(5) 1区2号溝址出土漆器（北より）



(6) 1区650状況（北東より）

(5) 1区2号溝址（北東より）

図版 6



(1) 1区1号カワラケ溜まり（北西より）



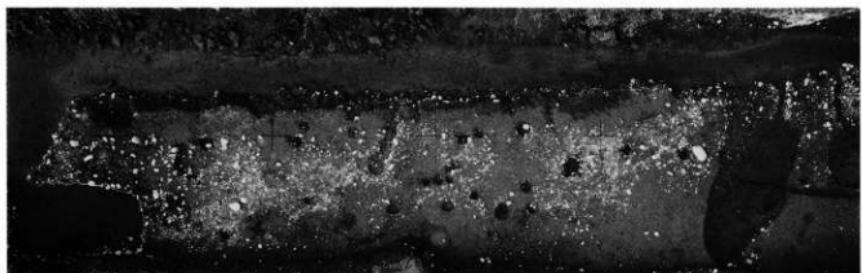
(2) 1区1号カワラケ溜まり（北東より）



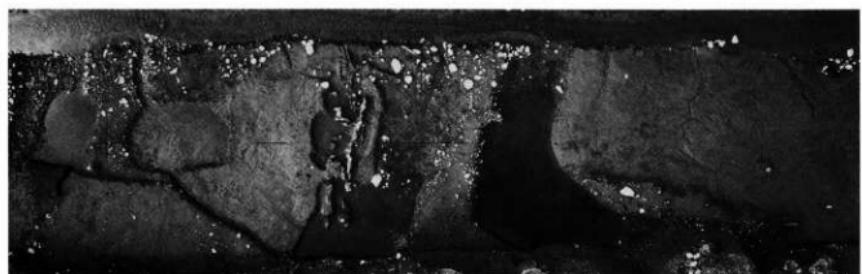
(3) 2区空撮写真（北西より）



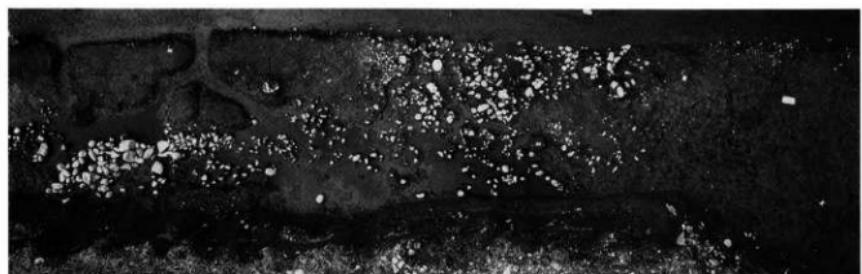
(4) 2区空撮写真



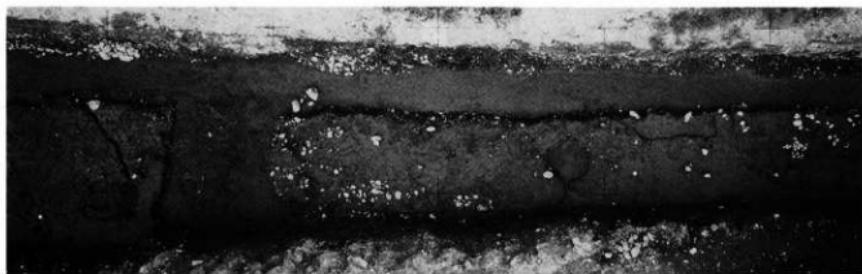
(1) 2区グリッド A45周辺



(2) 2区グリッド Y49周辺



(3) 2区グリッド R59周辺



(4) 2区グリッド O63周辺

図版 8



(1) 2区(北西より)



(2) 2区(南東より)



(3) 2区(北東より)



(4) 2区グリッド ア45周辺(北西より)



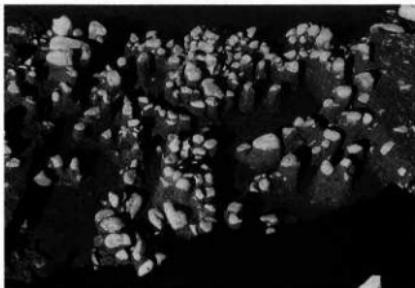
(1) 2区1号溝址（南西より）



(2) 2区2号溝址（南西より）



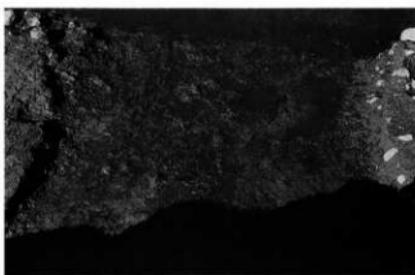
(3) 2区3号溝址（南西より）



(4) 2区4号溝址（南西より）



(5) 2区5号溝址（北東より）



(6) 2区5号溝址（南西より）



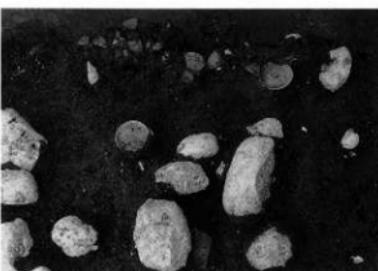
(1) 2区6号溝址（南西より）



(2) 2区6号溝址（南東より）



(3) 2区6号溝址付近木柱・1号掘立柱建物址（南東より）



(4) 2区2号カワラケ溜まり（南西より）

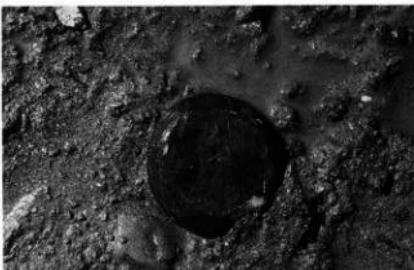


(5) 4号溝址集石（南東より）

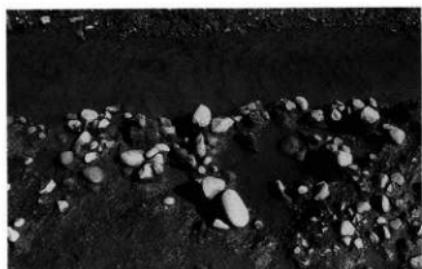
(6) 管溜より



(1) 2区16号集石（北西より）



(2) 2区16号集石出土漆器（652）（南東より）



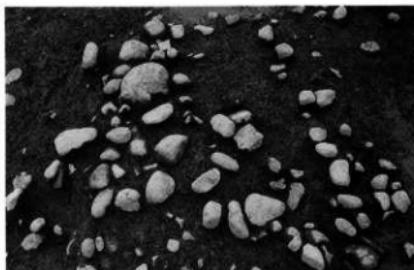
(3) 2区310号土坑（南西より）



(4) 2区3号集石（北西より）



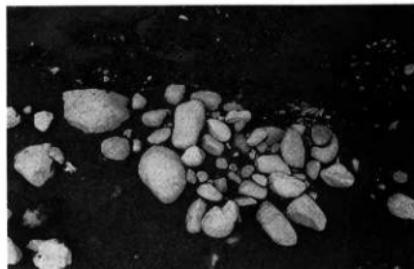
(5) 2区2・3号集石（南西より）



(6) 2区2・3号集石（北西より）



(7) 2区2・3号集石出土遺物（564）（北より）



(8) 2区7号集石（南西より）



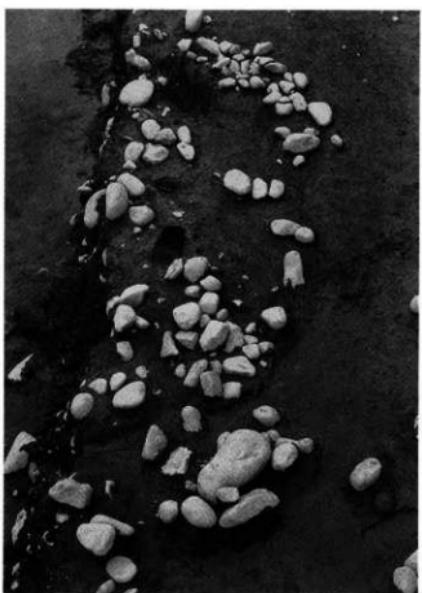
(1) 2区8・9・10号集石（南東より）



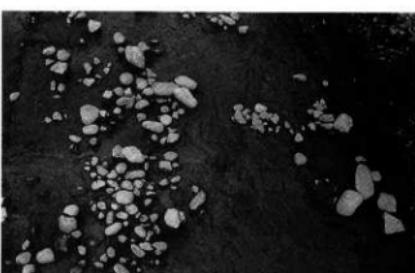
(2) 2区9号集石（南西より）



(3) 2区15号集石（南西より）



(4) 2区4号集石（北西より）



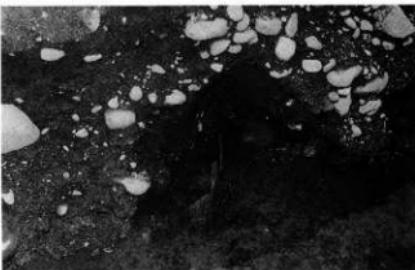
(5) 2区5号集石（北西より）



(6) 2区5号集石付近出土木柱（北西より）



(1) 2区12号集石（北西より）



(2) 2区7号井戸址（西より）



(3) 2区7号井戸址（西より）



(4) 2区585出土状況（南東より）



(5) 2区585出土状況（北西より）



(6) 2区502出土状況（南東より）



(7) 2区グリッドN59検出土坑（北東より）



(1) 3区(北東より)



(2) 3区(南西より)



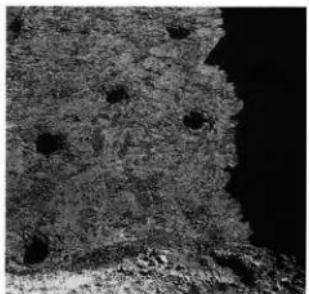
(3) 道路上空から諏訪湖を臨む(南より)



(1) 4区空中写真



(2) 4区空中写真



(1) 4区グリッド
△26検出柱穴



(2) 4区10号溝址 (北西より)



(3) 4区9号溝址 (南西より)



(4) 4区9号溝址 (北西より)



(5) 4区9号溝址 (南西より)



(6) 4区9号溝址内出土遺物 (南西より)



(7) 4区428号土坑 (北西より)



(8) 4区グリッド テ・ト (北西より)



(1) 4区グリッド ス45～タ43検出土坑（北西より）



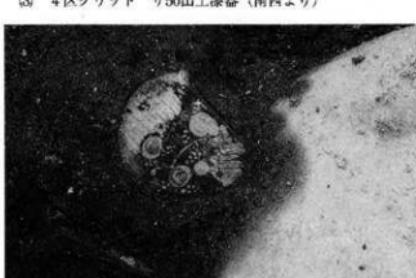
(2) 4区グリッド サ50（北西より）



(3) 4区グリッド サ50出土漆器（南西より）



(4) 4区グリッド コ52検出箸油まり（南西より）



(5) 4区グリッド サ53出土漆器（659）（南東より）



(6) 4区6号井戸址
(北東より)



(7) 4区6号井戸址（北より）



(1) 4区グリッド キ54検出木滲り（北東より）



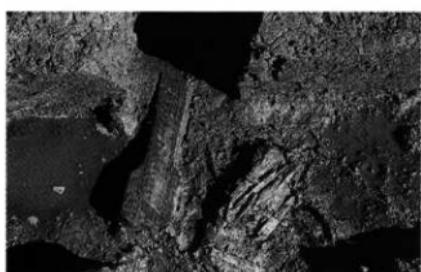
(2) 4区グリッド キ54検出木滲り（北西より）



(3) 4区グリッド キ55検出木滲り（南東より）



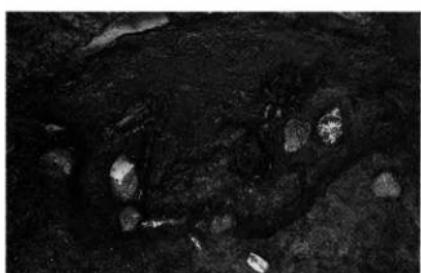
(4) 4区8号清跡出土 キ56検出漆器（北東より）



(5) 4区グリッド キ56出土木製品（666）（南西より）



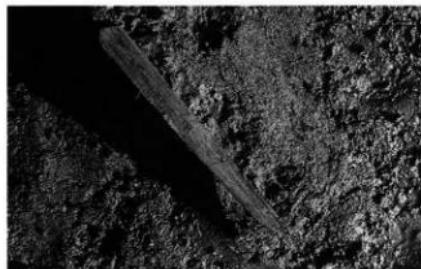
(6) 4区グリッド キ56出土下駄（704）（南西より）



(7) 4区429号土坑（南西より）



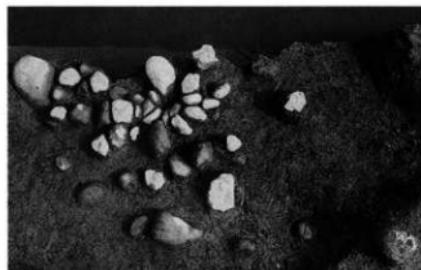
(8) 4区8号清跡内集石（南東より）



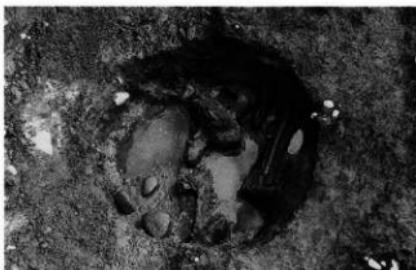
(1) 4区689出土状況（東より）



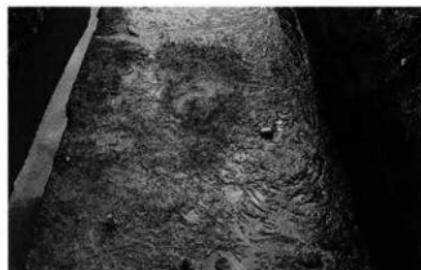
(2) 4区7号集石・430号土坑（北西より）



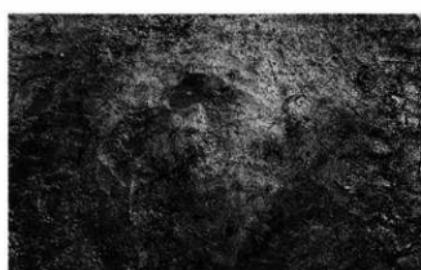
(3) 4区17号集石（南東より）



(4) 4区17号集石（南東より）



(5) 4区グリッド E-60（北西より）



(6) 4区1号焼土址（北西より）



(7) 4区グリッド E-60（北西より）



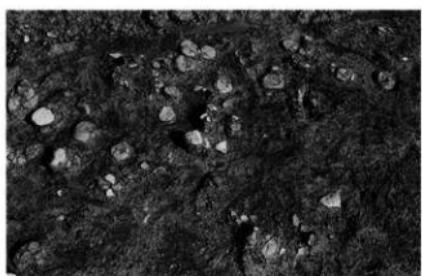
(1) 4区グリッド A64-1e62 (北西より)



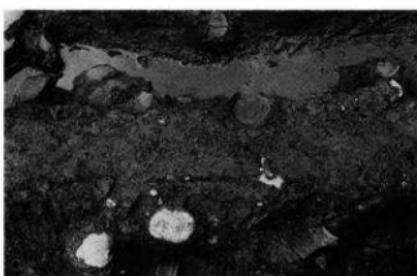
(2) 4区357号土坑 (北西より)



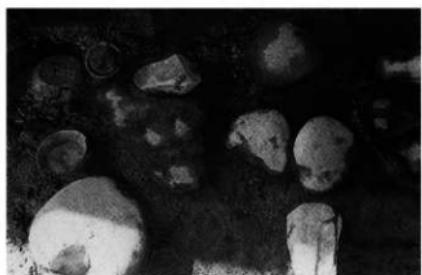
(3) 4区1号碇石建物址 (北西より)



(4) 4区1号碇石建物址内カワラケ溜まり (南西より)



(5) 4区1号碇石建物址内遺物出土状況 (南西より)



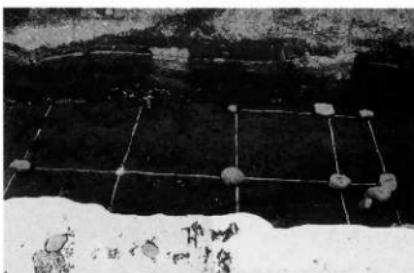
(6) 4区2号カワラケ溜まり (北東より)



(7) 4区1号碇石建物址 (南西より)



(1) 4区1号礎石建物址（北西より）



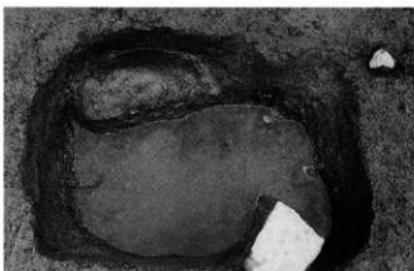
(2) 4区1号礎石建物址（南西より）



(3) 4区381号土坑（北東より）



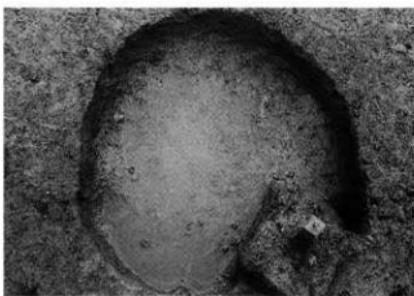
(4) 4区383号土坑（北より）



(5) 4区406号土坑（北東より）



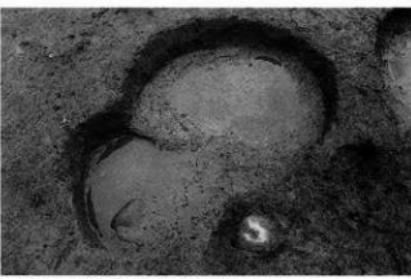
(6) 4区403号土坑（北より）



(7) 4区403号土坑（北東より）



(1) 4区404・405号土坑
(東より)



(2) 4区404・405号土坑 (北より)



(3) 4区グリッド W65~Y66 (北東より)



(4) 4区3号礎石建物址 (南東より)



(5) 4区3号礎石建物址 (北西より)



(6) 4区3号礎石建物址石 A (北東より)



(7) 4区3号礎石建物址石 A (北西より)



(8) 4区3号礎石建物址石 C (北東より)



(1) 5区遠景（北東より）



(2) 5区空中写真



(1) 5区1・2・3・4・5号礫石建物址・3号清址



(2) 5区1・2・3号溝址



(1) 5区（南西より）



(2) 5区南西側（北東より）



(3) 5区1号礎石建物址（北西より）



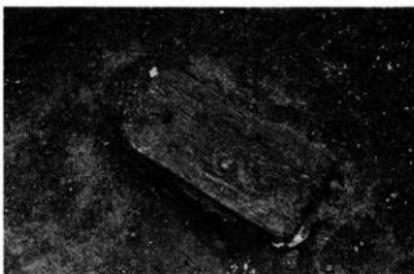
(4) 5区1号礎石建物址（南東より）



(5) 5区1号礎石建物址（南東より）



(6) 5区礎石付近出土遺物（412・463・534）（北東より）



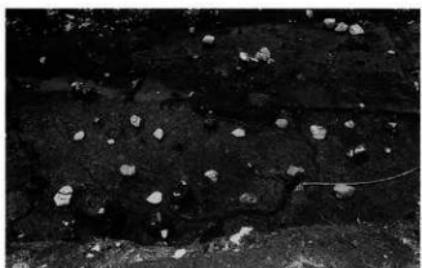
(7) 5区礎石付近出土下駄（708）（南東より）



(1) 5区礎石ト付近出土遺物（南東より）



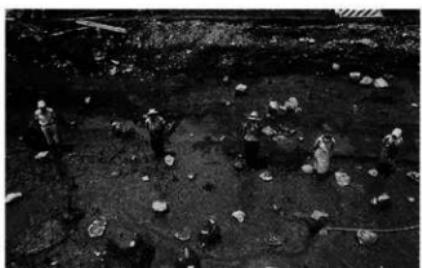
(2) 5区礎石リ付近出土遺物（南より）



(3) 5区2・3・4号礎石建物址（南東より）



(4) 5区2・3・4号礎石建物址（南西より）



(5) 5区2号礎石建物址（人の立っている礎石）（南東より）



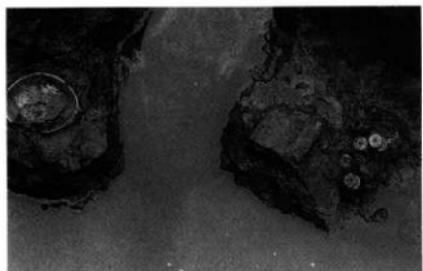
(6) 5区礎石ヨ（北東より）



(7) 5区礎石レ（南東より）



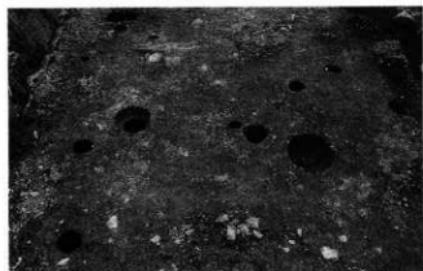
(8) 5区3・4号礎石建物址（人の立っている礎石）（南東より）



(1) 5区礫石や付近出土遺物（東より）



(2) 5区貼り床（北東より）



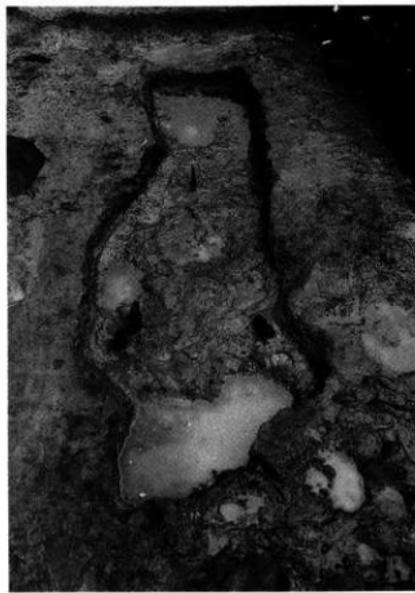
(3) 5区貼り床（北東より）



(4) 5区460号土坑（南東より）



(5) 5区1号調査（北西より）



(6) 5区2号調査（北東より）



(1) 5区3号溝址（北東より）



(2) 5区3号溝址（南西より）



(3) 5区3号溝址内出土遺物（723）（北西より）



(5) 5区4号溝址（北東より）



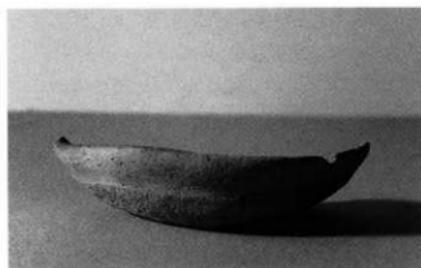
(4) 5区3号溝址付近出土遺物（674）（北東より）



(1) 339



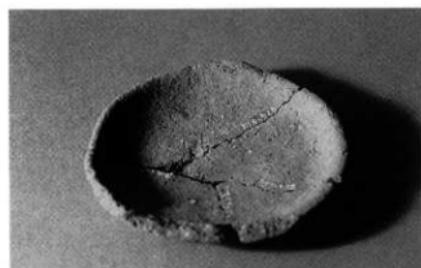
(2) 339



(3) 341



(4) 341



(5) 357



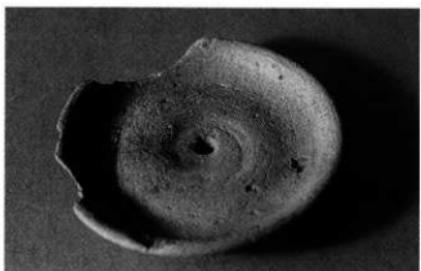
(6) 357



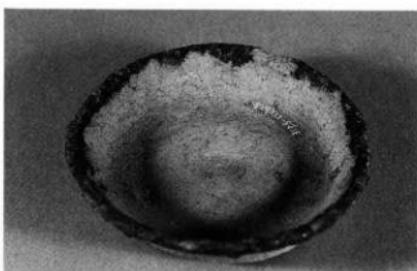
(7) 181



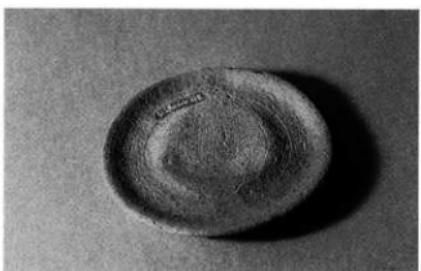
(8) 181



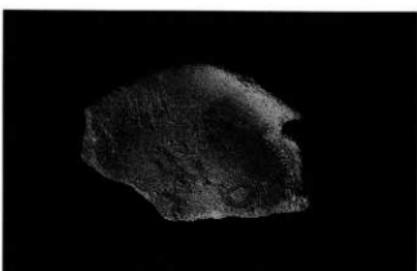
(1) 69



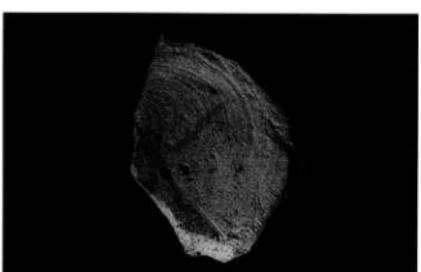
(2) 347



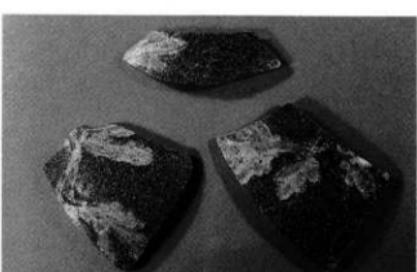
(3) 15



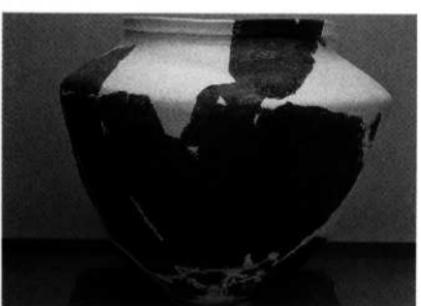
(4) 64



(5) 232



(6) 古瀬戸瓶子



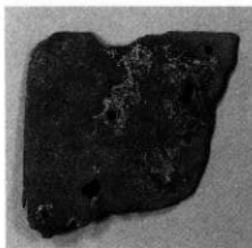
(7) 585



(8) 652



(1) 659



(2) 4区出土金属製品



(4) 680



(3) 743



(5) 出土した下駄



(6) 700



(7) 694



(8) 695



(9) 697



(10) 698



(11) 699



(1) 荒玉社（区画整理前）



(2) 荒玉社移転後の調査



(3) 発掘風景（1区）



(4) 発掘風景（2区）



(5) 発掘風景（4区）



(6) 遺跡見学会



(7) 遺跡見学会



(8) 発掘に携わった人々（平成13年度）



(9) 発掘に携わった人々（平成14年度）

報告書抄録

ふりがな	あらたましゃしゅうへん					
書名	荒玉社周辺遺跡					
副書名	茅野市安国寺姫宮土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書					
編著者名	柳川英司					
編集機関	茅野市教育委員会					
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL 0266-72-2101					
発行年月日	西暦2006年3月24日					

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
荒玉社周辺	茅野市 宮川安国寺	20214	319	35° 59' 26"	2001.04.02 ~ 2001.12.28	5,000m ²	茅野市安国 寺姫宮土地 区画整理事 業
			324		2002.05.25 ~ 2002.07.03	550m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒玉社周辺	集落跡・ 神社址 か	中世	土坑 方形堅穴 礎石建物跡 掘立柱建物跡 溝跡 井戸址 カワラケ溜まり・集石 箸溜まり 貼り床跡 焼土址 埋設壺	479基 2基 7軒 2軒 20基 8基 19基 2基 3 3 1	陶磁器・カワラケ・瓦器・土 器・漆器・下駄・曲物・箸・ 硯・金銅製六器・錢貨・ 石臼・搗き石・砥石・木製卒 塔婆・人形

荒玉社周辺遺跡

——平成13年度～平成17年度 茅野市安同寺能宮土地区画整理事業
に伴う緊急発掘調査報告書——

平成18年3月17日 印刷

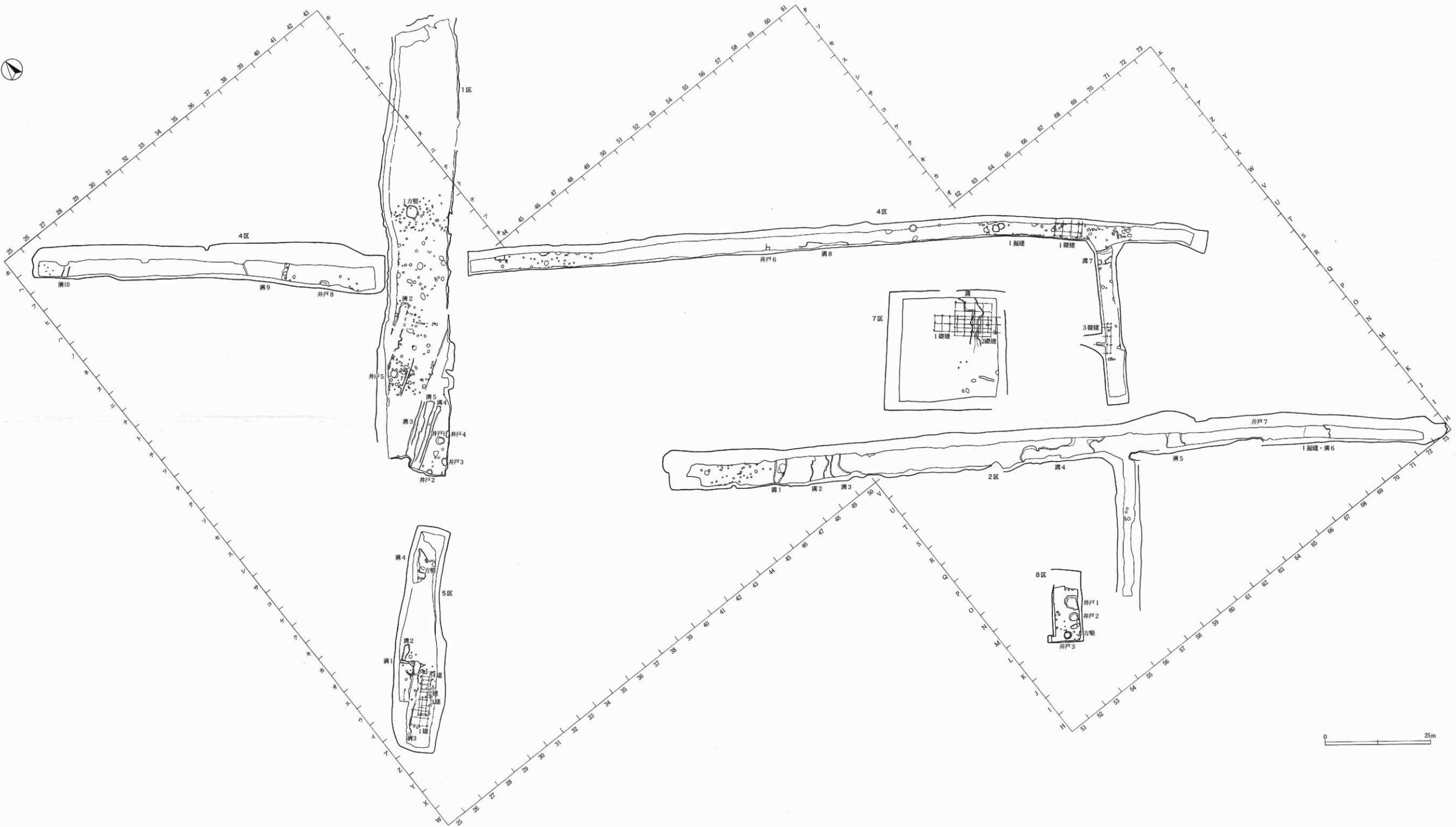
平成18年3月24日 発行

編集
発行

茅野市教育委員会
長野県茅野市塙原2丁目6番1号
☎ (0266) 72-2101㈹

印刷

永明社印刷所
長野県茅野市塙原2丁目12番30号



付図 荒玉社周辺遺跡全体図 (1/500)

0 25m

